
戦国BASARA ~ 白き鬼姫物語 ~

紺碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA ～白き鬼姫物語～

【Zマーク】

Z0964Q

【作者名】

紺碧

【あらすじ】

とある小国にて、一人の武将がありました。

髪は白く、
目は赤く、
着ている服も変わっています。

しかし、一度戦場に立てば、一匹の鬼。

人はいつしか、『鬼姫』と呼ぶようになりました。

1 鬼姫、現る！

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 1 * 鬼姫、現る！

*

何だろう、もう嫌になるなあ・・・。

「何奴！？」

「いやいや、何奴じやないつて。見て分かるでしょーよ？敵さんで
す。」

ゴーデ

コレで何人目だろう？

疲れたんだけど・・・。

「ただ殴るだけってのも、なあ・・・。」

「…せこせ」

ザシュツ！

「油断は禁物だ！亜鬼十！」

「敏春兄！いや～、俺もう面倒ですよーーーーー。」

「面倒つて・・・。」

「つーことで・・・、できたらおさらばしたいなあと思つたんだけ
どね。・・・そつもいかないわけ、だッ！」

今度は蹴り倒してやつた。

てか、鎧壊れた！？

「あ、相変わらずの馬鹿力・・・！？」

「こいつちだつてビックリなんですよね。」

「こ、この男・・・！人か・・・！？」

「残念！まつこと残念ながら、人間なんですよねー。」

つーことで、と体勢を低くし、駆け走る。

「ニギヤ、勝負ー。」

* * *

「敏春兄イー！暇ですかーーーあつそびつまじょー。」

「・・・あ～・・・。」

呆れられました。

「悪いが、俺は政で忙しい。」

「分かつてる。でも、俺が暇なんで遊べ。」

「・・・普通自分の主にそんなこと言いつか?」

「仕方ない。敏春だもん」

グッ！と親指を出して笑う彼、亜鬼十。

「・・・なあ亜鬼十。いい加減、「STOP!その話はNOTH

「……」・・・お前どつかの武将みてえ・・・。

「竜ちやんね。」

「友達みたいに言ひてんじやねえ。」

「でもや、友達だったら良いのにねえ。眞眞友達だったら、戦なん
てないのに・・・・・・。」

「・・・幽鬼十・・・。」

「ああー、でも友達でも喧嘩ぐらうするね。完全に死人でそうな。」

「いや、おこー?そんな結論出すなよーそれじゃなりたくないなれ
ねえよー!」

「だねー。・・・もうこやれ、アダマ安寧アダマから文が来てるよ。」

「つで、それを先に言えー。」

「ラブレタージゃなこよ、きつと。」

「?・・・?」

「いや、屁こや。大丈夫、敏春兄には縁のないものだから。」

「・・・なんだかうな?少々腹にくるものが「嘔吐?」「違つー。」

もう良い、と文を読む敏春。机を挟むように向かいに座る亜鬼十は天井を見上げるよつに寝転び、「ゴロゴロし始めた。

「！？・・・」「、コレは・・・ッ！？」

「何ー？・・・まさか・・・ー？」

ゴロゴロしていた亜鬼十は剣幕な顔で起き上がり、敏春の手紙に視線を向ける。

「・・・あ、ああ・・・、そのまさかだ・・・ッ。」

対する敏春も剣幕な顔だ。

「敏春さんと縁のない恋文「そこ」が！？しかもせつものソレか！…
…つて、違うんですか？」

嫌だコイツ、ってな感じに見られたよ。

「・・・。甲斐の虎を知っているか？」

「武田君からの恋文「やめいー」・・・」おまけ
「」

「吐くな、アホ！！」

「吐いてないよ。畠の中のもの出してなにから。で、何? 甲斐の虎つて武田信玄でしょ?」

「我が國に攻め入らうとしておる。」

「・・・は？」

• • • o

「マジ? ・・・ でもさあ、何で? こんな小国一につに・・・。」

「多分、お前かもな。」

?

「お前、他国で結構有名になつていてる。」

「ソレは知ってるけど、何？俺に興味があると？」

፳፻፲፭

戦か。暇つぶしになつても、俺は嫌だなあ。

「当然だ。しかも、あの一揆から一年とはいえ、まだ国としては安定しておらん。そんな状況で戦が出来ようか。」

「じゃあ、『誰がやるか、コノヤロー』って送つてください。」

「おまえの妹で玉川ちゃんだよ。」

「いやいや、ijiは主君の如でしょ？」

「俺はまともに書く。そんな失礼なもの出したら完全に戦だ。」

「その時は船を武田君に突き出してやる。」

「テメエ……シー」

「まー冗談抜きで……『天下に興味ない』ってことと、『中立国』だつてことを書いてやれば良いんじゃない?」

「やつだな。」

そして、武田軍への文を書き始める敏春だった。

「もし……。」

ピタリと筆が止まる。

「もし戦になつたらわあ、俺が何とかするよ。」

「……面倒とか言つて帰るなよ。」

「『面つ』ことそれ！？？？、まあ大丈夫だ。」

「心配だ。」

「任せたぞ、ってこいつと一緒にだつてー。」

「任せたー。」

「……。」

「任せた。お前に、なー。」

「……」
「わが主君ー。」

ハイタツチを決め、亜鬼十は部屋をヒヨイツと出ていった。軽やかな足取りで、その足は城下の良く見える、城の一一番高い場所に向く。城下の人たちはあつたかい人ばかりだ。お人好しが多いというのもある。だが、そんな人がいるのも、この国が平和な証拠だ。

「だから、守らねえとなー」の國を愛する恩人の為にもよ

その後、亜鬼十は安曇と共に甲斐へと赴く。

コレが『甲斐の虎』と『鬼姫』の初の対峙となる。

2 鬼姫、そして甲斐の虎

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 2 * 鬼姫、そして甲斐の虎

*

甲斐は、何故か団子が上手かつた。

いや、何故かとか可笑しな表現なんだだけね。
でも、とにかく美味しいよ。

三色団子なんか絶品だね、この店。

「おかわりくださいー！」

「・・・・・。」

「あれ？^[安曇さん]、どうかしたー？」

「・・・・はあ～・・・・。」

「何何？敏春兄とやつくりな溜息ですね。」

「呆れている。」

安曇はただそれだけ言った。

あとは目で訴えている。

自分は何のために甲斐に赴いたのか、目的を憶えているか、と。

「甲斐にはお使いできたのは憶えてるんだけどね。いやあ、マジ美味いわ。」

天晴れだね。」「

「・・・」

安曇は忍。

今回は従者に変装してついてきている。
が、表情豊か、とはいかなない安曇の顔はまさに無表情。
まあ、呆れ顔が出来るようになつた。

日の前の人物のお陰で。

だが、この日の前の人物がかなりの実力者であることは、自分も知つてゐる

し、実際にその力を見ている。

知識力も半端ではない。

よく知られていない南蛮のことも良く知つてゐるし、言葉も知つてゐる。

それについては、正直敬意を表するものがあった。

「 もうだ これお土産に持つてこいりうかな。」

「 。。。。」

普通は自分の土地のものを土産にするものだらう。
なんて、思つても言わないのが安曇である。

亜鬼十はそんな事は露知らず、お土産として持つてこへりとした。

* * *

「『『鬼姫』が態々』の場に赴くとは、思ひもせぬことよ。」

大きな部屋で『甲斐の虎』武田信玄と会っていた。

横にあの真田幸村も控えている。

会つていきなり意外そうな顔をしていたが、俺をどんな奴だと思つていたの

だろうか？

少し気になるとこりがだ。

「うーん……、嘘っぽい。」

「ん？」

「人の国に忍侵入させといて何言つてんですかー？」

「…」

安曇は珍しく田を見開いた。

甲斐の忍が？？

自分が知らぬ間に・・・？

「知つておつたか？これはまいつた。」

「やう思つなら戦の」とはなかつたことにして下を一い。迷惑でーす。」

「つて、亜鬼十様！？あなたさつきから何て物言いなのですか！！」

相手はあの甲斐の虎なのですよーと、女靈は慌てて自分の主を非難する。

が、そんな言葉を聞く主でもなかつた。

「貴殿らの国は小国である。」

「血覚じてますよ。」

「しかし、貴殿らの国のは、一田置かれるものがある。一揆の中心となり

その後を背負つた主君、敏春殿もそれには値する。が、一番は貴殿じや。

「・・・安曇(?)？」

「いえ、アナタですー。」

「はあ。でも、ソレ尊でしょ? 僕強くないから。『鬼姫』とか正直意味分か

らんので。」

「ソレが真であつたとして、ソレが戦をやめよつと他国は貴殿らの国を攻

撃するであろう。」

「・・・」の場を回避しても、また新たな嵐がやつて来るということか。」

「やつこひ」とこなる。」

「・・・俺は、戦が嫌いです。」

「！」

「大嫌いです。誰かが死にます。傷つきます。悲します。俺はソレが嫌で

す。主君もそれが嫌です。」

「ふむ。この文にもそのようなことが書かれておった。」

「甲斐の虎殿は、それを綺麗事と笑いますか？」

「笑いはせん。が、この乱世においてその考えは綺麗事であらう。」

「だよねー。でも、俺はその綺麗事を酷く気に入つてたりします。だから、

あの時一揆を手助けしました。」

途中面倒で帰るうかなあとか思つちゃつたりしましたけど。

「天下を取れば、和平をいつか……。いつか、なんて……。あ

はは、笑

えるわー。」

「？」

「はじめましてー。こんなのはー。で始まつて、友達になつてしまつて言えば

良いだけの話でしょ？皆仲良しになれば、天下とか取らなくとも和平は守ら

れるところなの。」

「天下取りにそれだけを求めるものしかおらぬのなら、問題はなか
わい。」

「現実は違つ、ですか？」

「うむ。」

「……うだんねえ……」

「ー？」

「くだんねえよー天下？んなもん取り合つて何が楽しいんだよ？命
よりも大

切なモンなんてねえんだぞ。それを承知で、天下取りなんかしてんのか？鹿

か！

「さ、先ほどから、貴殿はお館様に無礼である！」

黙つて睨んでいた真田幸村だが、我慢できなくなつたのだろう。立ち上がり、槍を亜鬼十に向けた。

「外野は引っ込んでくください。俺は甲斐の虎殿に話しています。

」

「だからこそ、某は黙つて聞いていたでござるなー。しかし、何たる暴

言ーお館

さまのお志も知らず、なんとこいつとを・・・ッ！－！」

「コレは俺個人の考えだ。非があるのなら、俺が一身に受けよう。俺はそう

思うからこそ、中立でありたい！それ以上でも、以下でもない。お
分かり申

したか？」

「……もし、他国が責めてきた際、いかがなさるか？」

「その時は、俺一人で潰す。」

「何！？」

「……貴殿一人で、どうにかなるというのか？」

「大将を潰せば良い話。それに、被害は最小限に限る。」

「……フフフ……。」

「？」

「ハハハハハハツ！ますます貴殿を知りたくなつた。戦の申し出は
取り消せ

ぬ。」

「……。」

「亞鬼十様。」

「……あっそ……。だつたら、今ここで決着つけませんか？日

を改める

なんて、面倒ですよ。」

「なつー?.

アナタって人は・・・と嘆いている。

もちろん、その日から云わってきたことだ。
と、あちら側から、真田幸村が甲斐の虎の前に立つ。

「お館さまーこの場は、この幸村にお任せください—!」

「うむ。良かう!—」

「安曇さん、下がつて!」

「はつー!」

「真田幸村、推して参るー!」

「エース君登場！ってね でも、何か勘違いしてない？」

「？」

「誰が殺し合ひじょうつったよ。」

「？？」

「『第一回 鬼姫VS紅き虎！鬼』じつ』対決！』 開催！」

「・・・・・・は？」

「は？じゃない！タ刻までに俺を捕まえられたら甲斐の勝ち！捕まえられな

かつたら俺の勝ち！勝つたほうの願いを敗者は必ず叶えなくてはならない。

「

どうだーと田を輝かせる亜鬼十に、この場の誰もが少なくとも呆れた。

それに幾分脱力した。

「・・・貴殿の変わつよつは噂以上のよひだ。」

「だつて、俺戦嫌いだし。しつちの方が平和じやね?」

「・・・。」

「ビーするー?」

「・・・行け、幸村よ。」

「お、お館さまー?」

「どんな形であれ勝負に変わりなー。」

「モーこなくつちやーあ、あと、武器の使用は認めるナゾ、バサラ
技は認め

ない。OK?」

「・・・南蛮の言葉・・・?」

「了承されましたか?つて聞きました。」

「つむー。」

「よしー。じゃあ、ゆうきーが鬼ねーー。」

「・・・某のことか?」

「アリヤツ 三つ数えてね。安曇ー。」

「・・・はい。・・・開始ー。」

もつ白糞になつたのか、諦めたのかはさておき、安曇の合図で亜鬼
十はその

場から走り去つた。

そして、幸村は・・・。

「・・・ひ、一つ・・・、・・・、二つ・・・、

律儀に数えています。

「（真面目ですね・・・）」

ある意味呆れてしまつ安曇だった。

3 鬼姫、そして紅き虎

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 3 * 鬼姫、そして紅き虎

*

見事なものだ・・・、あ！ 簡ツー！

ご想像通り、只今竹やぶの中。

一応敷地内だしねえー。

それに、夕刻までつて結構時間あるんだよ。
流石にずっと走るの嫌だもん、俺

「」の筈持つて帰つても良いかなあ？・・・ま！黙つてればいつか

「アーティフ...? キルギス...」

とは言つても、亜鬼十は一ヶ口元に笑みを浮かべる。

この敷地は、い、うまで、無く、広い。

そんな敷地内にたつた一人を探し出すにはかなりの短時間だ。

「ゆつせーーなんでこじだつて分かつたのかなあ？」

「佐助が教えてくれたのだ！」

「なーる、ほビッ！」

「ー？」

亜鬼十が放った銀色は、いくつもある竹の一本に突き刺さった。

「君も参加して良いよー 多い方が楽しいモンね？」

「・・・やれやれ、参ったなあ・・・。」

なんで分かったの?といつよつな顔を向けられ、亜鬼十は一ヶコロ
と笑つて

みせた。

「鬼さん」「チラー、手ーのなーる方へー」

「なめてもひつちやあ困るなー。」

タンツ、と竹を蹴り、上から近づいてくる佐助。
そのスピードもかなりのものだ。

下手すれば捕まってしまう。

だが、それさえも楽しむかのように走り抜く亜鬼十に、全く追いつ
けない。

「早くしないと夕刻になるよ——」
「ち——ち——ん！」

「つおおおおおおおーお館さまのためえーー」の幸村ー全力で捕まえてみせ

るー！」

「てか、せひりや・・・ッ！？やめてよ、それ！？

あと一時間といったところだらうか。
徐々に、そして確実に日は落ちていく。

真っ赤に、そして橙に輝く夕日が彼ら二人を照らした。

ただその光景は、武将と忍びではなく、無邪気な童達が遊んでいる
ように見

えた。

* * *

安曇は一人、主人が戻るのを待っていた。
あれから数刻たつが、やはり捕まつていないのでだろう。
遠くから真田幸村の咆哮が聞こえる。

「安曇よ。」

「はー。」

「お主の主、そして君主である敏春殿を、如何様に思ひ？。」

「おー方は、我が國の誇れる武将。そして、英雄でござります。」

「ほほ。」

武田信玄は興味深げに問い合わせる。

「一揆が成功したのはあの一人の力故にでござります。」

「ふむ。噂でも聞いておる。が、しかし。わしが聞きとひことはそ
のよつな

「とではない。」

「？」

「お主から見た、一人の眞の姿じや。先ほどのは噂と変わらぬ。」

「・・・私は、一人の眞の姿など知る由もありません。しかし、見

たままの

お一人で良いのならば。」

「つむー。」

安曇は静かに話し始めた。

「当主・敏春様は人望に篤く、責任感の強いお方であります。政には積極的

に取り掛かり、國を強く想つております。それ故に、敏春様は自らの主君の

「横暴さが許せなかつたのでしよう。」

ですが・・・。

そこで安曇は言葉を切った。

敏春には人を束ね、協力させる力がある。だが、正直な話彼には彼自身戦う力を十分に持つていなかつた。

「弱くはありません。しかし、突破口となる力がございませんでした。」

「その突破口となつたのが、鬼姫殿であるな？」

「はい。」

忘れもしない。

お庭番でありながらも、自分も主君の横暴な政を許せず、敏春と共に闘してい

た。

そんな中で、突如現れたのが亜鬼十だった。

何処からやつてきたのか分からぬ不審人物でしかなかつた。が、

敏春は悟

つたのだろう。

この日の前の人物こそが、自分達の突破口を切り開いてくれる、と。

「敏春様の直感は見事に当たりました。我々は勢いに乗り城を落とし、前当

主を倒したのです。」

「敏春殿は素晴らしい勘の優れた男であるよ!じゅの。」

「はい。そして、我が主人・亜鬼十様は突破口となるほど実力を持つた武

将でござります。」

「ふむ!そなたの話を聞き、わしもそいつ思った。そして今回謁見し、確信し

た。あの者はとてもなく、強い!そして、純粋故に危険であろう。

「

「・・・」

亜鬼十は誰よりも純粋だった。

単純とも取れるほどに純粋で、そして残酷だった。

『仲良くしない人は、イラナイよね?』

『鬼姫』と呼ばれる所以はその時にある。

敵と判断したものには、決して躊躇しない。

戸惑いも無い。

無数の屍の上に立ち、敵であつた肉塊を踏み潰し歩く。血肉に塗れようとも、笑顔は絶やすことは無い。

だが、日常での彼は一変した。

まるで別人であつた。

敏春様や自分だけではない。

他の、共に戦った兵も驚くほど豹変するのだ。

「今も見ての通り。戦場以外ではああしております。敏春様を兄の
ように甘

えているのも珍しくございません。」

「……やうか。だが、もしかしたら……。」

「？」

信玄は幸村に『あの鬼姫と友になれるのではないか』と思つていた。

幸村は亞鬼十とは違う純粋さを持つていた。

真つ直ぐな投げることの無い信念を持ち、純粋さを忘れない。

この戦国の世では珍しい者であった。

「決めたぞ。」

「？」

「！」の勝負で我々が勝った後、同盟を組もう。」

「！？」

「奴の実力に興味はあるが、戦でなくとも垣間見えよ。」

「・・・。」

甲斐と同盟・・・。

ある意味どちらが勝つても同じような結果ではないだらうか……。

長く一緒にいた安曇は、何となく亜鬼十の願いが予想できていた。

きっと、今回もまた……。

4 鬼姫、結果

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 4 * 鬼姫、結果

ピューッ！－！

高い音が響いた。

これは安曇の持っている笛の音。

「勝負ありだよー。ゆつきー。せつかりやんー。」

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・つー」

「な、何なの、アレ・・・つー息も、きれてないじゃん・・・!？」

「ふーん じゃあ、帰ろう。ゆつやーー・さつやん！」

「…やめてしまひました。」

「笑顔を浮かべている亜鬼十には、汗の一つも見えない。息もきれていない。

正直悔しかつた。

これで、自分達は負けた。

お館様に見せる顔がない!

「…………ゆつきー…………？」

「うおやかたねああああああー。」

「…………元氣だね、ゆつきー。」

「や॥元氣ですかねやうのー。」

「ガシッ」

「うおおおおおおおー————。」

「うよ、田那ーー。」

悔しさに叫び、幸村は全速力で駆ける。

が、亜鬼十はその瞬間に幸村の背中にしがみつき竹やぶを去つて行つた。

それはそれは楽しそうに。

* * *

「お館わまあ……」

ものすごい勢いで戸が開いた。

そこには険しい顔をした幸村がいた。

「・・・その様子では、負けおつたか？」

「・・・はい・・・。」の勝負、決して負けとはならぬと分かつて
おりまし

た！が、某の未熟さゆえに・・・ツー

「ゆつせー、そんなに落ち込むことじやないつて。」

幸村の背後からヒヨコと顔を出すのは亜鬼十。

「！？亜鬼十殿！」

「アハハ 楽しかったーー安曇さん、ただいまーー。」

「・・・亜鬼十様、自重ください。」

「丁重にお断りさせていただきます。」

「・・・。」

「でね！おぼえてるかい？」の勝負に勝つたほうは、一つ願い事を叶えても

「うん！」

「おぼえてるわ。して、そなたの願いは何だ？」

「フフン……俺と友達になつてよー。」

「！？」

幸村や後から追つて隠れている佐助にとって、その言葉は以外であった。

そして、信玄もまさか自分と同じ願いであつたとは思わなかつた。

とはいへ、亜鬼十の『友達』が、信玄の『同盟』という意味なのか
といふと

、微妙に違つ。

ただ単純に、亜鬼十は友達になりたかつただけなのだ。

「友達・・・。それが、亜鬼十殿の願いに御座るか?」

「うん 甲斐の旨と友達になりたいなあ。」

「いや、しかし! 勝手にそのようなことをしてもよろしいのか? 勝負に負け

た身であるが、これは国同士の問題でありつ。貴殿の主はソレを承諾してお

るのか?」

「許可? ないよ。」

「ー? よ、みんなで御座るか・・・?」

「うん、問題ないよ。敏春兄は争い^{シテ}じを好まないからね。あの一揆は、ま

あ仕方ないんだ。争い^{シテ}じが嫌いだから起こしたんだからね。自分が主君に

なつて、一度と争い^{シテ}じしないと民に誓つたんだ。」

とほこえ、攻めてくる国に對しては、自衛する必要がある。
完全に戦なしどこいかない。

それが、この戦国の世なのだ。

「それで、友達になつてくれる？」

「・・・・せうらに不都合なれば・・・・、某は・・・・。お館様は・・
・?」

「うむ。わしも実は貴殿と友好関係を結びたかったのじゃ。」

「ホントーへ良かつたー これで断られたら、どうしようかと思つ
ちゃいま

したよー安曇わんー敏春兄に報告してくれます?」

「?亜鬼十様・・・。」

「俺は今日ここに泊まる。」

「なりません！突然そのよつな」とおっしゃられても困ります……。」

「えー！外暗こよー？」

「子供じゃないのですから、少しほ場を弁えて……それに、宿なら手配し

てあります。」

「……しうがなにな。折角ゆつせーと枕投げでもしうつかと思つたの

「」

「尚更ですー人様の所でそのよつなー？」

「……」じゅさんみたいだよ、安曇さん。

「私はオトンではありませんー。」

あ、言ひやがったよ……。

「それじゃあ、また今度良いかな？」

「ワシらは大歓迎じゃぞ、亜鬼十殿。」

「じゃあバイバイ！ ふさん！」

「げん・・・・？ って、大将にまで・・・・！」

「落ち着けよ、佐助。わしはそれで構わんぞ。」

「じゃあね、ふさん！ あと、俺の事は亜鬼十でいいからさあーーー。」

今度はしぐれの名物十産に持つてくるぞーーと、呆れ帰っている安曇に
話しながら

ら姿を消した。

その動きはまるで忍のようであった。

「変わった奴でしたね。」

そう言ったのは佐助だ。

それに賛同するように信玄も「・・・つむ」と短く答へる。

「でもまー悪くもないかもしませんね。敵になるよりかは・・・。

」

佐助らしからぬ言葉であったが、それは真意だった。
鬼ごっこごとく、いたつて平凡な遊びだったが、非凡でもあった。
自分たちから逃げる彼の動きは忍のようにしなやかで素早い動きだった。

もし、否、確實にアレが彼の実力といつわけではないだろう。

それに・・・。

バサラ者であるはずの奴は、力を見せなかつた。

そういうルールだったといつのもあるが、きっと使えても使わなかつただろ

う。

それほどまでに見せつけられてしまつたのだ。
悟つてしまつたのだ。

力の差を・・・。

「幸村よ。」

「…はい、お館さま…！」

「あの亞鬼十なる人物を、如何様な人物とみる？」

「はー、一見綺麗事とも取れる言動に見えますが、それを実現できる力をも

つ者とお見受けします！実力については実際垣間見えること叶いませんでし

たが、某たち以上の実力をお持ちとお見受けしました！」

「ふむ。わしも同意見じや。實際あの者には隙が一切無かつた。そして、遊

びといえど、本氣で捕えようと追つたそなたらから、完全に逃げ遂せたのも

事実。同時に、やり合つてみたくなつたのも、また事実じや。」

「大将、もしや…。」

「戦は取り消す。が、試合を申し込むことにする。されば、文句はあるま

い。」

「…・・・」いや、「うなづく」とやがり・・・。」

それがどんな結果を引き起こすのかは、誰にも分からぬ。
ただそこには、その先の結果ではなく、
亞鬼十の実力に対する興味だけが

あつた。

5 鬼姫、驚愕

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 5 * 鬼姫、驚愕

帰つてみると、そこにはひづりちゃんがいた。

「ただいまーーあと昨日ぶり、ひづりちゃん！」

「あはー、そのひづりちゃんはやめてほしいなー。」

「やだー」

無言で笑みを貼り付ける佐助から黒い何かが出てきた。
それに危機を感じた敏春が「穩便に！」と宥める。

「それで。何用でしょうか？」

「大将から文を預かってきたんだよ。直接敏春殿についてね。」

「・・・亜鬼十。なにか悪い事でもしたのか？」

「えー？何で何で？俺ただ友達になつてきただけだよ おさん良い人だった

「やー」

「ふむ・・・ツ！？て、お前なあ！」

「ゆつまーとも仲良くなつたのー！」

「それかなり一方的な考えだからね？」

「えーー・さつちゃんも俺と友達だろ?」

「俺様は「だろ?だろ?」・・・・。」

「亞鬼十、佐助殿が困つてゐる。」

「えと、旦那?旦那も俺様に『殿』なんてつけなくとも・・・。」

「何を言つたですか!忍とか関係ありませぬ!しかしもあの甲斐の者を呼び捨てになど!」

「・・・・旦那も結構な変わりモンだね?」

「でさー?何だったの、中身?」

「つむー。」

佐助から受け取った文を広げ、黙読していく。
が、その表情がだんだん曇つていくのが明らかに分かる。

またとんでもないことを要求してきたな・・・。

「佐助殿。コレは真か？」

「そうですよ。」

「何だつたの？」

「お前、甲斐と同盟を組んだのか？」

「同盟？・・・ああ、友達になつたけど？？」

「戦はなくなつた。が、試合を申し込まれた。」

「試合？別に良いんじゃない？死人出ないし。」

「甲斐はお前とやつたいそつだ。」

「俺～？」

「ああ。」

「・・・マジでかー？」

「反応遅ツー？」

驚愕だよ。

大スクープ！マジで？

あの武田信玄が、自分にマジで興味あつたなんて、驚きなんだけどー。

「んー・・・。あの人、道場ぶつ壊しそう。」

「あー・・・。」

確かに、と佐助をコクコク頷く。

甲斐にある道場、よく幸村を鍛えるのに使われている道場も、アレで何代目
だろうか・・・。

「しかも、これって俺にバサラ技使えっこでしょ？俺、疲れるから使い

たくないのになあ・・・。てか、友達に使っちゃダメだよー・絶対、ダメ！」

「まあ、やうらへんは後にしてもらひて良一っ返事待つてるんだけど？」

「ゴメン、やつちやん！やうだね！バサラ技云々はあとで考えるよーー！」

「試合、か。まあ、戦よりは・・・。それに、新兵たまに良い経験になります

うだ。

「じゃあ、仮想空間には良こですよって返事お願いしまーすー。」

「・・・ホント軽いね、姫の田那。」

本当に脱力してしまつよひな空氣にしてしまつ悪鬼十二、調子を狂わせられ

る佐助。

その様子をジッと黙つてみる安曇は、佐助を警戒していた。忍として当然の行動である。

それに、彼女は気づかなかつた。

甲斐で言つていた亜鬼十の言葉で初めて知つた。

他国の忍がこの国に忍び込んでいた、と。

表情には出でないものの、やはり悔しいところだ。

佐助は苦笑しながらその場から去つて行つた。

「じゃあ、後は頼んだ！亜鬼十！」

「頼まれたよーー！」

変な返事を返す亜鬼十に見送られ、自分の部屋へ戻つていいく敏春。安曇と自分だけになつた所で、亜鬼十は微笑むのをやめる。

「落ち込む」とじゃないよ、安曇さん。

「！？」

「大丈夫！顔には出てない。ただ、君を知る者としては、何となく
そう思つ

ただけだから。」

「……いえ、忍として氣づかなかつたなど……ツーもし、その
忍の目的

が暗殺であつたらと思つと……。」

「杞憂、だよ。現に誰も死んでないから。結果オーライだよ。」

「……。」

「心配する」とも無いよ。安曇さんがもつと強くなりたいと思つ
なら、自

分の好きなように修行すれば良い。でも、無茶はしてもらいたくな
んだよね

「。

「……亜鬼十様……。」

亜鬼十は優しい。

平和主義なのは本当だ。

そして、友達になりたいといつ単純な願いも、本当だ。

だが、戦場での亜鬼十も、また然りである。

「まあ、これからもよろしくってことだ

二くらと笑う亜鬼十に、安寧は安心するのだった。

6 鬼姫、試合

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 6 * 鬼姫、試合

城から少しは慣れた場所に、それなりに広い道場が一箇所ある。一つは何の変哲も無い、新入りばかりの兵を鍛える鍛錬所だ。

が、もう一箇所はその道場の地下にある。

前のあの暴君が、捕虜となつた者、そして気に入らない家臣や兵、民までも苦しめ、血に染めた場所である。今では忍たち専用の訓練所になつてゐる。

一揆の後、血のにおいも残すことなく綺麗にし、あの下種が使って

いた者は全て処分した。

そのお陰で、当時の面影など全く無い。

前置きせめておや。

敏春は亜鬼十と共に兵たちの前に向き合いつ形で話を始める。横で長い話を聞き飽きたといった感じに欠伸をする亜鬼十。

「...おい...隊長のお前がそれでどうする...」

「んー?まあ、気楽にいこうよ。みんなもそんな力むな。力んでもいい事ないしね。」

無礼講つてわけじゃないけどさ。

「それには、敏春兄。緊張しそうだつて。

「なつー? わ、そんなことは・・・。」

「いつもどおりで良いんだよ。俺達は甲斐より優れてるとか、何処よりもいい国とか、見せ付ける必要は無い。そういうのは、自然と出来るもんだからね。誇りに思つ程度で十分だ。」

「・・・・幽鬼十、お前はこの国の主戦力。その自覚はあるのか?」

「主戦力、か。まあそれはおいといて、愛国心はある。俺はこの国が好きだ!」

「・・・・ともかく、信玄公に無礼なことだけは辞めや。」

「分かつてゐつて。」

「・・・・『狐毛』はやめるよ。」

「えー?」

「えー? じゃねえーーてめえ、またそつ呼ぶ氣だつたのかー。」

「みせんが良いって言つてくれたもーん」

「いの……ッ！」

「敏春様！武田が参りました！！」

「…もうそんな時間だつたか。では、全員整列し、待機！」

敏春は亜鬼十を連れ道場を後にした。

* * *

お待ちしておりました、と敏春は信玄率いる武田軍を迎える。まあ、流石に全員連れてきてないけど、結構な大所帯。

迫力が違うよ・・・。

「私が、城主の天松院 敏春と申します。遠路遙々お越しいただき
「久しぶりー、玄さん！」って、ちょっと！亞鬼十！さつき言つた
ばつかどううが！失礼だ、それ！！」

「わっせはははははーよこよこ、敏春殿。亞鬼十殿は真に面白いー。」

「誠に申し訳ない。」

「謝らすとも良い。ワシがそう呼んでよいと言つたのだ。」

卷之五

「うむ。」

武田軍は招き入れられ、城の中には信玄、幸村、そして忍び忍びに佐助が入つていった。

* * *

やっぱリアレだね。

自分の城でも、大国と小国の差つてやつて座る位置が違うんだね。前に座っているのは信玄であり、敏春は亜鬼十の斜め前に座つている。

「小国ながら、誠良き國よ。ソレまで立て直すのに苦労したであろう。」

「はい。しかし、まだこの国は不安定であります。故に、今戦などは……。」

「ソレは承知した。が、どうしても知りたいのじゃ。貴殿もさるゝとながら、この国の英雄殿の力を。」

「……て、俺ですか？」

「そなたじゃ。」

「お言葉なんだけど、俺は英雄じゃないよ。相手が弱すぎただけだしさ。俺がいなくて何とかなつたと思つよ。あの一揆は。ソレよりも、敏春兄のほうが英雄だと思つなあ。そもそも俺が始めた事じやないしね。」

「おおー！主君を敬つその心ー！この幸村感心致しまするべー！」

「感心？俺に？嬉しきなあ、ゆつやー！そつ言つてもらえるなんて

「

「つて、お前ー？ちょっと馴れ馴れしいからなー。」

「ゆつやー。」

ガシッ！と幸村に抱きつく亜鬼十。

敏春が絶叫したのは言つまでもない。

* * *

「まったく、アナタという人は・・・っ！」

あれから数分後。

女中に変装していた安曇がお茶を持って入ってきた。結果、その惨状に亜鬼十を説教し始めたしだいだ。

「大体、あのようには他人に抱きつくなど！」

「アレはただの挨拶だよ。南蛮式の！」

「（）は日本です！」

ちなみにここは別室。

あの広間には信玄と敏春が残り、亜鬼十、安曇、幸村、佐助はこの別室に待機していた。

「真田様も、お嫌でしたらお叱りください。」

「い、いや、某は……。」

「ゆつやーは嫌だったのか?」

「嫌、では……。」

「ちよひ、田那!そんな事言つたら調子乗つちやうよー姫の田那!」

「黙つてろ、オカン。」

「オカソジヤないからねー!」

「オカン……。」

「安曇、アンタまで……。」

「それにしても、何で俺なんかに?俺より強い奴なんてウジヤウジヤーるでしょ?」の乱世じや。」

「……いや、某たちは亜鬼十殿が異質の強さを持つていると思つのだ!」

「……異質……、ね。」

「是非、お手合せ願いたいのだ!」

「・・・。ゆつきー達は俺の本気が見たいの?」

「はい!」

「・・・困ったなあ・・・。敏春兄に止められてるんだよね。それに、俺自身嫌だからなあ。」

「それって疲れるから?」

「それもあるけど・・・。「亜鬼十!」・・・敏春兄!話終わつたの?」

「ああ。今から道場に向かうぞ!試合だ!」

「りょーかい

異質、か・・・。

確かに、自分は異質なのかもしねない。

そもそも、この世界にいる自体が、自分が異質であることの証拠だ。

俺は、元々この世界には無かつた存在だ。

トリップ、っていうのかな。

俺の世界で、この世界はゲームでしかなかつた。
実際俺の場合はアニメで知ったんだけど。

軍人であつた俺は、暇つぶしにそれを見てた。
だんだんハマつていつてしまつたんだけどね。
だから、実際彼らを見て驚くことなんて無かつた。

ただ・・・。

ファンとして興奮したよ！

言つておぐが、俺はカタブツな軍人じゃなかつた。
結構あつちでもフレンドリーにやつてたしね。

といつても、周りはカタブツばっかだつたから、浮いた存在だつた
なあ。

後輩達には人気あつたけど。

特に女性に。

「・・・き・・・、亜鬼十!」

「・・・はいよ?」

「はいよ~じゃねえ!」

・・・あ。

いつの間にか道場の中に入っていた。
整列したコチラに視線を向ける兵達は、鍛錬時のように胴衣を身につけている。

「後は任せる。」

「任せられました。」

敏春と信玄は、亜鬼十と幸村の後ろに下がる。
そういえば、敏春兄は剣術しないもんなあ・・・。

てか、嫌いなんだっけ？

「ふう・・・えっと、朝お知らせしたとおり、これから試合を行います。その前に、体を温めて起きたいので、準備運動といきましょう。」

「準備運動で、ござるか？」

「はい。簡単です。束になつた彼らを、素手で退いてください。

なー!?」

- ! ?

「あ、あの・・・、隊長・・・！」
「何ですか？」

「俺達、一言も聞いて『試練だと思つてください。』」

「！」

「無茶苦茶ですよ！」

「そんな逃げ腰になつてどうするんですか？」

「こ、心の準備が・・・ツ！」

「・・・君達・・・」

「向甘えてやがる。」

「？？」

空気がガラリと変わった。

あののんびりとした感じが消え、凍てついた空気が流れ始めたのだ。
表情も笑みが消え冷たい表情を見せていた。

「心の準備？そんなモン武士になる前に準備しやがれ！こんな時に弱音を吐くな！武士となるのならば、いついかなる時であろうと戦えるようにしておくれのが基本！貴様ら今まで俺の指導を聞いてきたのか？寝てたんじゃねえだろうな？」

「寝てませんッ！！」

「当たり前だ！そんな事してたら死人が出てた！」

（じゃあ何で聞いたんですか！？）

「人の子、いつかは死ぬ。不老でも不死でもない。有る意味弱い存在、だなんて俺は思わん！人間死ぬ気になりやあ、何でもできるツ！そんな事も理解できねえとは情けねえ！テメエらそれでも俺の隊かあ？ああ？？」

別人だ。

あの暢気^{アマガキ}にへラへラ笑っていた亜鬼十はそこにいない。
が、確かにこの人物が亜鬼十であることには間違いない。

「・・・亜、亜鬼十・・・殿・・・?」

流石の幸村もタジタジだった。
が、幸村を見る亜鬼十は、元通りの亜鬼十だった。

「ゆつきー準備は?」

「だ、大丈夫で!」^{ヤモル}る。」

「よし、じゃあ、始めよつか？・・・返事びついたー。」

「は、はいっー。」

「おやに鬼じやのう・・・。」

「・・・鬼だ・・・。」

「てか、変わりすきですって！？アレー！」

「でも、猫被つてゐわけではありません。極端なんですよ。感情の起伏が・・・。」

「極端とな？。」

「まあ簡単に言つと・・・、『ガキ』ですね。」

だからこそ、アイツは英雄なんだ。

敏春が呟くよいつたその言葉は、確かに信玄の耳に届いた。

7 鬼姫、魅せる

『戦国BASARA』

白き鬼姫物語

』

』

* 7 * 鬼姫、魅せる

*

この程度で・・・

「ここの程度でへこたれるとは何事だ！」

亞鬼十の咆哮が響いた。

自称『準備運動』のお陰で、体は温まった。

しかし、亞鬼十の中では兵達の今の状況が納得いかないらしい。

妥当な状況だらうと、誰もが思う。

信玄でさえ、一人の暴れっぷりを見てそう思ふし、何より暴れていた幸村でさえ思うのだ。

が、納得できないものは納得できないわけで……。

「テメエらーこれ終わつたら腕立て、腹筋、素振り100回ーー！」

(お、鬼だ・・・つー)

「お、落ち着かれよ、亞鬼十殿。」

「ゆつきーは準備運動になつた?」

「じゅ、十分でいざるよ・・・ー」

「・・・よかつた」 じゃあ、全員見学していいださーいね？」

「は、はーーー」

これ以上怒りせないようだと、兵達は速やかに道場の端に寄った。

「今回まあ今まで試合だからね。いいせ妥当な木刀で相手しましょ
う。」

「某は問題なこないだろ。」

「・・・でも・・・、やつやつーはコレ使ってこーよ。」

ホイッと投げ渡されたのは一本の薙刀。

とはいって、やはり刃は無く、木製で形作られた物だ。

「そつちの方がいいでしょ？」

「では、お言葉に甘えさせてもらいます。」

「うん 敏春兄、審判お願い！」

「はいよ。・・・両者、前へ！」

亜鬼十と幸村はそれぞれの得物を持って、中央に向き合つ。相変わらず笑顔の亜鬼十に対し、緊張気味な幸村。

「両者、構え！」

幸村は一つの薙刀を、いつものように一槍を構えるようにする。

ソレに対し、亜鬼十は居合い切りの構えをとった。

懐に飛び込まれれば、確かに面倒である。

しかし、いきなりその構えをしたことで、最初の動きが分かつてしまつた。

これは、罷か・・・?

見せ掛けなのか?

それとも、本当に・・・。

「始めー。」

ダンッ！

床を蹴る音がした瞬間、幸村の懷に亜鬼十が潜り込んでいた。木刀が一閃される前に、幸村は持ち前の反射神経で体勢を後ろに、大きく飛び下がった。刃物のように鋭い木刀の一閃は、ギリギリで幸村の体に届くことは無かつた。

「な、何でござやうひか・・・?あの・・・、鋭さは・・・!?

「さすがゆつつきー やつぱりコレじゃ、無理かな。」

再び居合いの構えかと思わせたが、違った。その構えは、突きだつた。

「居合いで、ない・・・？」

「居合いで切りは正直好まない。無謀に相手に突っ込むようなことは嫌いなんだ。」

とはいえ、幸村のような槍使いにとって、懐は死角同然。そこに潜り込まれれば不利であり、これほど の弱点は無いだろう。しかし、亜鬼十は突きという攻撃に変えた。

本気でくるつもりだ、と幸村は相手に集中し始める。

(先ほどの居合いで切り以上と考えた方がよからう!先ほどは反射的な避けだつた。が、それではならぬ!それでは、某は負けてしまうだろう。)

「！」の幸村！全力でお相手致す……！」

「うん

「是非やつしてくださいだ

「さこ

「ね・・・？」

（背後…？）

流石に避け切れなかず、完全に突きを食らってしまった。幸村の体はそのまま真っ直ぐに向かいの壁に叩きつけられた。

「フェンシング、というものを知ってるかな？南蛮にある剣術みたいなもののなんだけど。南蛮の中でも西洋と呼ばれる地域では、刃の使い方が違います。この日本での『斬る』という考えではなく、『突く』・『刺す』という考え方があるんです。フェンシングがまさにソレです。」

幸村は、ふらつきながらも再び力強く立ち、振り返る。

「斬るのではなく、『突く』ことが攻撃となります。」

「！？」

再び目の前に現れた亜鬼十は突きを繰り出す。

「旦那ッ！」

「ぬうおッ！…！」

ギリギリと一槍で受けきつた幸村。だが、その表情には全く余裕はない。追い詰められている。

だが、このままでも意味がないと察した亜鬼十は後ろに跳んだ。

最初の立居地にいる亜鬼十を、荒々しい息遣いで幸村は突進してい

つた。

「猪突猛進。・・・でも・・・。」

繰り出された攻撃を亜鬼十は木刀一本で防ぎきる。

「良い突きだね。ゆつきー。」

「ぐつ・・・・・!おおおおおおおお――シ――!..」

一槍は空を切る。突く。刺す。そして、流される。

亜鬼十は木刀で軌道をずらし、身を翻した。そのまま回転を利用して、幸村の背中に肘を叩き込んだ。

「ぐ・・・ッ！」

「俺の本気が見てみたいようだけど、それじゃあ見せられないな。残念だけどさ。」

「まだまだ・・・、終わってはおりませぬぞ・・・っ！」

「まあね。ゆつきーが立ってるかぎり終わらなによ。かといって、本気出したらホント冗談抜きで・・・、死ぬよ？」

「…」

「氣づいているだろ？俺が実力の半分も出してないことを、わ。」

「…・つ。」

「別にもつ止めようと促してるつもりもないし、手を抜いて続けてゆつきー達が納得できないのも分からなくもない。だから、『一瞬』だけ本気出してあげる。」

「…」

トンッ。

心臓部を軽く押された程度だった。

ただその時驚いたのは、先ほどよりも早い動きに対してだけだ。

そして、幸村の視界は暗転した。

8 鬼姫、詮索

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 8 * 鬼姫、詮索

その動きはゆっくりだった。

先ほどまで燃え上がるよつに騒いでいたはずなのに、その光景に誰もが黙り込む。

あれが、攻撃だったのか？

まずここで疑問に思った。

速さは凄かった。

忍の自分でも分からぬほどで、旦那もこれじゃあ防ぎきれないな、
と思った。

ただ、その後だ。

あの居合い切りや突きのように、何かしらの攻撃を繰り出すのだろうと確信していたのだが、それが大きく外れた。

本当に、何の音もしないほど、静かに右手を前に突き出した。

そして、『触れた』だけのはずだった。

「・・・旦那・・・?」

大将との激しい殴り合いが日常茶飯事である田那が、ただ触れた程度で倒れたのだ。

立っているのがやっとだった、その結果であつたわけじゃない。見るからに、まだ攻撃できる状態だつたはずだ。

「心配ないですよ。氣絶してるだけですから。」

亜鬼十は何もなつて笑ひ。

「半口すれば田が覺めますよ。」

「……今は、一体……。」

「あれが亜鬼十の十八番です。亜鬼十はああ見えてかなり怪力なんですよ。岩の一つや二つ簡単に碎いてしまうほどね。」

「あの細腕のどこに、そんな力が・・・？」

「俺もそれが知りたいんですけどね。本人も知らないことみたいなんで、他人が分かるわけもないってどこですよ。」

「うむ。が、それと先ほどの技の関係が分からん。」

「力の凝縮。」

「一。」

それに答えたのは、亜鬼十本人だった。

「普通相手を力いっぱい殴つたら、相手は動く。相手が受けきれても、相手にかかった自分の力は変わらない。ただ相手を動かすだけの力は不要。だから俺は、その動かす力も全て攻撃にあてました。・・まあ簡単に言えば、どんな力も一点だけにそのままぶつ

けたといつ感じですかね。」

「貴殿は何処でその技を?」

「南蛮です。俺、南蛮で武将みたいなことやつてましたから。」

「…? 南蛮で…?..?」

「それにしても! 敏春兄、ゆつきーす! 」によーーの人に、やっぱ友達になれてよかつた!」

「ん?」

「この人、ちゃんと心臓動いてるんだ。アレ食いつた奴って皆心臓止まるの!」

実際に楽しむついで書いた言葉は決して[冗談にならないよ! うなこと]だった。

「あ？お前手加減したんじゃねえのかよ？」

「いやいや、それしたら失礼でしょ。だから、本気でぶつけた」「ば、馬鹿野郎！てめえ何やつて『良こじゅん』止まつたら止まつたでひやんと助けてやつたからさー」「ううにフ問題じやねえ……」

なんつづ」とを・・・、と頭を抱える敏春兄に対し、幽鬼十は鼻歌交じりに幸村を見ていた。ちゃんと呼吸している。

規則正しい呼吸が出来ている。

「まだまだ、俺も精進が足りないな。」

俺はまだ強くない。

まだ、道は続いている・・・。

* * *

「鬼姫・・・？」

とある小さな国が、一人の男を中心とした一揆により潰された。

それが報告されたのは、その翌日だった。

奥州の近くにあつたその国は、小国ながらも横暴な城主のせいで幾度と戦をしていた。

近い内に「」とも戦となる予定だつた。

が、それまでに農民たちが黙つていられなくなつたのだ。

「Ha！その結果がこれとは、笑えるな。それで、その鬼姫つて奴が大将か？」

「いえ。大将の名は天松院 敏春。武家の家柄の者です。元々あの國家臣でありましたが、城主の横暴に耐えかねたのでしょう。」

「じゃあ、鬼姫つてのは何だ？」

「鬼姫。名は・・・、アキト。」

「...」

アキト。

その名に聞き覚えがあつた。

それどころか、そう名乗つた者が最近この奥州に、青葉城にいたのだ。

いつの間にか抜け出し、姿を暗ました奴の消息は今も不明だつた。

「もしその鬼姫が、あのアキトってんなら、確かめねえとな？小十郎。」

「はっ！政宗さま！」

そんなやり取りをしたのが一年前になる。

そんな長い月日をかけても、鬼姫があのアキトであるのか分からなかつた。

そして、新たな報告がなされた。

『甲斐と同盟を結んだ』。

政宗や小十郎にとつて、それは衝撃的なものだつた。

甲斐が何故、アキトと手を結ぶ？

自分達の知る甲斐、武田信玄は決してアキトのような人間を快く思わないだろう。

「それとも、あのアキトじやなかつた、てことなのか？」

「分かりません。あれから幾度と忍に潜り込ませよつといきましたが、それが叶わず。」

「・・・シチイ！」

もし、あのアキトならば・・・・

政宗は憎悪に燃えた心を抑えながらも、強く拳を握った。
奴に殺された農民や部下達を報いる為に、奴を殺す。

「小十郎、甲斐に行くがー！」

「まつー。」

甲斐のおっちゃんに話をする。

それが何よりも早く、情報を手に入れられるだらうと考えた。

『すまない・・・。』

何が・・・、何が『すまない』だ！

何の罪も無い農民まで殺しておいて、何が・・・ッー！

「アキトオ・・・・ツー」

ギラリと煌く憎悪の炎は、暗闇の中で燃え上がったのだった。

9 奥州、対峙

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 9 * 奥州、対峙

幸村が目を覚ましたのは、亜鬼十の宣言どうつ半田であった。痛みに少し顔を歪ませていたが、問題はなかつた。

亜鬼十は敏春に頭を押さえつけられながらも謝罪させられた。本人は全く納得など出来なかつた。

「頭を上げてくだされ！天松院殿！！」

「そりだよ、敏春兄一。 ゆつきー困つて」「誰のせいだ、誰の……俺納得いかない！」

「いい覚悟だ！テメエ表出ろー表エーーー！」

「助けて、ゆつきーー！」

「亜鬼十、テメエ！」

「落ち着いてくだされ、天松院殿。 某の未熟さ故の結果でございます！」

「真田殿ー。コイツを庇う」となどありませんからー！」

「いや、庇うとかでは「ゆつきー大好きー！」って、亜鬼十殿！？」

突然抱きついてきた亜鬼十に驚く幸村だが、抱きついた本人は構うことなくスリスリと頬ずりしてくる。

「怪我人に抱きつくなーー！」

「やーだーーゅつせーー！」

「変な懐き方してんじょねえよ、『ロリ』ーー！」

「は、破廉恥で！」やうあああああーー！」

「賑やかだね、旦那達？」

スタッフと天井から降りてきたのは、真田忍隊の長『猿飛佐助』だった。

「佐助！？」

「・・・何？姫の旦那ってそっちの趣味？？」

「わひわひてばひへわひわひわん?」

「わひわひとせやめよひなー?」

「いーやーだー」

「・・・衆道趣味。」

「わひわひわんが?」

「アンタがだよ、姫の田那。」

「あはは~ そんな趣味なーいー」

「だつたら離れる、亜鬼十!」

「あいや?ー」

すきをつかれた亜鬼十は簡単に幸村から引き剥がされた。不機嫌そうにほっぺたを膨らまして、敏春を睨んだ。が、知らんぷりしてしまった。

「せういえば、真田殿はあの独眼竜と好敵手であられるやつで。」

「……。」

「つむ！政宗殿は某の好敵手！天下分け目の戦にて合間見えたい人物でござる……。」

「天松院の大将、それがどうかしたの？」

「いや。この国の近所さんだからな。しかもかなり戦力もあるし、少し心配でな。」

「ですが、亜鬼十殿がおられる！心強い！ぞつましょつー。」

「まあ、そりゃそつなんだけど、ね。」

「心配ないよ、敏春兄。俺、誰が相手でも負けないから。この国の平和を乱そなならば、その者には極刑を下す。……生き延びようとも、恐怖を植え付け生き地獄を味あわせてやる。絶対にッ。」

「あ、亜鬼十……殿……。」

「フフツ！俺にとつてこの国は誇りだ。そして、この国を治める敏春兄は他の誰よりも俺の主君だ！」

「亜鬼十。」

「安藤さんもやつでしょ？」

「はい、
亜鬼十様。」

氣配もなく後ろに待機していた安曇が答える。

実は佐助と同時に下りてきてたりする。

「敏春殿は本当に良き部下をお持ちでござる。某もお館をまのじる上
洛のため今まで以上の精進を「それなんだけど、ゆつせー?」・・・
?」

「某か？4時から始め、8時まで「ゆつせー、それやり過ぎですよ。」そのよつな」とはいぢがひるん…これでもまだまだでいぢがひるん…」

「いやいや、やりすぎだから。それじゃあ、ダメだよ。やれば良いつてもんじやないでしょ？ そういうのって。」

「う、うむ・・・。だが、どうすれば・・・?」

「おまえは、休め。」

「・・・は？」

「休め。じっくり、三日は槍を持つな。」

「や、それは無理で！」やる……いつ敵が攻めてくるか分からんで！」やるやーー！」

「武田軍に攻撃しようなんてそり滅多にいないでしょ？それに、玄さんとは話をつきました。しばらくは、ここにお泊りでーす。」

「アーティストの才能を発揮する場所を失った」と嘆く声も聞こえた。

「そつなのー！だから、一緒に枕投げしよ」

「つて、姫の旦那……、それが目的だつたりする?」

「半分。」

「半分も！？」

「亞鬼十様！自重！！」

「えー！」

「えーー、じゅあつませんーー、こつまでもナガのよつなじゅばかりーー。」

「俺の個性だよ。」

「直してくださいー！」

一・・・追々と

一
・
・
・
は
あ
・
・
・
・
「

苦労してゐるね。アンタも？」

貴方もね

124

忍同士分かるものがあつたようだ。

そんなに仲良くなつたら、敏春兄の嫉妬爆発じやない？ 安曇さん？？

なんて、口に出すほど馬鹿じやないから黙つてますけどね。

「さーてどッ！そろそろかなあ・・・？」

「？」

亜鬼十は立ち上がり外に目をやつた。その行動の意味が分からぬ
敏春たちはただ首を傾げるばかりである。そんな中、亜鬼十の表情
は真剣なものだった。

そこに、一人分の足音が近づいてきた。それも、随分を慌てた感じ
だ。

「報告いたしますー大変ですーー」

「ー? どうした!」

「お、おお奥州の、独眼竜、がー！」

「来たみたいだね。」

「は、はい！」

「今何処にいますか?」

「門前でーー鬼姫を出せとーー。」

「…………やつぱり俺か…………。」

「やつぱりはな?」

「…………来る前に、彼とはりまつとねー…………。」

「亜鬼十、どうする?」

「余裕よ。」^{アタガタ}やせられないから。

「俺も行へや。」

「俺個人の問題だよ? それとも、何々々? 安曇さんがいるからかつ
いつけてるんですか?」

「違えよーーただ・・・、お前は俺の部下だーー城主の俺が行くのは
当然だろ?」

「・・・安曇さん、」^{アリ}待機。

「御意ー。」

「ゆつやーーひやんと休んでくだよー?」

「あ、亜鬼十殿ー。」

じゃーと、敏春に続々部屋を出て行った。

「某もー。」

「いけませんーーー。」

「何故でいざれるかー。」

「主はゆつべつしりとおっしゃりました。主の言葉は絶対ですーーー。」

「あらあら、こりゃまた、忍の鏡だね。」

「それに、これはこの国の、少なくとも亜鬼十様個人の問題にござります。他者が関わる必要はございません。」

「そ、それは・・・、やうなのだが・・・。」

「・・・。亜鬼十様は、徒に人を殺めたりはしません。独眼竜と合間見えようとも、そこは弁えるでしょう。特に、あなたの好敵手であるのな。」

「？」

「ねえ、何で旦那の好敵手は特にななの？」

「亜鬼十様は、真田様の事を気に入つておられますから。」

「確かに・・・、あれば、ね・・・。」

一方、亜鬼十たちは城門に行き、伊達軍と対峙していた。

「やつぱアンタか・・・、アキト・・・。」

「久しぶりです。独眼竜。」

嵐の前の静けさは一刻と崩れていこうとしていた。

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 10 * 奥州、因縁

*

*

亜鬼十がこの国に来る前の事は、敏春と安曇だけが知っている事だつた。話すつもりも無かつたが、そうもいかなかつたあの時ならば仕方の無いことだつた。

が、その内容はあまりにも重く、あまりにも酷いものだつた。

「伊達政宗殿。」

亜鬼十を庇うように前に出たのは敏春だった。

「？誰だ、アンタ？？」

「某はこここの城主 天松院敏春。突然の訪問について、理由をお聞きしたいのだが。」

「Sorry. 僕達も急いでいてな。探しモノがあつたんだよ。」

「・・・。」

「探したぜ、亜鬼十。」

「そんなに俺に会いたかった？俺モテモテですね。」

そんな軽口を叩きながらも、内心穢やかではなかつた。
その表情もいつもの笑顔が消え、無表情だ。

「ああ、そうだな。会いたくて仕方なかつたぜ。んでもって、この手でテメエを斬りたくてウズウズしてんだ！」

「…お待ちください、独眼竜…亜鬼十は某の家臣である。勝手なことをされても困る！」

「どけ。そいつを庇つた所で良い事なんてねえぞ？ You See ?」

「主が自分の家臣を庇つことはおかしいと申すか？」

「H a ! H a ットゥな野郎だぜ。アンタ、そんなんじゅ一国の主は務まらねえよ。そんな甘い考え、捨てるこつたな！」

「甘いだと…」

「それか、その座を捨てる。今のアンタに一国の主は無理だ。」

容赦なく突き刺さる政宗の言葉に、何の反論も出来なかつた。

分かつてゐる。

自分の言葉がどんなに甘く、綺麗事であるのか。

今更だ。

今更ながらも、今の自分が情けない。

敏春は悔しさに、グッと拳を握り締めた。

「・・・ま・・・れ・・・。」

背後からかすかに聞こえて声。それは、政宗や小十郎にも聞こえた。
何だと聞き返そうとした瞬間、何かが爆発した。

「黙れ、独眼竜ッ！」

凄みのある鋭い視線が向けられた。

同時に感じる殺気は、幾多もの戦場を駆けた武将であるひつとも、嫌な汗をかいてしまつほどだった。

「俺のことなら、何を言おうが黙つて聞き流してやるがな。だが、主君への侮辱は許さぬッ！それ以上続けよるものなら、この場で貴様の首を刎ねてやろッ…」

その言葉にハツタリなどなかつた。亜鬼十の瞳は、確かに実行すると感じられる、強い怒りに満ちていた。

その怒りこそ、亜鬼十の敏春への忠誠心の強さを示していた。

が、逆にそれは起爆剤になってしまった。

我に返つた伊達の兵達が、怒りの声を上げてきたのだ。

それに、政宗は背中を押されるように、元の勢いを取り戻した。

「俺の首を刎ねる？・・・・Ha！」

政宗を刀を一本鞘から抜き、亜鬼十に刃を向けた。

「やれるもんならやってみる。」

「・・・死んでも恨むなよ・・・?」

「テメエがな。」

「・・・つたぐ。・・・亜鬼十オ・・・。」

「?・・・、・・・シ!?」

ゴンッ!-

鈍い音が響くと同時に、亜鬼十の体は地面に倒れこむ。そして、更に地面に叩き伏せられた。

その光景に伊達側も、何事かと隠れて見ていた兵達も目を見開いて驚いた。

「な、・・・と、・・・とし・・・にい・・・ッ!」

「悪いな、政宗殿。誤つて部下を強く叩いてしまった。戦闘不能つてことどうですか? 変わりに俺が相手するつてのは?」

「!?

「おー、敏春兄イツ!..」

「聞こえねえ!..」

「グハツ!..」

顔を上げられなつよし、亜鬼十の頭に足を乗せる敏春。

何だ、ここいつり?

誰もがそう思つ中で、知らずにか敏春は話を続けた。

「俺は確かに甘い。この戦国乱世でこんな考えなんて自殺行為も良いところだ。だが、それがどうした? 爭いをなくす為に戦う貴殿らと

同じー俺は俺の方法と考へで、この席この世を無くしたいー。」

「それが俺の信念だーー！」

やつ言いすると、後にあつたのは沈黙だった。

(「こつは馬鹿なのか?」)

だが、この言葉に、この霸氣に、この口に、偽りは感じられない。
これが、この小さな国の主 天松院 敏春という男なのだろう。

「オモシレーーー。」

納得できない。

(・・・何だよ、それ・・・?)

「・・・ああ。」

「テメエがそいつの主つてんなら、部下の尻拭いぐらいしてみせろ。」

馬から飛び降り、敏春の前に着地する。
そして、亜鬼十に向けていたその刃を、今度は敏春に向けた。

そう言ったのは政宗。

それこそ、納得できないって！

亜鬼十はクラクラする頭で、何とか意識を保っていた。
あの重い拳を一発喰らい、更に足で踏みつけられたのは、流石に亜
鬼十もそれなりのダメージを受けてしまった。

体は動かせる、はず。

だが、起き上がるだろ？

立てるだろ？

その後は、動ける、か？

その後は・・・。

その後は・・・、ビ・・・・だ・・・?

『護れるのか?』

11 奥州、そして小国の王

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 11* 奥州、そして小国の王

*

場所は道場近くの広間。

訓練場として作らせた場所だ。

これを作ろうと言い出したのは亞鬼十だ。

南蛮にいた頃の訓練を、新兵達にさせている亞鬼十に、この広間は必要な場所だつた。

そんな場所に一人の男が立つ。

一人はこの城の主。

一人は竜の名をもつ男。

独眼竜 伊達 政宗。

彼の後ろの方には、小十郎をはじめ、伊達軍の兵達が騒いでいる。

「悪いな。道場の方は今使えないから、外になるけどいいかな？」

「No Problem.」

「？・・・えつと・・・？？」

「構わねえって言つたんだ。」

「そうか！南蛮の言葉はさっぱりだ。でも、もし貴殿たちといつじたイザコザがなかつたら、亜鬼十の友達になつてたのかもなあ。」

「An?」

「・・・いや、独り言だ。さあ、始めようか。」

「・・・刀は？」

「いらん。俺は素手で戦うのが流儀だ。容赦はいらん。俺は本氣で相手することにしたからな。」

「そうかい。上等ッ！！」

政宗は刀を六本一気に抜いた。六爪流。つまり、政宗も本氣で敏春を相手にすることだ。

竜の右目 片倉 小十郎は、何も言わず主の背を、そしてその先の戦いを見届けようと、その視線を一人に向かた。

「ホント、何でなんだろうねえ・・・。」

そんな呟きは、誰にも届かず、ただ走る。

一人の男が駆け出した。

* * *

(く、くそ……ッ!)

敏春のヤロー……!

滅多に「くそ」とのない悪態をつきながら、亜鬼十は立ち上がりつと

足に力を入れる。だが、途中で視界が揺らぎ倒れてしまつ。これで三回目だ。

「思いつきつ、殴りやがつて・・・ッ！」

口調も素になつている。

それも周りに誰もいないからだ。隠れてた連中は敏春と政宗の決闘を見に行き、亜鬼十はそのまま放置されていた。

（しかも、これを機会に通りすがりに誰かが蹴りいれに行きやがつたッ！）

「やべつ・・・！スッゲーイラフする。爆発しそうなんんですけど・・・間違つて誰か殺しそうだな、俺・・・。」

「物騒じやのう、鬼姫殿？」

「…………信玄、公…………」

「いつか…………？」

「それが本当のお主か。」

「…………本当にこももないね。おじたてる俺も、いつかキレてる俺も、俺でしかないですよ。」

「うむ。して、お主はまだついたいたい？」

「…………とまあえず、敏、いやお主の下へ行き、止まる。」

「…………止められたのか？」

その言葉は、決して相手を馬鹿にしてくるものではなかった。現実を見り、と警告してくれるみづな言葉。

確かにそうだ、と亜鬼十も思つ。信玄に言われる前から、立ち上がりろうと試みた時から、自分自身それを考えていた。が、答えは見つからなかつた。

「とにかく、行く。敏春兄は、関係ないんだ。俺が、俺が逃げたら…。その結果だから…。自分の事は自分でできる…。」

「…お主に出来る」とは、何じゃ？

「何つて…。」

「己の主とあの独眼竜の決闘を止める為に、お主にできる事は何かと聞いてある。」

止める方法…。

そうだ、一番肝心なことを考えていいなかつた。ただ、敏春兄の下へ行き、戦いを止めよつと考えたが、その方法まで考えていいなかつた。馬鹿だ、俺は…。

「俺は護りたいんだ。その為に、俺は逃げない。あの時みたいに逃

護れるとか、護れないとかじゃない。

愚問だつた。

『護れるのか?』と、自分に問つた。

「でも、とめなくては・・・。敏春兄は、あの人は俺の・・・。
家族だから・・・。傷つけたくないし、失いたくないんだ・・・。
」

げずに、独眼竜と話をする…」

「やうか…それでは急ぐぞ…」

信玄は何処か満足げに笑って、亜鬼十を横抱きにして広間へと急いだのだった。

* * *

さすが、としか言いようのない状況が、そこにあつた。浅いながらもいくつかの切り傷を負い、息を乱す敏春。だが、決して目の前の相手から目を話さなかった。

もし、口で少しでも田を離したら、自分は意識を失つてしまつか
もしれない。

そうなれば、この男は亜鬼十に刃を向けるかもしれない。
身動きの出来ない亜鬼十にそんな事をするかは分からぬ。
だが、しないとも言い切れない。

敏春は再び立ち上がり呼吸を整える。

「まだやる気か？」

構え直す敏春に政宗は問う。

それに対し、余裕がないながらも口元に笑みを浮かべてみせた。

「負けず嫌いなんだよ。」

「ほひ。だがな、アンタにはさつわと倒れてもらひひ。命はどうねえから安心しな。」

「俺は、だろ？亜鬼十は殺すつもりじゃないんですか？」

「・・・まあな。」

「この国にアイツは必要だ。アイツの過去なんて関係ない！アイツは、黒土亜鬼十は某の家臣に変わりはない。頼む。アイツを殺さないでくれ！」

「無理な話だな。」

政宗は敏春の言葉を切り捨てるように、その刃を高く振り上げた。

赤が舞う。

刃を追うように飛ぶ。

別の紅が視界の端に見える。

その手にある者が大きく見開いているのが、意識の途切れる寸前に
見えた。

12 鬼姫、そして竜

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 12 * 鬼姫、そして竜

*

刀は容赦なく敏春を傷つけた。

その光景に、亜鬼十は目を見開いた。

来るのが遅かつた。

あの時のように、また自分に無力さを感じる。

護れなかつた。

自分のせいで傷ついた。

護りたかったのに……。

政宗が亜鬼十たちに気づいた。

が、すぐに亜鬼十を斬ろうとしなかった。

隣にいる信玄の目がそれを止めた。

その中で、亜鬼十はゆっくりと、ふらつと足で敏春に歩み寄る。

「敏春兄……。こんなところで、寝てたら風引くよ……。なあ……。
起きたよ……。」

傍に座り、敏春に視線を落とす。

が、その日に地面に広がる紅を映し、言葉を止める。

「独眼竜、何で斬った？」

「あ？」

「何故斬つた？何故俺ではなく敏春兄なのかな？？」

「……このぐれーしねえと邪魔してくるだろ。」

「そう……。そうだね……。」

短く答えると、敏春を抱えて木にもたれさせ座らせた。
腰に巻きつけていた水色の布で止血し、自分の上着を敏春の体にかける。

そして、言葉が続く。

「敏春兄はそういう人だよ。どんな最低な人間でも、死んで欲しくなくて助けるような人だ。一揆の時だって、なんだかんだ言つても殺しなんかしたくなくて、だから刀を嫌つているような人だ。だからと言って、俺や安曇さん、他の兵達にそういうこと任せていることに罪悪感なんか感じてる。確かにこれが主じゃ、この戦国乱世でどうにもなんないかもしれない。」

それでも、俺達はこの人についていくことを決めた。
優しいから、なんて理由じゃない。

この人を主と認めたんだ。

みんな、それぞれの理由で選んだ。

「俺はどっちかっていうと、平和主義者なんかじゃない。この人の言葉を綺麗事だつて思うこともよくある。だって俺、現実主義者だからさ。いろんな人間がいる中で、誰でもみんなが仲良くなれるわけない。」

そんな俺だから。

だから・・・。

「この人が必要だった。この人のように夢を見たかった。夢の見方を知りたかった。でも・・・、それは無理そうだな。」

「おい。何の話だ？」

「もう和解の道は絶たれたって事だよ。」

静かにはつわりと吐き出された言葉は、合図となつた。

政宗と小十郎の後ろに待機していた兵達の悲鳴が上がつたのだ。二人はすぐさま振り向く。

と、そこには氷付けになつた兵達がいた。

「！」、「これは・・・！？」

「・・・テメハの仕業か？」

「ナリだけど、何？」

「テメハ、また「またつて？俺がアンタとこの兵を攻撃したのはこれが初めてなんだけど？」

「ざけんな！一年前、テメハは罪もねえ農民と一緒に、俺の部下達を殺しちだろ！..」

「？え？まさか、そんなことになつてたの？」

「・・・は、何言つてやがる。」

「俺は農民も、アンタの部下達もこの手にかけたことなんかない。」

「今更そんな嘘ついてんじゃねえ！」

「じゃあ聞くけど。君達は俺が殺したとこ見たのか？」

「「一」」

殺している光景を、俺たちは見たか・・・。

見たのか？

俺達が見たのは、血まみれで死んでいる奴らの真ん中で、一人立ち

尽くしていた亜鬼十の姿。

見た事のない出で立ちに、無表情の顔。

『すまない。』

感情の読み取れない声で紡がれた言葉。

「俺がどうしてすまないと言つたのか。それは、俺のせいでき起きてしまつたから。俺が護れなかつたから。だから謝罪をした。それだけのことだつた。でも、君達はそんな勘違いをしていたんだね？・・・・・・」

「どうして？」

「俺達の勘違いだと？じゃあ、何処のどいつがやつたってんだ！」

「・・・・言わなかつたかな？俺、もう和解する気は更々ないんだ。どんな理由でも、原因が自分にあるひとつも関係ない。主を傷つけた理由はそれで十分だ。」

長い袖からスルリと姿を見せたのは一本の刀の刃。ゆっくりと腕を持ち上げ、その刃を政宗に向ける。

「リストラしちゃ、俺はあんたらを一掃させてもいいよ。」

その瞬間、政宗たちの目の前には大きな壁が現れた。が、それが壁ではなく人だと気づいた時、その人物は目の前の相手に話しかけた。

「やめぬか、亜鬼十よ。」

「無理です。伊達軍は主を傷つけた。敵です。敵と友達になるほど俺能天氣な人間じやないんで。」

お互に交えた武器をガチガチと鳴らす。

「御主の過ちが引き起こしたこの事態を、どう思つておるのだ?」

「関係ない。俺に原因があつても関係ない。敏春兄を傷つけた。理由はそれだけで良い。」

「今の御主は、ただ怒りにかられる獣よ。そこに忠義などありえぬ！」

「忠義？・・・そんなもの、最初からないよ。」

「何ッ・・・・！」

「俺にとって敏春兄は、家族だった。城主とか、主君とか、そんなものどうでもいい。ただ、俺は家族を傷つけたことが許せない。」

信玄が押されている。

あり得ないとthoughtたが、しかし、目の前の光景はまさにそれだつた。あの細腕の何処にあんな力があるのか。信玄の体はゆっくり後ろに押されていく。

「それより、あなた退いてください。友達を傷つけるのは嫌なんです。それにゆっさーやはっちゃんに嫌われたくないから。」

「ならば、刀を納めよ。そして、あの氷から兵たちを解放してあげるのだ。」

「……。」

「……あ、き……ッ。」

「……え？」

後ろから聞こえる弱りきつた声は、亜鬼十を止めた。亜鬼十は一寸距離をとつて、振り向いた。

「亜鬼十……、やめ……お……ッ！」

「敏春兄。でも、あいつらの國に攻めてくるよ？そいつ、いいで逃がせば後悔する。せつかくここまで築いたのに、壊れるよ？」

「……亜鬼十……、うひ、……来い……。」

ふらつきながら何とか立っている敏春に、亜鬼十は急いで駆け寄つた。が、亜鬼十は地面に叩き伏せられた。右頬を赤くし目を見開く亜鬼十に、敏春は痛む傷にお構いなく、亜鬼十の胸倉を掴んだ。

「亜鬼十、テメエは誰の家臣だ？」

「…・・・敏春兄・・・だよ・・・。」

「俺は伊達軍を攻撃しろと言つたか？」

「・・・・。」

「答えろー・亜鬼十オーーー！」

「・・・・言つてない・・・。」

「じゃあ、何だ？」「レは・・・・。テメエは俺の家臣だろー・主君の命令無く他国の大将と、ましてや同盟相手の大将に刃を向けるんじやねえ！ー！」

「ー。」

「頼んでもねえのに、俺を理由にするな！そんなモン、ただの自己

満足だー。」

「…………めん…………。」

「…………。」

敏春は乱暴に胸倉をはなした。その場に座り込んだ亜鬼十に、自分にかけられた上着を被せ、政宗たちの方を向き歩み寄る。すると、その場に座り込み頭を下げる。

「申し訳ございませんでした。家臣の無礼をお許しください。」

「…………。」

亜鬼十は息を飲んだ。

また、自分のせいで、自分のやつたことで迷惑をかけてしまった。
申し訳ない気持ちと情けない気持ちに視界がぼやけ、俯くしかなか
つた。

13 鬼姫、失態

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 13* 鬼姫、失態

*

奥州の伊達軍は一時撤退した。

敏春は傷の治療の為、安曇の看病の許自室にいる。

「・・・俺に、何が出来るんだ・・・?」

敏春の言つとおりだ。

敏春を理由にして、俺は独眼竜を斬ろうとした。
そして、信玄公にまで刃を向けた。

今更後悔しても遅いし、信玄公も笑って許してくれた。

が、そんなもので許されることではない。

「俺は、ここにいて・・・いいのか・・・?」

また傷つけてしまうのではないか？

また、あのよひ、元に頭を下げさせてしまつのではないだろうか？

「なーんて・・・一いちへないつて、俺。」

こんなことで責任感じる自分じゃなかつたはずだ。
だから、今まで自分のしたい事をしてきた。
やりたいように、やつてきたんだ。
それを今更、どう変えるつてんだよ。

感情移入か？

馬鹿か、俺は。

それに、家族だと？

家族を知らない俺にそんなものが認識できるといつのか？

愚問だな。

出来るわけがないだろ。

そうだ、俺と敏春は主従関係。

『敏春兄』なんて呼んで良いわけけないだろ。

「実践離れして平和ボケしたか、俺は・・・。情けない！」

奴はあくまでクライアント。

俺は軍人。

傭兵。

クライアントとの契約を果たすだけの存在。

そこに家族といったようなものはいらない。

不要だ。

『家族』など・・・、邪魔でしかない・・・。

＊＊＊

伊達軍が去つて数刻過ぎた頃、信玄は幸村を連れ敏春の臥室へと来た。

敏春のこと、すぐに起き上がろうとしたのは言つまでもないだろう。

信玄はそのままで良いといふが、それも聞かず安曇に支えてもらひ。

「いえ、少しだけの傷、何でもござこません。信玄公、」

「ならば良いが、無茶はするでないぞ。」

「う」心配お掛けしてすみませぬ。本当にたいした傷ではございません。独眼竜は最初から俺を見ておられませんでしたから。」

「・・・亞鬼十か。」

11

「敏春殿、お館さまからお聞きしましたが、何故独眼竜は亞鬼十殿を憎んでおられるのですか？」

「……その場にいたわけではないないので、詳しい話は分かりません。ですが、奴から聞いた話では、これは奴が逃げた結果だそうです。」

「逃げ……ツ！？あの、亜鬼十殿が？」

亞鬼十の強さを身を持つて知る幸村は、その言葉に驚いた。
亞鬼十に限つて逃げるなんて事があるのであらうか？

正直な話、亞鬼十の強さは本物であり、独眼竜をも凌ぐ強さだ。

それが何故、逃げるなど・・・。

「亞鬼十が最初に来たのは奥州にある小さな村だったそうです。南蛮にいたアイツはコチラの生活が良く分からず、その村の農民達にお世話になつていきました。その代わり、亞鬼十はその村の用心棒として暮らし始め、それなりに不便もなく生活していたようです、が。そんなある日。とある男が自分を訪ねてきたそうです。」

「とある男？」

「誰かは俺も知りません。本人が教えてくれませんでしたから。ただ、その男は冷酷にして非道。吐き氣のするような悪だとか。」

「ふむ・・・。」

「その男は、亞鬼十を自分の仲間にしようとしたと誘つてきました。当然亞鬼十は断りました。すると、男は農民たちを人質にとり、脅し始

めました。それでも、農民は自分が救うといって断り、その後最悪な結末を迎えてしました。」

『護れなかつた……。』

「亞鬼十にとって、農民たちは自分の主であり、家族でした。それを近く奪われ、絶望しました。」

『おー、そこのアントー！……何してやがる……？』

『……すまない。』

「コレが独眼竜との出合いです。」

沈黙。

誰も何も言えない。

何を言つべきか、と誰もが思つといふだ。

しかし、単純に幸村は言葉を吐き出す。

「その話だと、畠鬼十殿は政宗殿の勘違いで憎まれてここと云つてゐるから、

「まつたくその通りだ。コレで畠鬼十が違つと言えばよかつたのか

もしけない。もしかした状況が変わったかも知れないだからな。でも、あの時の亜鬼十は護れなかつたことに対して強い責任を感じ、そのまま死んでしまおうと思つたとかで、殺される「こと」を選んだ。「

でも、結局出来なかつたよ」ひづけどね。

「奴は抹殺される前に、脱出し姿を暗まし、そしてあの一揆で俺と会いました。」

「そして、今があるのだな。」

「はー。・・・信玄公、亜鬼十の無礼、お許しくださー。」

「その」とじゅが、わしは元よつ氣にしておりござる。」

「・・・あつがとうござります。」

敏春は恵いとばかりに頭を下げる。が、それに信玄は少し表情を陥しきさせた。

「敏春殿よ。貴殿のそれは癖であるか?」

「はい?」

「貴殿は必ず頭を下げるのつ。幸村にも頭を下げて謝ったそひじやな?」

「・・・・は、はい・・・。元家臣故か、板についてしまつたようだ。
・・。」

「なるほど。しかし、一国の主として感心できぬ。」

「一。」

「貴殿はもう家臣ではない一。そして家臣を持つ一国の主である
ぞ。そう簡単に頭を下げてはならぬ。」

突然言われて言葉に困を見開くが、すぐに敏春は反論した。

「お言葉ですが、家臣の無礼は主にも責任がござります。」

「一理ある。しかし、その考えが逆に家臣を追い詰めておるやも知れぬ。」

「？」

「貴殿だからこそこの気遣いであろう。前の城主の悪評は聞いておる。貴殿の行動は、家臣であった己の経験からなるもの。じゃが、鬼姫と貴殿は違う!」「…」

「…?」

「貴殿が前の城主と違うように、鬼姫も違うのだ。強く尊敬する者が、己の大切な主が、自らの過ちのせいでの者に頭を下げさせてしまつたら、どのような思いであるうな?」

「…?」

「知り合ってまだ短いが、亜鬼十は貴殿を尊敬しておる。主としても、そしてそれ以上に家族としてじや。」

「…?俺は、まだまだ未熟であります。そのようなこ

とも分からなことは・・・。」

敏春は思い出していた。

彼が亜鬼十に何と言ったのか。

一揆で共闘する際に、仲間となつた際に交わしたもののは何か。

「こりゃあ、間違つてたのは俺の方だな・・・。」

「そうでもないよ、敏春兄。」

「一・?」

「亜鬼十、殿・・・。」

亜鬼十は『軍服』を身に纏い現れた。

見たことも無い格好にも驚いたが、何より亜鬼十の表情に全員が目を見開いた。温かく感じる笑みを見せていた亜鬼十とは別人に、その瞳は冷たいものだった。

「亜鬼十・・・、戦にでも行く気か・・・？」

ほんの冗談交じりなことを言う敏春に、亜鬼十は苦笑する。

「失礼します。」

「・・・。」

すぐに先ほどの表情に戻し、部屋に入ると、敏春と向かい合ひつよつに、肩膝を上げて座つた。

その行動に、敏春は見覚えがあった。

「先ほどのお手な行動についてお詫び申し上げます。」

顔を俯かせたまま、こちらを見ない亞鬼十。ああ、やつこえばあの時の亞鬼十はこんな奴だった。

その重い空氣に全員が黙つたまま視線を向ける。

「やれこつこちやあ、もつ良い。俺にも非があった。」

「いいえ。元々の原因はこの『私』にあります。君主に頭を下げさせることなどあつてはなりません。それについて、我が主に再び問います。」

「私、黒土亞鬼十はアナタに必要ですか？」

「！？」

「な、何を申しておるのだ！亞鬼十ぞ」「待て、幸村！……お、お館さま……？！」

「信玄公、先ほどは失礼致しました。」

「……つむ。」

「亞鬼十、その問い合わせだが、何故そんな事を聞く？？」

「今回の件は、軍人としてあるまじき失態。契約相手の意思に背く

ような行為に「」ぞこました。私はそのような行為が、国を滅ぼすと知つております。誰も護ることなどできません。天松院 敏春殿、今一度お考へ下さい。必要か、不要か。」

「・・・テメエ、それが契約破棄の本当の理由か？」

「・・・。」

「亜鬼十、テメエはいつもフワフワして何やつてんだって言いたくなるようなことやつてた。先日も人の仕事邪魔しに来やがったしよ。だが、お前は戦場において、右に出る者はいない。戦闘能力だけじやねえ。その知略はあの毛利や豊臣のとこの軍師以上だ。」

「そんなに褒められても照れるだけですよ。」

「だからこそだ。さつきの理由は納得いかねえ。俺にはテメエがこうなる」とを予め知つていたような気がするからな。」

「！？」

「・・・私は智将じゃない。賈被りすぎです。」

「いや、テメエは立派な智将だ。しかも性質の悪い方だ。ガキが無駄に賢い」というなるのかねえ。」

「頭の悪い大人よりは良いと思つてますけどねえ。」

「・・・おい、そりゃあ俺の事言つてんのか？」

「えー？違つんですか？」

「自然な感じに驚くなよー否定べりてじるよ、否定ーー。」

「俺嘘だけはつけない。」

「そんな良い子でもねえくせに何いつてやがる。」

「・・・あー・・・、駄目だ。」と言しながら、亜鬼十はいつもの調子に表情を緩め、その場に胡坐をかいだ。

「やつぱアンタとはいつリッとした緊張感保つて真面目な話できないな。」

「俺のセツにすんな。」

「だつてアンタ、真面目な話とか似合わねえし。」

「テメHやつ起きから失礼だなー。」

「それに・・・、やつぱ敵わねえよ。」

「一。」

「こいつから氣づいてたんだよ？アンタ。」

「最初っから、てわけじゃねえが。そうだな、わりと最近だな。地下でコソコソと何してんだよ？」

「・・・俺は、こいつになくなつても分からぬ立居地だ。」

「まあな。」

「しかも、正直な話俺の代行なんかこの国にはいねえ。だから、この時の為に用意しといたんだよ。俺の代行戦力。」

スルリと袖から見せた手には、一つの小さな笛。それを吹き鳴らし、甲高い音を部屋に響かせた。

その瞬間である。

亜鬼十の背後に三人の子供現れた。

「名づけて、『鬼御子』つてことだ。」

亜鬼十は自慢げに笑うだけだった。

14 鬼姫、出立

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 14* 鬼姫、出立

*

三人の子供はただ、静かに言葉を紡いだ。

「お初にお目にかかります。『鬼御子』シンクにござります。」

「同じく、クロガネ。こつちがマシロ。彼女は口が利けない。よつ

て代弁させていただきました。」

「・・・（ペココ）」

赤髪の少年『シンク』は、その幼い顔立ちに反して大人の雰囲気を持つていた。

『クロガネ』少年もまたどこか大人びてはいたが、生意氣な子供のようにその言葉はどこかぶつきらぼうな感じだ。

『マシロ』は三人の中で一番年下のようで、他の二人のような大人びた所は無く、可愛らしい少女だった。

「可愛い子鬼たちだろ？敏春兄。」

「・・・まさかとは思うが、こんな子供に武器を持たせるとこいつのか？」

「まあ、アンタは気に入らないだろ？ね。いつもいつもとはさ。」

「分かつていてやるか？悪趣味だな？」

「それほどでも というか、勘違いしないでね？俺は強制した覚えはない。これはこの三人の意思だ。俺に止める権限なんて、あるわけないじゃん？」

「権限とかそういう問題ではない！俺は、こんな子供に武器持たせるような国にしたくないから、だから一揆を起こしたんだぞ。無駄にするつもりか？」

「んー・・・、やっぱ甘いねえ。」

「甘くて何が悪い？」

「何が？だって・・・？アンタの甘さは一見すれば優しさだ。いや、嘘ついてるとかじゃないよ？アンタは確かに優しいんだよ。人の命を簡単に奪う武器を嫌つて、あえて体術を習得した。それは並大抵の覚悟じやなかつた。」

一揆の時、刀を振るつて兵を殺す敏春の表情を、亜鬼十は今でも鮮明に覚えていた。

本当の平和守護者は、こんな時偽善者扱われるだろう。しかし、亜

鬼十は決してそうは思わなかつた。

だからこそ、亜鬼十は敏春と契約した。

「でもや、あんた一人がどうこうしたところで、変わらない事だつてある。出来ないこともある。そのために兵や家臣がいる。が、その兵や家臣の実力じやあ、到底やつていけないだろう。俺が何も無く生きていたといひで、長続きはしない。次の代で潰れるのは目に見えているよ。」

自覚しているからか、敏春は何も反論しなかつた。ただ押し黙つて、亜鬼十を睨んでいる。その様子に傍にいる安曇や信玄たちも息を呑んだ。

「願つだけじゃ、何も成せない。何か成し遂げたくば、行動せよ。
一揆の時アンタが農民達に言つた言葉だ。」

「ああ、確かにそうだな。だが、何故子供なんだ?しかも、まだ幼い子供だろ??」

「彼らはいすれ立派な大人になる。子供のうちにしこんでおいた方がいいだろ?」

「お前のさつきの言い方は、実際敵が攻めてきたとき真っ先に突撃させるような物言いだつたが?」

「猪突猛進、なんてさせない。無駄死になりかねない。それに、俺よりは弱いからな。だから、策を持つて行動させる。」

「...」

「ただ、しこむだけじゃ駄目だ。道場で一番の武士でも、戦場を駆け巡った兵には勝てない。そこにある差は、まさに経験。踏んだ場数だ。」

「・・・お前の事だ。仕込みもまた半端なもんじゃねえな?」

「フフツ!徹底的に指導させてもらつた。そんじょそこのらの兵達より強いよ。」

な、なんとーと幸村は驚きの声を上げる。

自分は彼らよりも幼い自分に鍛錬を始めていたが、その年で実践など無かつた。いくら努力しようとも限度があるからだ。

そして、元服した後に初陣したのだ。

それに比べ、この二人は明らかに元服していない。

一体どんな鍛錬を組んできたのだらつか？

幸村は疑問に思いながら、亜鬼十に視線をつづいた。

「ここの三人を残していくからや。安心してくれ」

「……で？お前はお前でケリつけにいくか？」

「まあね。あの時は取り乱しちまつたけど、やつぱこのままじやいけないでしょ？まずは竜ちゃんに会つて話つけるよ。」

「・・・死ぬなよ？」

「難しいかもね。」

「命令だ。生きて帰つて來い。」

「・・・ホント、どうしようもない人だね・・・。Yes, My
Lord.」

(生きて帰つてくるよ。)

(アンタとの、約束だ。)

鬼姫、主のもとを去り、過去の地へ足をのばす。

15 鬼姫、そして奥州

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 15 * 鬼姫、そして奥州

*

翌日。

亜鬼十は奥州へと馬を走らせた。

しかし、あることに気づく。

青葉城へはどうやって入る?
独眼竜と会つて、最初に何を話す?

確かに目的は、先日の謝罪と、あの時のケジメをつけぬことなのだ
が。

「さて、どうしたものか・・・。」

そうして立ち寄ったのは、小さな茶屋。
それなりにお客も入つて賑やかな店だ。
三色団子を頬張りながら思考に耽つていた。

「すみません、お客さん。相席よろしくですか?」

店の娘さんがすまなそうに尋ねてきた。
亜鬼十は迷うことなく、「いいよ」と微笑んで見せれば、娘さんは
嬉しそうに

笑つて、後ろの男に席を勧めた。

「悪いねえ、兄さん！」

「いえいえ。」

髪を高い位置に括った、見るからに派手な男は、愛想の良い笑顔を見せた。

「かぶき者」というのが、この男の第一印象だ。

「旅でもしてんのかい？」

「いいえ。奥州に用があつてね。」

「俺はいろんなトコ流れ流れに旅してんだ！奥州も中々良いトコだぜー！」

「そうですね。本当に、いい所だ。」

「俺、前田慶次つてんだ！」つちは夢吉ー！」

「キキッ！」

「兄さんは？」

「黒土畠鬼十です。慶ちゃんと呼んでいいですか？俺は好きに呼んでもらって

いいですから。」

「良いぜ！ そんじや、畠鬼十。一つ聞いても良いかい？」

「どうぞ。」

「アンタ、もしかしてあの鬼姫かい？」

「何でそう思つたのです？」

「鬼姫つてやつも、『アキト』って名前らしいんだ。それに、姓を持つつてこ

とは、それなりの身分がある奴だつてことだ。」

「それが理由、ですか。まあ、正解ではあるんですけどね。」

「やつぱやつかい！ で？ 何しに！」 『アンタと独眼竜は犬猿の仲つて噂だが

？』

「犬猿の仲、か。そうですね。仲が良いとは、お世辞でも言えない事です。」

なら、何でここに？と尋ねようとも口を開いた瞬間。

店に一人の男が駆け込んできた。

「悪イ。また頼むぜ、志乃さん。」

「全く、またかい？」

溜息混じりに笑う女店主。

突然入ってきた嵐に、亜鬼十と慶次の視線がその男に向いたまま首を傾ける。

どうやらいつもの光景のようだ。ほとんどのお客様がその男を見て、いつもの事

だとも思ひつけず、視線を外していく。

「て言つてもアンタ、もうこの店じゃバレるんじゃないのかい？」

「いやいや、そんな事言つてもよ。他の店は門前払いだぜ？あのヤクザ面のせ

いでよ。」

（あれ？ヤクザ？？）

何故か小十郎の顔が浮かんだ。

しかし、この世の中ヤクザ面なんていくらでもいるだろつ。
先ほどまで一人の事を考えていたからだろうか？

（いや、そうだな。）

勝手に納得する亞鬼十。

「どうかいい隠れ場所ねえか？」

「まったく……。」

「隠れ場所なら此処なんてどうですか？」

「おー、いいな、そこ……って、アンタ誰だよ？」

「よお、万里！」

「前田慶次！？クソッ、何でテメエが……。」

知り合いか？と尋ねようとしたといいで、外の方から走つてくる音が聞こえてきた。

万里と言つ青年は顔を引き攣らせ、亞鬼十の勧める隠れ場所に身を

隠した。

同時に、再び嵐はやつてきた。

今度は一人ではなく数人の男達。

「万里は何処だ！」

ヤクザ面、なんて表現はかなり間違っていると思った。

（ありや、般若だろ・・・。）

正直そう思つてると、その鋭い目と目が合つてしまつた。

(あ、驚いてる。)

「テメは・・・ッ！」

「やあ、竜の右田。久しぶり。」

「何しに来やがった！それに、前田の風来坊も何でいやがる？」

「俺はたまたまな。」

「慶ちやんとはさつき知り合つて友達になつちやいましたよ。」

「ま、相変わらずの偽善面だな？」

「せつちも相変わらずのヤクザ面だね。」

「つて、亜鬼十！？」

そのやうどりを田にした時、改めて確信した。

確實に相手が怒る言葉を自然に口にする亜鬼十と、今にもキレそうな竜の右目

片倉小十郎に、横にいた慶次や隠れている万里はヒヤヒヤしながら様子を伺

つている。

だが、意外にも何も起こらなかつた。

緊迫した空気は、小十郎の溜息が打ち消した。

「それで、何しに来た？」

「独眼竜と話がしたくてね。」

独眼竜といふ、この土地を治める主を示す名に、その場にいたお客達も視線を

亜鬼十に向けた。

この奥州を占める独眼竜と話など、普通の人間が出来るわけがない。だが、小十郎とのやり取りから、亜鬼十が一般人でないことがハツ

きっと分か

る。

一方小十郎、先日のこともあり、亜鬼十が報復にやつてきた可能性を考え、刀に触れる。

「こんな所で抜刀ですか？それは勧められないな。」

亜鬼十は席を立つと、お代を机に置く。

「おこしこね団子、」と駆走をまどした。むと、会わせてくれますか？」

「お断りだ。先日の事を忘れたわけじゃねえだろ？」

「忘れてないよ。そのことも今更謝罪に来たんだから。」

「……。」

「信用無いのは知つてたけど。どうしようかなあ……。」

うーん、と腕を組んで悩む素振りを見せる。

そして、ニッコリ笑つて見せ、小十郎に告げる。

「分かった。勝手に独眼竜と会つ事にするよ。」

「……。」

亜鬼十は言い終わると同時に駆け出す。

小十郎と部下達は、いきなり突っ走ってきた亜鬼十に驚きつつ、身構えた。

だが、亜鬼十の体は突然視界から消え、後ろへと抜けられた。

大胆にも、構える人間に近づいた瞬間、滑り込むように足の下をくぐり抜けた

のだ。

驚嘆の声が聞こえる茶屋を後に、亜鬼十は走る。

目に入る目的地、独眼竜のいるであらう城へ。

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 16 * 鬼姫、和解

実際に良い天気を迎えた奥州。その奥州を統べる独眼竜は、天気とはまた正反対の曇つた表情を浮かべていた。目の前のみにならず、部屋中に置かれた白い紙の山に頭を抱えていたのだ。

「Sヒート！何でこんなにありやがんだー！？」

何でも何も、此処まで溜まつたのは自業自得の事だった。

コソコソやつていけばこんなことにならなかつたのだろうが、そんな性格ではない政宗が改める筈もなく、毎度の事こうして白い紙の山を相手に戦つていた。

「毎回嫌気がさしていくぜー！」

「やうですね。俺も嫌ですよ。」

「だらうー・・・アロー？」

一体自分は誰と話をしているんだ？

そう思つと同時に振り返れば、そこには別の白面が座つて一いつ口こと笑つていた。

「独眼竜、お久しぶり。大変そうだね？手伝おうか？？」

「余計なお世話だ。それより、何で此処にいやがる？」

「貴方と話がしたくて来ました。」

「俺は何もねえ。」

「でも俺にはあるんです。ケジメはつけないとね。」

「……ケジメも何も、テメエは何もしてねえんだろ。」

「……そうだね……。俺は、何も出来なかつた。誰も護れなかつた。貴方の大切な民を護れなかつた。」

「……。」

「先日はすまない。」

「……いや、こつちも悪かつた。アンタの主を斬つちまつた。」

「原因は俺だ。俺が何も言わなかつたから。」

「そりでもねえ。勝手に思い込んで決めつけた俺達も俺達だつた。」

それを最後に一人は黙り込んでしまつた。

謝罪はした。

どいつもやら誤解だといつゝとも、亜鬼十が言つまでもなかつたようだ。
それで、どいつもしたものか。

この沈黙の中、誰か口を出せる者がいるのだろうか？

小十郎さんがいたら良かつたのだが、まだ城についていないだろ？

「他に何かあんのか？」

「・・・え、あ、いや・・・！何も・・・ッ！…」

「何慌ててんだよ？」

「何といつか・・・、最近まで睨みあつてた仲でしょ？それがこう

もあつれつした感じに終わるって、違和感あつまくつでや。」

「確かにな。」

「……ねえ、独眼竜。」

「？」

「友達になつまつよ。」

「……Ah・コ?」

何言いやがるんだ、「イツとこつよつな皿をされた。
だが、皿鬼十は本氣でその台詞を放つた。

「竜介さんと梵ちゃん、どうちが良いかな?」

「おこ、その前に友達って何だよ?」

「ふーふー。」

「違Hよー、やうじゅねえー！」

「冗談ですって まあ、アレだよ。折角蟠りがなくなつたんだし、
「こは友達になりましょうつて流れです。」

「蟠りが無くなつたら友達になるつて流れもどうかと思つがな。」

「ダメかな？」

「・・・何で俺と友達になりてえんだ？」

「何で？友達になりたいと思つたから。それ以外に理由なんている
の？」

「・・・。そんなもんか？」

「そんなもんだよ。そうだ！俺、ゴジュさんとも友達になりたいん
だよ！」

「・・・小十郎の事か？」

「やうだよーあ、「ゴジュさんよりオトンの方が良いかなあ？」

「ブツ！オ、オトンつて何だよ。」

「だつてアレはオトンでしょ。厳格そうなオトンー！」

「くつくくく・・・、やべつ・・・、腹イテH・・・。」

「え？！何で何で？ Bestでしょ！？」

「ああ、そうだな……。くくつ……！」

「笑いすぎです！俺真剣に考えたんですよ？」

「真剣に、考え、ハハ・・・ツ、オトンツて・・・ツ！」

ツボだったようだ。

(竜ちゃんの笑った顔初めて見たかも……。)

最近までのイザコザが嘘だつたように笑い合つ二人。

数分後、小十郎と万里が政宗の部屋に駆け込んで来るまで、『オトン』で笑っていたらしい。

* * *

あれから小十郎に揃つて説教された。

やつぱりオトンだ、と呴くと、政宗は身震いしながら必死に笑いを堪えていた。

間違つてもねえよな、と万里が納得すると、小十郎の矛先が万里にも向き、三人揃つて説教された。

終わった頃には足の痺れでその場に倒れこんでいた。

「足、痺れた……。」

「俺でもあんなに説教受けたの初めてだぜ。」

「クソッ、オトンだぜ！アレはよ……。」

「止める、万里！……ま、また……くくッ。」

「どんだけツボだったんですか？」

「てか、俺の場合とばっちりだってーの！」

「そついえば、君は？」

共に説教を受けた彼の名前を、まだ知らない。

茶屋でも、ただ顔を合わせ、隠れ場所を勧めただけでしかない。

「俺は黒土亞鬼十といいます。」

「園原万里だ。茶屋ではサンキューな。」

「こえこえ。それじゃあ、バンちゃんって呼んで良いですか？」

「…………、好きです。」

(何だか、その間。)

「で？ 亜鬼十、お前に今までこらぬんだ？」

政宗の質問に、やつこへばと答える。

「今までこのかまでは答えていなかった。
そもそも、いつおつれつと和解になるなど思ってもしなかったことだ。」

「やうだね……。明日には帰らつかなあ、といりますね。ゆつき
ーの」とふわんに頼まれたし。」

「真田幸村か？」

「ああ、あの熱血純情野郎か。」

「やうやう。ゆつき、お馬鹿さんだから馬鹿みたいな量の鍛錬し

て時間無駄にしてるから、俺が鍛錬に付き合つ」になつてたんだよね。」

「お前が真田のか?」

「ゆつきーはまだまだ発展途上だし、あの年の頃の俺よりは遙かに実力は上だしね。」

「・・・ん?お前、ちなみにいくつだよ??.」

「二十歳。」

「「・・・は?」」

政宗と万里は、何言つてんだと言いたそうな顔を向けてきた。
そんな二人に亜鬼十は、もう一度「二十歳」と今度は笑顔で言った。

「嘘だ!」

「ひぐ し?」

「お前が?俺より一つ上?..」

「俺正直同じ年ぐれーを見てたぜ。」

「失礼だなあ。ホントに俺二十歳ですか。バンちゃんせともかくへ、竜ちゃんは年上だと思つたよ。」

「なんつー童顔なんだよ。」

「もしかして、ゆつやーもむづ思つてゐのかなあ・・・。」

「真田だけじゃねえよ、絶対。」

ショックーと言つて落ち込む亜鬼十。

やはじどり見ても自分達より年上に見えない。

世界広しどこえど、いつも童顔な顔と性格のマッチした人間はいな

いだひつ。

「まあ、お前が女なら納得できるけどなあ。」

「確か！」

「・・・。」

「？」

「俺女顔ですか？」

「ああ。」

「即答！？酷い！こんな色男に！？」

「自分で言つてんじゃねえよ。」

「つーか、お前そんなキャラなのか？」

よく分からん、と万里は立ち上がり部屋に戻るといつて出で行つた
とした。

だが、それを政宗に止められた。

「何だよ？」

「亜鬼十、今日は此処に泊まつてけ。」

「えー？ 良いんですか？」

「Sueー万里、お前の部屋に連れてけ。」

「ああ？！何で俺の部屋なんだよーーー。」

「バンちゃんの部屋かあ。見てみたいですよーーー。」

「何でだよ？！密間あんだろ？がーーー。」

「小十郎が納得するかよ。」

「・・・。」

「『めんねえ、バンちゃん。』

嫌そうな顔をしながらも、「しゃーねーな」と言つて背を向ける。
亞鬼十はニコニコしながら万里の後を追つた。

「Friend、か・・・。」

その言葉はあまりにも自分に縁のないものだった。

一人ぼっちではないのだが、昔から母に蔑ろにされ、時には殺されかけた事だってあった。

それでも自分がこうしていられたのは、きっと小十郎といつ右田のお陰なのだ。

しかし、そんな小十郎との間にあるのは、強い主従関係における絆。友との絆とは違う。

かといって、物足りないわけではない。自分にはそれで十分だと思った。

思っていたのだ。

亜鬼十に友達になりましょう、と言われた時、今までに感じたことのない気持ちがこみ上げてきた。
純粹に嬉しいと、思ったのだ。

この何も無い空虚な右田のせいで周りから阻まれて、嫌われてきた自分に友が出来るとは。

いつのもの、悪くねえな。

政宗は優しい微笑みを浮かべ、再び白い紙の山と格闘を始めた。

16 鬼姫、和解（後書き）

反省します・・・。

結構急展開氣味、ですよねー。

和解早くね？みたいな。

まあ、これで通そう。

一応・・・。

17 鬼姫、御披露目

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 17 * 鬼姫、御披露目

*

奥州・伊達軍は、予想以上に賑やかな連中ばかりだった。

政宗と友達になつて数刻すると、万里の部屋になだれ込むように兵達がやってきた。

どうみても兵ではなく、暴走族かチンピラ共に見えるんだが。万里は不愉快そうな顔をしながら亜鬼十の横に座つていたが、何も言わない。

その変わり、その手に刀が一本握られていた。

「バンちゃん、それ流石に危ないよ。」

「バ、バンちゃん！？」

「あの万里さん！」・・・つ！？」

「こいつあ大物だぜ！..流石筆頭の友だ^{ダチ}ぜ！..」

「ひっせーぞ！全員自害しやがれ！..」

「すんませんでした――――――――――――――」

全員が土下座して謝りはじめた。

おもしろいなあ、とクツクツ笑っている亜鬼十だが、万里に睨まれ連中同様に土下座する羽目になった。

「でも、好きにしていついたのバンちゃんだよね？」

「……。」

「やうなんスか！？」

「騒ぐなー。言つたがな、そのバンちゃんがいつにかしぃ。最低限ち
やん付けは止める。」

「えー。可愛いのー。」

「可愛いとか、ふぞけんな。」

ヒコソツと一閃する刀。

空気を鋭い刃で切り裂く。

その様子を、瞬時に避けた亜鬼十が「危ない危ない」と軽口を叩きながら見ていた。

それにキレないわけがなく、万里は第一の攻撃を仕掛ける。
だが、コノも紙一重に避けられた。

「本当に危ないんで、武器しまじましようよ？」

「良いぜ。テメエが大人しくしてんならな！」

万里は手にする刀を振るつた。

その鋭い斬撃から、かなりの強者である事が分かる。

そして、政宗や小十郎に敬語も使わない所からしても、万里はこの伊達軍の中でもかなり上の役職なのだろう。

だが、ただの兵でないのは亜鬼十も同様だった。

奥州程でない小国とはいえ、亜鬼十の実力は桁外れである。

「テメエ、斬られろ！」

「嫌ですよー。俺そんな趣味ありませんからーーー！」

素早い攻撃を避けねば、障子は綺麗に切り落とされ、畳は抉られた
ような跡を作った。

掠つただけでもヤバイ事になることは、容易に予想できる。
一方、押し寄せるようにやってきていた兵達は、万里の強さを知つ
てゐる為か、此処まで酷くなる前に安全な場所まで離れ、様子を見
ている。

そうして、亜鬼十は避けると共に外へと飛び出る。

クルリと宙で回転し、庭に着地する亜鬼十。
だが休む暇も与えぬ万里の攻撃を、袖口から出した小刀で受け止め
る。

「テメエ、忍かよ？政宗からは武将って聞いてんだけどな。」

「武将か。正しく言えば、軍人ですけどね。幹部ランクのさ。」

「軍人だあ？んなもん、一緒だらうが！」

「いえいえ！やつぱり違いますよ！武将と忍の一石二鳥な感じが軍人ですからね」

「何シレッと自分は万能みたいな事言つてんだよ！」

「万能なんかじゃありません。戦場のオールラウンダーです」

火花を散らせながら、二人は対話を続けた。

お互に、相手に対して同じ疑問を持つていた。
そして、同じ解答へと辿り着いた。

間違いない。

お互にそう確信した瞬間、同時に互いから距離を置いた。

「なあお前、何か秘密でも持つてんだろう？」

「そりゃあ、人間だからねえ。」

「・・・。」

「・・・あはー」

「どつかの忍みてえな笑い方してんじゃねえよ。」

異世界人。」

「それは君も、でしょ？」

＊＊＊

園原 万里。

通称『死神』、『奥州の獸』と呼ばれる。

噂では、人間ではない姿になり、無数の刃を身に纏つた化け物らしい。

だが、実際の万里は全くの人間である。

何処からどう見ても人型であり、刀を身にまとっていない。
それどころか、刀 자체を身につけていないのだ。

だからだった。

この園原万里が、あの有名な死神であるとは気づかなかつたのは。

しかし、鞘えない部屋で、刀だけを手にしている万里を見て、亞鬼十は何となく思った。

化け物という表現は、きっと間違っていないのかもしねないと。

「なるほど、ね。『デコラララ…!』及び成田作品は結構読ませてもらつた。何だ、そういうタネなんだね。その刀、『罪歌』なわけだ？」

「なるほどな。アンタの世界じゃ、この世界と俺のいた世界は同じような存在つてわけだ。」

「みたいだ。もしかしたら、君にとつてなら逆の位置にたつかもしれない。」

「まあ、どうでも良い」とだ。アンタが何なのか、何か企んでるのかなんてすぐに分かる。」

「『罪歌』ちやんに乗つ取らせれば?出来るかなあ?」

「ああ?」

「『罪歌』ちやんの洗脳は誰でもとまいかないってことだよ。」

「・・・。」

「図星?」

「・・・ケツ！んなもん、やつてみねえとわかんねえぜー！」

キラリと煌く罪歌を手に、赤く光らせた瞳に亜鬼十の姿を映す。

駆け出した。

切つ先は寸分の狂いもなく、真つ直ぐに亜鬼十の体を射抜かんと伸びるように近づいていく。

それでも、やはりこの攻撃はかわされるだろ？

そう確信する万里は、次の手を瞬時に考えた。

「・・・。」

「・・・は？」

あまりにも簡単だった。

容易に、スルリと、刃が貫かれた。

離れている兵達が息を呑んで驚いているのが分かった。つまり、見間違いとかではない。

亜鬼十はわざと避けなかつた。

あえてその刃をその身に貫かせたのだ。

当然痛みもある。

表情に苦にして、立っている。

動かない。

「テメエ・・・、何のつもりだよ・・・っ！」

「・・・フフッ・・・。愛してる、か・・・。告白されちゃいまし
た。」

万里は大きく目を見開いた。

洗脳できない人間も存在する。

あの池袋最強のようだ。

全く恐怖を感じない人間は、いる。

「しかも、君の罪歌は変り種みたいだね。宿主だけを愛してるなん
てさ。」

「・・・お前馬鹿か？洗脳できねえでも、あんたは死ぬぜ？」

「普通なら、ね。」

「...?」

何だ？

この変な感じは？？

刀から、水が伝わるよに、亞鬼十の血が赤い線を作る。それはとっくの間に柄にまで達し、万里の手を染める。

(いや、おかしいだら・・・ッ!?)

何故、血が伝わってくる?

微妙に傾いているかもしれないが、不自然すぎる血の量。そして何より、その血は『脈打つ』いた。ぬるぬると、手にまとわりついていく。

やばい。

その瞬間、亞鬼十は刀を引き抜き、腕にまとわりつく血を地面に払い、亞鬼十との距離をとった。

亞鬼十は別段動く事もなく、ただ立って万里の行動を見ていた。

「君は罪歌という妖刀を持っている。その身上に宿して、それだけで化け物と呼べるのかな？」

「なんだよ、アンタ……ッ！」

「悪魔、かな。みんなにはそう呼ばれてたよ。」

「……みんな……？」

「やつぱつ、周つと違う事が出来るつて、恐怖なんだりつね。異端者には厳しいでしょ？みんなさ。」

「……まあな。」

「どうですか？似た者同志、勝負してみませんか？」

「そうだな。興味深いのはマジだしな。」

万里の体に黒いオーラがまとわりつぶと同時に、噩鬼十の体から白いオーラが見え始める。

お互にオーラをぶつけ合ふ、その力が互角であることを理解した。

「黒司 亜鬼十、参ります。」

「園原 万里、斬り進むぜ。」

互いに手にした刃を構え、全力をぶつけた。

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 18 * 鬼姫、宴

奥州・青葉城。

綺麗な三日月の昇る、静かな夜を迎えた。

が、その静寂は一瞬にして打ち破られる。

「カンパ――――イッ！！」

大きな広場に、無礼講のもと開かれた宴。
亜鬼十への侘びも兼ねた、歓迎会らしいのだが。

その主役はなぜかボロボロである。
苦笑しながら、もう一人の方を見ると、不機嫌そうな顔をして酒を
飲んでいる。

昼間。

万里と本氣で一騎打ち、するつもりだったのだ。

『てめえら、何やつてやがんだ！』

「マジで効いたんですね。」
おかげで今でも笑顔がぎりぎりな。

(痛い。。。

「Oh、男前なFaceじゃねえか?」

「あせせ、そりゃビリも。。。

「チツ!」

「バンちゃんの方が男前ですよ。」

「テメエ、喧嘩売つてんのか?..」

「もう向でもかんでもそう思つのはじつかと思つてますよ、バンちゃん。」

「つたぐ。お前、女なんだから顔に傷つけんな。You see?..」

「せうせう。性格はともあれ、顔に傷はせめときましょ?..」

「。。。おー。俺が女って信じるのかよ?..」

「違うんですか？」

「・・・。」

「なあ、いつから気づいてたんだ？」

「会った時からなんとなく。」

「・・・マジかよ。」

「確信したのは、『罪歌』むやんに告白された時だけだね。」

「そうだ。それだけだ、お前傷大丈夫なのか？」

「もう治りますよ。そういう体质なんですね。」

「・・・異世界人ってのはみんなそうなのか？」

「ああ。一概にそうだとは言えないでしょ？ ね。バンちゅんはひとつ思いました？」

「・・・どうでもいい・・・。関係ねえ。」

素っ気無く返された。

万里は不満そうな顔しかしていなかつた。

途中で決闘を強制終了されたことが気にいらなかつた。実際、亜鬼十もそれについては不満を感じていた。

しかも、殴られた。

「やつぱスッキリしねえ！亜鬼十！表出ひやッ！…」

「…？万里、やめねえか！テメエが本気出したら後始末どつすんだ！…」

「硬い事言つなよ、小十郎！俺、スッキリしねえ！マジで、モヤモヤしたままは「恋か？」違えよ！ボケ！…」

「ていうか、慶ちゃんいたの？」

「…ひ、酷くね…？」

「だつて、全然喋つてないから。存在認識されてないよ？」

「いたからー俺最初からいたからな！」

「うせー、空氣ー！」

グサリと言葉が刺さり、慶次は落ち込んでしまった。
亜鬼十は夢吉と一緒にナデナデと頭を撫で、一ノ口一ノ口笑つてこる。

「バンちゃん、それ酷いよ。」

「知るかよ！ つーか、テメエだつて十分酷エ事言つたぞ！！」

「確かに。」

話が脱線するもその度に万里は亜鬼十を表に出そうとするが、亜鬼十は二コ一コするだけであり、万里もまた小十郎に強く制止され、全くもつて不愉快極まりないとばかりに酒を飲み始めた。

「おーおー、Honey。そんなに飲んだら明日辛くなるやで？」

「そんじきやあ、アンタが診てくれんだら？」

「何だよ？隨分と甘えてくるじゃねえか？」

「悪いかよ。」

「・・・バンちゃんは酔つと甘えん坊なんですね・・・。」

「ああ。」

頬を紅潮させ、政宗にベッタリな万里の姿は、いつもの彼女からはかなりかけ離れた光景だ。

正直可愛い人だなあ、なんて平和的にも思った。別に間違っては無いだろう。

現に、あの政宗もテレテレしている。

「まあ、ラブラブですねー。」

「うふ・・・。」

「恋してるねーってことですよ。」

「おひー・せうだなー恋つてのは良いもんだー！」

「ちなみに、慶ちゃんはどうなんですか？良い女をいましたか？」

「ん？ああ、ちょっと気になつてる奴が一人、な。」

「へえ。結婚するんですか？」

「えー？あ、いやー、そこまでは……。」

「……慶ちゃん、人の恋を云々言つてゐる暇ないと思ひますよ。」

「えと、そ、う・・・かな・・・？」

「うん。」

「せうこひ亜鬼十ほどなんかい？恋してるかい？？」

「俺は・・・、せうだね。自分でも自覚してゐるほど疎にからぬ。よく分からないな。」

「おーおー、そりゃねえつて！人には言わせとこでよ。」

不満げに言つ慶次は、まるで子供だった。

そんな彼に、亜鬼十はただ一ヶ口と笑つてみせた。

「すみません。俺、悪い子なんで。」

「別にそういうことにはならないだろ?」

「そりか?」

「そうだつて。」

「・・・ふーん・・・。」

「

クスクス笑いながら、お酒を口にする亜鬼十。

その毒氣の抜けるような笑みが、どこか安心できない感じがした。

慶次は、あちこちへと旅して周り、たくさんの人と交流し、見てきた。

だからこそだ。

慶次は相手がどんな人間なのか、人一倍に分かつてしまう。
亜鬼十については、正直詳しくは分からぬものの、その笑顔が作り物でしかない事は確かであると、茶屋で出逢つたときから見抜いていた。

かといって、亜鬼十の笑みに不自然なものは一切無い。
その証拠に、他の人間は全く気づいていない。

それほどに、亜鬼十という人間は慣れている、ということなのだ。

自分を偽る事に慣れている。

それが日常。

それが、自然なこと。

「なあ、亜鬼十。」

慶次は何を思ったわけでもなく、ただ言葉を零すよつて言った。

「それって、疲れねえか？」

「・・・フフッ」

全く、分からぬ。

今、何を思ったのだろう？

自分の事を、今どんな風に見てる？

(コイツにとって、俺は何処に立つてゐる・・・?)

「それ以上考へない方がいいかもしだせんよ…慶ちゃん。」

「…」

考えている事が分かるのか？

きょとん、とする慶次に変わらない笑顔で言葉を放つ。

「その先にあるのは、不安だけですか。」

「・・・怖いな、アンタ・・・。」

それは不正解です、とハッキリ言われた。

「心外ですね。」

「・・・・」

「本当に怖い人間というのは、貴方のような人間をいつんですよ。」

「・・・・え？」

返ってきたものは、予想外も予想外な回答。^{コタエ}

慶次は目を見開いて、亞鬼十の言葉を待つた。

「人同士の安寧とは、無知からなるもの。理解など、本当はただの破壊行動。慶ちゃんみたいに、そうやって他人を見極めて、理解して、その上土足で踏み込んでこられちゃ、こつちは困ったさん立ち入り禁止令出しちゃいますよ。恐怖のあまり。」

「それって怖い事か？」

「怖い事ですね。とても怖い。俺が一番恐れていること。理解、即ち恐怖です。」

「何でそんなに・・・？」

「その知りたがりな性格も、恐怖の相乗効果だよ。」

「……つまり、詮索するなって」とか……？」

「やうですょ。」

「分かつた。悪かつたな。」

「本当です。心臓に悪い。」

「……本当、悪いな……。」

「セイは『そんな風に見えない』ですよ。せいやー、書いたわばから
・・。」

「ええー・・・。」

ちゅうとそれは難しくないかい?と尋ねる慶次に、西鬼十は「そん
な」とあつませんよ」とだけ言つて、お酒を飲み干した。

19 鬼姫、そして死神

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

夜は更け、遠くの山から日が昇つてくる。

その様子を眺めながら、亜鬼十は城の前にいた。

昨日の宴で伊達の連中は見事に酔いつぶれ、今も眠っている。

本当は彼らが起きてからでも構わないのだが、逸早く敏春のもとに戻らなくてはならなかつた。

鬼御子を残してきたとはいえ、彼らは実力のみの、経験のない戦闘兵である。

やはり、心配だ。

* 19 * 鬼姫、そして死神

*

「やつぱテメH斬りせひー」

「あ、そうですね。」の後龍ひやんとイチャイチャしながら看病してもらひますよ~。」

「してねえよ。」

「あんまつ無理しちゃ駄目ですよ。」

かなり泥酔していたはずの万里が、そこにいた。
が、二日酔いのようだ。
顔色が少し悪いし、現に気持ち悪看起來してくる。

「……バンちゃん……。」「わ行くんだな。」

「すみません！」

手にした長刀『罪歌』を向け、今にも斬りそつた勢いだった。
しかし。

それよりな、と咳払いして言つ万里。
意外にも冷静になつた、と思つたのはこの際黙つておこひつ。

「政宗の野郎は、あの熱血馬鹿をライバル視してゐる。」

「うん。 そうだね。」

「正直、俺にはライバルだのなんだの今まで意識したことかねえ。」

「そりなんだ。 実は俺も。」

「だが、今回俺はお前をライバルとして見る事にした。」

「フフッ！ それも同感 結構気が合ひつね？ 流石ライバル同士。」

「……こいつが、決着をつけよつぜ。」

「そうですね。そして、いつまでも友達でいたいな」

「……変な奴。」

「よく、言われます。」

「また、お会いしましょう。」

「そん時は決着の時だ！」

二人は口元に笑みを浮かべ、互いにこの先の武運を願つた。

『俺はその話に乗る気はない。クライアントに背く事は規定違反だ。』

『人質、か・・・！しかし、ここで貴様に屈する事以上の裏切りはないッ！』

『俺は許さない！絶対にッ！貴様を殺すッ、松永ア――――ッ！』

！』

今でも忘れないものであった。

あのときの事は、鮮明に覚えている。

今日のよつな満月だった

あの白い綿のような髪に、血のような赤が魅惑的に照りし出せられた
いた。

きつかけこそ好奇心といつものではあったが、実際に出逢った瞬間、
ゾクリと背筋に感じた。

その高貴な、孤高の姿勢は、どんな宝よりも魅力的だった。

びつしても欲しい。

そして、いつものように、手段を選ばなかつた。

しかし、孤高の宝はこの手に墮ちる事はなかつた。

その後、彼はとある小国に武将として、名の知れた存在である。羨ましい事この上ない限りだ。

あんなにも勇ましく美しい宝を、手元に置いているのだから。たらしい。

美しき宝には、やはり人を魅了する力があるのだろう。

「だが、貴殿は私のモノ。今この時も、貴殿を満たすは、この私であらう?」

誰もいない暗闇に一人、『松永』はくつくつと笑う。

彼の問いかけに、答える者などもぢろんいない。

20 鬼姫、修行前

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 20 * 鬼姫、修行前

亞鬼十が帰ってきたのは、夕刻時であった。
離れたのは本当に短い間なのだが、どこか懐かしく思つてしまつ。
この地が故郷のように思えるのだ。
確かに、自分は元の世界にこひりう思いを持つ事はなかつた気がする。

「まあそれよつて……。ゆつせー、ちやんと約束守つてるかな。
・・？」

約束とは、此処を離れる前に交わしたものだ。

自分が戻るまで槍を持つな、というものだ。

最初は、納得できていない分幸村は中々首を縦に振つてくれなかつた。

だが、お館様」と武田信玄によつて、半強制的に首を縦に振らせてもらつた。

幸村に限つて、約束を破るといつ事はないだろつが……。

待て、を知らない氣もする……。

「つて、それじゃあ犬だよねえ……。」

犬。

・・・幸村犬・・・。

(可愛い・・・ッ。)

いやいやいや！

これは失礼だろ？！

でも・・・。

お館様あーと叫ぶ幸村が、柴犬に見えてしうがないのは、もう仕方のない事だろう。

亜鬼十の姿を見た門番は、うちの一人が主の元へとかけて行こうとしたが、亜鬼十自身がそれを止めた。

深い意味はない。

ただ、そこまでするようなことでもない、と思つただけだ。

亜鬼十は馬をなし、城の中へと入つていった。

* * *

亜鬼十は、IJの國の誇る武将である。

同時に、兵達にとつては師匠でもあるのだ。

師の不在中、彼らはどんな鍛錬をするのか、少し不安だった。

(まさか、手を抜いてはいないだらうな……?)

だが、敏春や安曇も時折見に行つてくれているだらう。
そう思つ事で不安を取り除いていた。

「・・・何やつてゐのかな、ゆつきー？」

「！？・・・あ、亜鬼十殿！無事戻られましたか！」

屈託の無い笑顔。

ああ、まぶしい。

日輪のようだ。

だが、それよりも・・・。

「ただいまー！それで、なにしてたのー？」

「つむー！亜鬼十殿不在中、某が変わりに鍛錬を見ていたのでござるー。もちろん、約束どおり槍は持つておらぬし、天松院殿に頼まれ申した事ござるー。」

「・・・敏春め・・・。」

「…えっと……、亜鬼十殿……？天松院殿は兵達のことも考えて某に頼まれたのだ。某も、何もすることが無く退屈であったのだ。

」

「……、アイツを責めるのは止める。だが、帰つて来た以上、これ以上ゆつきーに迷惑はかけられない。」

「迷惑などとは…」

「良いかい？ゆつきーに必要なのは十分な休息なんだよ。」

「や、某……、納得できないで」ゼウス「…」

「むー…ゆつきーは考えるより実際に体感した方が分かるんだから、大人しくしどぐべきなの…！」

「しかし、三日も休んでは腕がなまってしまいます…！」

「三日しか休んでないのになまるか！ゆつきーの今までの馬鹿みたいな鍛錬でソレって、どんだけ馬鹿なことしてんだよ…？」

「ば、馬鹿とは失敬な…」

「お馬鹿です！十分に馬鹿です…！」

「うるせえなー。ううし……つて、亜鬼十一…お前無事だったんだなあ…」

嬉しそうに笑う敏春。

だが、そもそも原因である敏春に、亜鬼十は不機嫌全快でぶつかつていった。

「なんだよ？ 兵達にも良い刺激になるじゃねえか。」

「なるよ。十分になるよ。現に怠けないしね。でもー・ゆつきーにはゆつきーの鍛錬があるの！」

「槍を持たない事だろ？ それの何処が鍛錬になるんだよ？」

「IJの脳みそ筋肉馬鹿が。」

「あんだと、亜鬼十一。」

「ゆつきーは、筋肉を酷使しちゃってるんだ。」

「筋肉だあ？」

「詳しい説明して理解できるとも思っていないから、黙つてたんだけど。」

「馬鹿にするな！」

「ゆつきーは難しい話わからないでしょ？」

「ぐつ・・・まあ、・・・。」

「セツちゃん……」

突然呼ばれた佐助。

本来なら出るべきではないのだが、亜鬼十の雰囲気に呑まれ出でてしまった。

「服。」

「？」

「セツちゃん、服を脱げ！」

「？！何言つてんの！？ちよ、姫の旦那ア！…？」

佐助は困惑しながらも、亜鬼十に押し倒され、慣れた手つきで上の服を脱がされた。

「破廉恥で！」わいらああああああーーーー

「何でだよ！男の裸だろーが！！」

「その男の裸を何で見せる必要あんのさー！」

「ん?参考。」

「何の!?」

「いいですかー？」

完全に佐助の言葉を遮る亞鬼十。

佐助の腕をガシッと捕み、道場の中にいる全員に注目するよつと見て見せる。

「忍つてのは、仕事柄こつした細身の体型が基本。そして、女に変装する必要も時にはあるから、筋肉質じゃダメなわけだ。しかし、忍が全くのひょろい肉体であるかと言えば、そうではない。さつちやんを見れば一目瞭然でしょ？ 忍の連中の修行は、必要な部分だけを鍛えるといひ、まさに計画的な鍛錬と言えます。」

「・・・それと真田殿とどう関係があるんだよ？」

「やうですぞ、亜鬼十殿！ 某は忍ではござりぬ――。」

「黙れ、お馬鹿！」

「また馬鹿つて・・・！？」

「忍には忍の鍛錬があるよう、その人間にあつた鍛錬がある！ 戦術だつて、槍使いと刀使いじや結構違つでしょ？」

「そ、それは・・・。」

「ゆつきーの場合は、その鍛錬に行く前に休息といつ下りしきりえが必要だつたの！ つまり、これも立派な鍛錬だつたのだ！ 分かつた？」

「う、うむ・・・。」

「・・・はあ～・・・。」

「ねえ、もう良いかなー？」

「あ、うん。」

ズボッと服を被せて着せる。

佐助の顔が引き攣っているが、この際気にしない方向でいく。

「ゆつきーは今我慢の時なんだから、大人しく、ね？」

「わ、分かり申した・・・。」

「・・・。さてと、敏春兄も早く書類とにらめっこに戻つた方が良いんじゃない？」

「・・・。そうだな。まあ、お前が無事戻つてこれた。これで一安心だ。」

「鬼御子がいたでしょ？」「

「ばーか！そりじゃねえよ！お前のこと、皆心配してたんだぜ？独眼竜に手打ちにされてねえか。」

「竜ちゃんたちとは和解したし、友達になつてきましたから大丈夫ですよ。」

「竜りゅやんつて、お前なあ・・・。」

「わあわあ、戻った戻った！」

「分かってるよーじゃあなー。」

敏春は乱暴な口調で去るも、その表情は笑っていた。
先ほどの安心したと言つた葉は、決して嘘ではなかつたのだらつ。

「全員整列！」

幸村と佐助が残る道場で、亜鬼十は号令をかける。
兵達はみな素早く整列した。
乱れ一つ無い動きだ。

「全員、基礎体力は十分についた今、次の段階に進ます。さつき言つたように、忍や武士、武士の中でも使う武器によって鍛え方が違います。そこで、明日は刀以外を握つてもらい、後に分かれて鍛錬してもらいます。」

「分かれて、ですか・・・？」

「体術と剣術は基本的にやらせていたが、人によつて得意不得意つてモンがあるから。それに、体術や剣術は接近戦でしか發揮できない。戦となつた時、それでは何も守れません。・・・いくら中立を謳おうとも、攻めて来る奴らはいるだろうからね。」

将来、部隊を作る必要がある。

全員が刀と体術では、将棋でも勝ちはしない。

剣の才ある者はそのまま続けても良いが、ない者は別の武器を持たせるのが妥当だろう。

刀、槍、弓。

近距離、中距離、長距離。

「の三つの戦力は、戦でなくとも、自衛には必要となる。

「以上！今日はこれで解散！！」

「あつがとうござります！」

兵達は驍がしく道場を出て行つた。

21 鬼姫、修行前夜

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 21* 鬼姫、修行前夜

*

夕餉を食べ、幸村は湯浴みを済ませた。

真夏ではあるが、夜はとても涼しい。

ここに来てから、決まって縁側で涼むようになった幸村は、今日も同じ場所で涼んでいた。

「旦那。湯冷めしなによつてね？」

「分かつてある。」

「なら良いけど。」

「ゆつべきーー！」

「…何で、」やるか・・・?」

縁側に座り涼む幸村と佐助の所に、気配も無く現れた亜鬼十。

「明日、槍使いとして素質のありそうな人間を見てくれるかな?」

「え?」

「実際に使つていゐゆつべきーの意見を聞きたいんだよ。」

「別に良いでござるが、よろしくのか?」

「良いも悪いも、俺は槍専門ぢゃない。手広く武術はやってきたが、

やはり専門にしてるゆつきーには及ばないからね。」

「・・・分かり申したー」の幸村、協力をせていただくでござる。」

「よろしくねー」

「口うと笑う亜鬼十に、幸村たちも笑つて應えた。

「亜鬼十殿は笑つていてください。」

「ん?」

「亜鬼十殿には笑つていてほしいでござる。」

「・・・旦那・・・。」

「へべりうした、佐助??」

「ゆつきーあ・・・、天然タラシだよね・・・。」

「なつ！？何ゆえそのよつなつ！？」

「だつて、何かわつきの・・・、告白みたいだよ・・・？」

—

「ル・カ・セ・ル」

「まあ、俺としては構わないけどねー

「やつぱ」アンタ衆道なわけ?」

「違つよ。女に衆道はあり得ないでしょ。」

「まあそりだけどさ・・・・、あれ?」

「？」

「んー?どうしたの?」

「えっと、姫の旦那って、男だよね？」

「見た目はね。」

— . . . o —

「・・・えへ！」

「…………はー。」

「敏春兄や安曇さんも知つてゐる。」

「ここで二つと、兵達も知つてこることである。」

「お、おおおお、おな、女子! 亜鬼十、殿、が……。」

「驚きゅあだよ、ゆひきー。」

「こや、驚くよ。」

「しかし、女子のそなたが、何故……?」

「南蛮と日本との違い、かな。まあ、南蛮こもこにいこりあるナビ、俺がいた所は、男女平等でね。女武将なんか普通にいたわけですよ。少なかつたけど……。」

「わうで! ジヤったか。」

「格好は相手がナメるからでね。兵たちも最初俺が教えることに抵抗を持つてたからさ。見た目だけでもと思つてね。」

「でも、やっぱり男にしか……。」

「サラシを巻いてるものもあるかもね。まあ、女らしくするつもりはないから良こなさ。」

「なるほどねー。だからウチの田那も平氣なわけだ。」

「なーー、や、佐助!」

「ああ、ゆつやーは女性に免疫ないでしょ?」

「やの通りなのよ、姫の田那。いや、田那じゃなくて、姉さんかな?
?」

「田那で良いよ、ゆつやん。」

「……、分かったよ。アンタそれで通すわけか……。」

それ、とはもちろん『ゆつやん』と云ふ呼び名である。
まだ諦めてなかつたよつだ。

だが、しかし。

幸村は思つ。

情けない話、女とともに会話をした経験のない自分にとつて、西鬼十と会話をするというのは、まさに初めてのことであった。今、女であると聞いても、自然と焦りが無い。流石に最初は焦つたが、今では平常心を保つてゐる。

見た目、の問題なのだろうか。

「それじゃあ、湯浴みしてこよつけかな。ゆつきー、湯冷めしないよう気につけてね？」

「大丈夫でござるー。佐助と同じ事を言わないで下され。」

「俺も心配だからね。じゃー！」

ヒラヒラと手を振りながら、西鬼十は去つて行つた。

* * *

男装していたのは、此処に来る前からそうだった。

もつひのぐらいの年月を、男装して費やしたのだろうか。

始まりは、兄の死がきっかけだった。

兄は、家族に愛されていた。

成績優秀。

運動もそこそこできるし、容姿も良かつた。

けれど、病弱だった。

学校にもあまりいげず、家にいる事が多かつた。

一方自分は、平凡だつた。
体も健康体で、成績も悪くない。
体を動かす事が好きだつた。

けれど、両親に愛されなかつた。

特に母は自分を嫌つっていた。

理由は分かつてゐる。

自分の髪と目の色だ。

俗に言うアルビノといつもので、生まれつき色素が平均より少しないのだ。

そこから始まつたのは、疑惑。

アルビノ体质の人間は、両親どちらの家系にもいなかつた。
もしかしたら、自分の子ではないのかもしれない?
愛人でもいるのか?

父のちょっとした疑念は、意外にも本人の中でも無くなつていいく。

けれど、母は違つた。

そう思われていると察知した母は、疑念の無くなつたその時までも
疑われていると思い込んだ。

それが、母と自分の間の溝を大きくしていった。

深く、深く。

そんな自分を救つたのは、他でもなく兄だった。

兄は家族の誰よりも自分を可愛がってくれた。

彼女の知る愛情は、兄からの愛情のみであった。

体の弱かつた兄は、やがて病院に入院した。

年に何度も続いた。

その間、家で彼女はいないも同然の扱いだった。

会社の重役に就いた父は、家にまともに帰つてくることが少なくなつた。

同時に、母はそれを嘆いて酒を飲む毎日だ、時折、暴力も振るう事だってあった。

そんな中迎えた、兄の死。

両親は強い悲しみを受けた。

だが、一番に悲しんだのは、妹の彼女であった。唯一可愛がられた兄が、もう傍にいないのだ。

この先、どうすればいいのか分からずについた。

途方くれる彼女に、母は自分の悲しみをぶつけるように暴言を吐き、何度も暴力を振るつようになつた。

抵抗も出来ない自分。

何も出来ない中で、必死に考えた。

どうすれば終わるんだろう？

どうすれば、楽になれるのかなあ・・・。

そして、彼女は自分を捨てた。

名前も、過去も、全て、全部・・・。

それが、『黒土 亜鬼十』の誕生だった。

22 鬼姫、選別

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 22* 鬼姫、選別

*

翌朝。

道場に集まつた兵達は、新たな段階へと進むこのときを緊張して待つていた。
此処で、自分達の道が決まるのだ。
ある意味、試験のように思つても間違つてはいないだらう。

「さてと。武器を持たせるのはまだ早いから、とりあえず二つを手にしてもいいわ。」

用意されたのは薙刀である。

幸村が試合に使つたソレである。

一人一本ずつ手にすると、全員初めてのことにして興奮気味だった。

まあ、普通そつなるだらうなあ・・・。

「まずは、基本の動きを見せよ。その後、3人ずつその動きをやつてもらう。別に完璧にする必要は無い。そこまで求めてはないからな。以上!」

予め幸村に頼んでおいた型をやつしてもらつた。
流石使い慣れているだけあって迫力がある。

兵達もあんぐりと口を開いていた。

「アホ面晒してんじゃねえ！」

「一す、すみませんッ！！」

「次はお前らだ。出来る限りで良い。」

そういうて、最初の3人以外は後ろに下がらせた。

サツと頭を下げ、同時に見よう見ま似でやつてもうつた。
予想通りにぎこちない動きだ。

「次！」と、亜鬼十が言つと、次の3人が前に出て同じように礼をする。

手元の紙にメモをしながら、それらを繰り返し行つた。

「どうかな？」

「つむ。・・・」の者はどうであらつか?」

「ああ、彼ね、確かに彼には良いかもしないね。この彼はどう思
うかな?」

「」の者も筋がいいと思いまする。」

途中相談もしながら、全員を何とか見終わった。

全員で50人。

兵士の数にしてはかなり少ない人数だが、今のこの国では仕方ない、
ギリギリの人数なのだ。

甲斐や上杉のあの大群に攻められれば、一発だらう。

そのための戦力である亞鬼十なのだが。

それに、じつして鍛錬させるのも、あくまで戦の為ではない。
自衛が最大の目的だ。

そして一行は、一度外に出る。

遠くに的がある。

「次は『』です。まずは一連の動きを見せます。」

亜鬼十は『』と矢を持ち前に立つ。
弦に矢をつがえて、上に持ち上げると、ゆっくりと弦を引き、『』を
下ろしていく。
狙いを定め、軽く手を離す。

パンッ！

的のど真ん中に命中する。

「肩に力を入れると、矢はあまり飛ばなくなるから注意するよ！」。

では、3人！前に！」

槍の時と同様に三人ずつ見せてもらひ。弓については、さこちなさというのは見えにくいか、やはり矢の飛距離が短い。

届いても的に刺さるものはいなかつた。だが、それは今回求めている事ではない。

才あれば、あとは鍛錬次第なのだ。

才無くとも努力次第、というのも同様に。

全て終わつた時には、曇時だつた。

一旦休憩を入れ、亜鬼十と幸村は城の中にある一室に向かつた。メモしたことをもとに、分けていく中で、幸村は口を開いた。

「亜鬼十殿は、コレを体感してもらいたかったのか？」

「何かな？」

「先ほど、某の槍ではなかつたが、体が軽く動きも前よりキレが出ていたで」
「やる。氣のせいで、」
「やれりつか？」

「……それなら成功だよ……。」

「…成功とは、やはりコレは氣のせいではなかつたので」
「やるか…？」

「まあね。」

「でも、何で休んであんなに結果がいいの？」

「…? も、佐助!」

「よー…せいつちやん…その答えはだね、ゆつきーはある馬鹿みたいな鍛錬しまくつて、肉体を酷使していたんだよ。そのお陰で丈夫なんだろうけど、年取つたらボロが出てたよ。今回休息を取ることで、筋肉を休ませ疲れをしつかり取れた。結果がこれなの。」

「ふーん。田那、結構疲れてたんだね？」

「某、全く疲れてなかつたのだが……。」

「慣れだよ。それが当たり前みたいに感じてたから、気づかなかつたんだよ。」

「なるほどねー。」

「亞鬼十様。」

そこに鬼御子の一人シンクが現れた。

子供ながらも、佐助が見た限りでも忍の動きだった。

「何かな、シンク?」

「クロガネとマシロが、サボってます。」

「・・・シェスターだよ。」

「すみません。南蛮語は理解しかねます。」

「お皿ねだよー。今日は良い天氣だからね。」

「・・・。」

「えっと、起きないと?」

「はい。」

「……放つておこでいいよ。」

「御意。」

「良いのー？それで？」

「良いんだよ。まだ子供だからね。それ、今、やる時こむらさくあらひだりか
れば十分だよ。シンクも寝てていいんだよ。」

「いえ、仕事がござりますので。」

「もうかい？無理しちゃダメだよ？」

頭を優しく撫でる鬼十に、シンクは少し顔を赤くして姿を消した。

「あつちやん、彼らのお世話を頼んでもいいかなあ？」

「え？俺様！？」

「あつちやん、武田のオカソでしょ？だからできるよー。」

「オカソツヒ、何!? オカソジヤないよ、俺様は! !」

「それに、忍には忍から教わった方が良じやない?」

「・・・同盟相手とはいえ、そこまでする気は俺様ないんだけど。」

「それ書いたら、俺がゆつきーの鍛錬つける義理ないんだけどね。」

「た、確かに・・・つー佐助! 頼むぞーーー!」

「つー、田那! ?」

「別に術を教えてとは言わないよ。安曇さんにはまかせてるしね。さつちゃんには彼らに躰をしてもらいたいんだ。」

「つづけ?」

「俺や安曇さんはあくまで戦闘術とかだからね。躰はしないから、ちよつと問題なんだよね。弟や妹の世話をと思つてお願ひーーー!」

「・・・はあ。しょうがないなあ。」

「「」めんねー」

「心にも無に事言わないでくれない?」

「思つてゐよ、ちやんとーじやあ、こつへーーー!」

やれやれ、と深い溜息をつきながら、佐助はその場から消えた。

一方で、幸村は向やうり着え込んでいた。

選抜の事ではなこようで、視線は別の所にあった。

「どうかした、ゆうやー？」

「こ、いえーただ、シンク殿たちはまだ子供。親もおんなじで、じめりつへ、それとも・・・」

「いやーこと生きてるよ。」「

「や、やうどあつましたかーすみませぬ。このようないいな不躾な事・・・。

「シンクもクロガネもマシロも、親の事情で見捨てられた子なんだよ。」「

「な、なんと・・・!？」

「まあ、そんな珍しい話でもなこよ。世の中が「ほんなんじや、しょうがなこってトコだね。まあ・・・、平和でも・・・、変わらないも

のは変わらないけどや。」

「え?」

「いや、じつちの話」

「・・・それで、亜鬼十殿が拾つてきたと?」

「わかった」と。

昨年。

一揆が終わって一ヶ月後。

亜鬼十は城下の更に外の村々を偵察し始めた。
前の当主の横暴な政策に、田畠のほとんどは枯れ、人々の顔には絶
望すら感じられ無い程、表情がなかつた。

そんな村々で、彼ら3人は生きていた。

とても貧しく、厳しい環境の中で生にしがみついていた。

「・・・」

「ゆつきーが悲しむ事でもないよ。そんな親、何処にでもいるからねー。」

「や、そのような事はありませぬ！親なれば、我が子を愛さぬわけあり申せん！」

「・・・やうだね・・・。ホントに、やうあれば良このことね。」

「・・・亜鬼十・・・殿・・・？」

「戦乱の世といつものが、その原因であればいいのよ。そうすれば、みんな幸せなのにね・・・。」

微笑みながら言つた亜鬼十は、どこか夢かつた。

まるで消え入つてしまつのような、どこか脆い存在に見えてくる。

彼女は言つまでもなく強い。

幸村も手が出ないほど、きっと幸村の知る武将たちでさえ敵わないかもしない。

そんな強者の姿が、この時だけ弱く見えてしまつた。

「ゆつやーの両親って、どんな人なの?」

「某の dejāvuaru ka?」

「うふ。」

「母は某が生まれてすぐ亡くなってしまった。父からは、とても綺麗で優しい母であったと。」

「美人さんなのは本当だろ? む。男の子は母親に似るつて言つしね! ゆつやーが女装したら可愛いんだろ? ね?」

「は、はは、破廉恥なツ! ?」

「ふふん で? お父さんほ?」

「父上は某の憧れで dejāvuaru。もちろんお館様の事も慕つておりまする。しかし、それとは別に父上には、父上への強い敬意を持つて deejāvuaru。」

「ゆつやーは幸せ者だね?」

「あ、いや、まあ。。。。それより、幽鬼十殿の両親はどうなので dejāvuaru?」

「俺の?俺の両親は、とっても愛してくれたよ。これ以上にないくらいこ、俺を愛してくれてたよ。」

「ならば、亜鬼十殿も幸せ者でござるなー。」

「ただ、妹がね。」

「妹？ 亜鬼十殿には妹君がおられるのですか？」

「うん。病におかされて死んでしまったんだだけだね。」

「…・・・申し訳」ぞわらん・・・。辛い事を・・・。」

「うん。妹は、幸せだったよ。幸せそうに笑つてたんだ。」

「笑つて？」

「うん。」

「きっと、大好きな家族と最後まで一緒にいたからでござるよ。」

「そうだね。そりあつて、ほしにな・・・。」

悲しそうな笑顔を見せる亜鬼十。

幸村は一瞬言いかける言葉を飲み込んで、立ち上がった。

「廁に行つてくる」と言ひ残し、その部屋を去つて行つた。

「先に行ってるね」と、亜鬼十は幸村の背中に向かって言つ。

『泣かないで下され。』

そう、言いそうになつた。

23 鬼姫、修行開始

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 23 * 鬼姫、修行開始

*

この日、兵達の鍛錬は弓と槍、そして刀と分けた後、軽く型をを教えて終了した。

軽く、と言つても慣れないことをしたのに変わりなく、全員疲労が顔に出ている。

そんな彼らに厳しい一言を放った後、解散させたのだった。

「さてと、次はゆつやーだよ。」

「おおー!待つておりましたぞ!—」

「うん、じゃあ、一度かるーく槍を振つて調子を整えようか。」

亜鬼十も槍（薙刀）を持ち、幸村と共に振るう。

あまり槍を使う事がない彼女だが、動作に一切ぎこちなさ等なかつた。

それに幸村も、さすがと感心した。

そうして、少し体が温まつた所で、彼女はこれから鎌倉について説明する。

「まずは時間ね。兵達の鍛錬が終わつた後だから、今の時間に初めて夕餉までだよ。最初、軽く手首をほぐして、この城の周りを軽く3週。この間に体をほぐす為に、けよつと変わつた動作を入れるよ。」

「

「?」

「太ももを上に大きく上げる。これを左右交互に速くやつてもらい

ます。タイミングは一周終わる度に、左右あわせて10回ね。3週したら、道場横の広場に移動して、短い距離を全力で走つてもいい。3往復ね。」

「亞鬼十殿、それには一体どのような意味が……？」

「敵を素早く倒す為だよ。槍の射程距離に素早く敵を入れることで、攻撃における速さが上がるのです。」

「な、なるほど……。」

「次いくよ。道場に入り、腕立て、腹筋、背筋、各30回。後に、槍の素振りをするんだけど、コレに制限はないから。ゆっさーのやりたいようにしてもらって構わないから。あと、今日は次にする実践から始めるよ。」

「分かり申した！」

「組み手みたいなものだから、力まないよっこね？」

「はい！」

早速やるつか、と道場の真ん中に立つ。
離れた場所から、幸村が真剣な表情で槍を構えている。

「来なよ」と合図すると、幸村は闘志とともに突っ込んできた。いきなり槍の連続攻撃である。

だが、亞鬼十は簡単に避けていく。

しかも、その場からあまり動いていない。

元の位置から後ろに、数ミリも動いていないのだ。

「良いかい？ ゆつきー？ こういう攻撃は、相手の動きを瞬時に見抜き、射抜くんだよ。相手が避ける先を予想して攻撃する。それから狙いに相手を追いやるように攻撃する。それが重要、だよっ！」

ガシッと槍を掴まれた瞬間、亞鬼十はその槍の上で体を翻し回転させ、幸村に蹴りを入れた。

幸村は一瞬崩れた体勢を立て直すが、すでに遅く、亞鬼十の槍が腹部についていた。

ドンッとくる力に、体はそのまま後ろに叩きつけられた。

ズシンとくる重い攻撃だったが、試合の時の突き程ではなかつた。その証拠に、叩きつけられた壁にヒビ一つ入っていない。

「ゆつときー、本当丈夫だから教え甲斐があるよ」

「そ、そつで、『いざい』ますか・・・・。」

「・・・大丈夫?」

「!大丈夫で!」の幸村まだまだ余裕に!」

「それは良かった」「レド音をあげられたらどうしようもないからね。」

「では、参るッ!」

「どうぞ。」

鍛錬は亜鬼十のいうとおり、夕餉まで続いた。

終わつたときには、ゼエゼエと呼吸を乱す幸村が大の字になつて倒れている状態だった。

体には擦り傷と打撲がいくつか見える。

あの丈夫な肉体といえど、亜鬼十の攻撃は確かにダメージを与えるものだった。

本人は相も変わらずといった様子で、幸村のそばに胡坐をかいた。

「ゆつやーに宿題だよ。俺じぶんして槍を掠める事も出来なかつたのか。自分なりに答えを出していいださい。期限は明日、ゆつやーの鍛錬までに、ね？」

「・・・わ、分かり、申した・・・。」

「ひ、姫の田那――――。」

「?――」

「そ、佐助・・・?」

そこに佐助が降りてきた。

正確には落ちてきた、という表現が正しいかもしない。

「うよつとトランター」のト達にどんな教育してんのやー――?――?

「?」

亜鬼十が首を捻ったと同時に、クナイが佐助と亜鬼十の間に飛んできた。

「猿飛佐助！ 覚悟ッ！…！」

「うわつ…？」

「…・・。」

「シンク、どうなつてのかなー？」

説明が途切れ、何がなんだか分からぬ亜鬼十と幸村に、シンクは簡潔に状況を説明した。

何やら、鬼ごとをしていたらしく、遊び方が若干間違っているようだ。

「そうだね、鬼ごとは鬼を倒す遊びじゃないよね。」

「しかも武器使つて、穩やかじやないなあ。」

「やう思つなら止めてー姫の田那ツーーー！」

「一人ともそこまでだよーーー！」

「・・・。」

「チツーー。」

「舌打ちが聞こえたぞ、クロガネ。」

「あー、助かつたーーー。」

「全く、二人とも。遊びに武器何か使っちゃダメでしょ？あと、鬼“”とは鬼から逃げる遊びだからね？決して鬼退治する遊びじゃありません。」

「ユウちの方が面白いんで。」

「（ ハクハクツー。）」

「すみません、賛同します。」

「まあ俺もそれは思つたび。」

「ちよつとーー。」

「でも、遊びだからね。イジメじゃないからね？」

「しょうがないなあ。」

「亜鬼十さんがこつなら、そのよひに。」

「（ノクリー）」

大人しく従う3人に、佐助は内心驚いていた。
初めて相手をするとはいへ、こつも違うとは……。

やはり、この3人は忍なのだろう。
きちんと自分達の立場が分かつている。
上の人間に忠実だ。

「さあ、夕餉をすませましょうか。今日はシンクの好きな煮物らし
いですよ。」

「本当ですか・・・？」

「ホントホント 安曇さんがシンクは頑張り屋さんだからって！」

「／＼／＼。」

「（クイクイ）」

「マシロの好きな玉子焼きはないけど、良い子にしてたら作ってくれるよ。」

「 めんじく 」

「クロガネは一生でないかもね」

۱۶۰

תְּנַשֵּׁן

なつ / / / ! ?

「まだまだだな、クロガネ。」

「んだと、シンク！」

「あたふた」

楽しそうにしている亞鬼十に、それを囲む鬼御子三人は、本当の家族のように思えた。

しほついている。

しかし、それが嘘であるかのよつて、幸村こはそつ思えたのだった。

24 鬼姫、そして赤御子

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

「どうでもいいことなんて、世の中腐るほどあると思う。」

現実主義者としていうのであれば、どうでもいいと思えるかどうか
なんてのは、人それぞれあって。

ならば、たくさんの人と考えを集めたら、最終的に全てがどうでも
いい事に類するのではないだろうか？

亞鬼十からすると、この考え方、ただ一人の考え方でしかないわけで、
これをどうでもいい事だと正直思うわけだ。

* 24 * 鬼姫、そして赤御子

三人は同じよつこ『どうでもいい』と答えた。

もちろん同じ質問に対してもある。

それが彼らの答えならば、それで良い。

そもそも、この質問に正解も不正解も存在しないのだから。

* * *

シンク。

本名 くれは。

小さな村に住む、貧しい家の長男。

まだ小さい第二人を抱え、親の手伝いをしていた。物心ついたころから、当たり前の日課であった。

だからこそ、貧しさに不満を持つた事はない。強いていうなら、それもまだ分からぬ第二人にもっと飯を食べさせてやりたい。

それだけだった。

両親はそれを知らない。

くればが、子供ながらに自分達よりも大人であつた事を。その為、くればから見た両親は大人気なく見えた。一度として、両親に誇りを持てなかつた。

そんなある日。

両親は今年の不作にご機嫌斜めであつた。

この家だけでなく、他の家も不作であり、仕方の無い事といえば仕方の無い事だつた。

だが、この不作を誰かのせいしないではいられなかつた。

「・・・つ。」

朝。

一番末の弟が、死んでいた。

飢え。

それが一番の可能性。

だが、くればは分かつていた。

これが、他殺である事を。

くればは、両親を自分達の命を脅かす存在としてみるよひとなる。
残つた弟を、決して離さなかつた。

だが、今度は予想外な事で弟を失う事になつてしまつ。

「・・・。」

人柱。

連續の不作に、村全体が村はずれにある祠に祭つた神へ、生け贋を捧げようとした。

そして、弟が選ばれた。

あの一人は、実の息子を勧んで差し出したのだ。

くればはもちろん反対した。

だが、大人たちは聞く耳持たなかつた。

他の子供達は、自分達が犠牲にならぬように何も言わなかつた。

「こいに・・・？」

やつと言葉を覚えた。

これからいろいろな事を学ぶはずであった弟を、村の人達は殺したのだ。

村の子供達は、見殺しにしたのだ。

くればは思つ。

この村には、まともな人間はいないのだと。
いや、奴らは人の皮を被つた鬼だ。

化け物だ。

生きていく糧を失つたくればの瞳は、死んだ人間のように虚ろであ
つた。

* * *

白い鬼に出逢つた時。

この時も、彼は生きていながらも死んでいた。

死にかけている子供なんてそこらじゅうにいたが、くればはある意味異常だった。

顔色も、体つきも、何もかも他の子と変わらない。けれど、全く違う。

その瞳は虚ろにして、強い悲しみを持っていたのだ。

「俺は亜鬼十。君は？」

目の前にいるのは、見た事のない顔の大人だった。
そして、初めて見た真っ白な髪と赤い瞳に、彼は『鬼が現れた』と
思った。

「俺を喰つても、うまくない、ぞ・・・。」

すると、目の前の白い鬼は目を見開き、次に大きな声で笑い始めた。
何を笑っているんだ？とその鬼を見ると、鬼は優しく微笑んでくれ
はの頭を撫でた。

「悪いが俺に人の肉を食う趣味はないよ。」

「鬼は、人肉を喰う。」

「なるほど！でも俺人間だからさ。」

「・・・。」

今考えればかなり失礼な事だった。
けれど、そんな失礼な自分に、とても優しかった。

「ねえ、君は何を失つたんだい？」

予想もしない質問に、くれば目を見開いた。

何故、そんな事を聞くのだろうか？

俺が何かを失つたと、どうして分かるんだ？

そんな疑問を持つていながらも、くればは一人の弟の事を話した。

鬼は、全く表情を変えない。

悲しまない。

同情しない。

けれど、鬼は確かにくればを救つた。

「くれば君の親かな？」

「…」

親も同様に思つただろう。

白い髪に赤い瞳を見て、鬼だと。

そんなことを知つてか知らずか、何もないように言葉を紡いだ。

「君達親にとつて、子供つて何なのかな？」

その質問に、親は答えない。

目の前の異形に、恐怖を覚えた一人に、声を出す術などなかつたのだ。

何も言わない親に、鬼は言つ。

「俺は黒士 亜鬼十。この國の新たな主の命により、村を偵察しに来たのだが。この子供、くれば君の才を見込んだ。そこで、この子供をお譲り願いたい。」

「？！」

「もちろんタダではない。それなりに金もある。」

錢の入つた袋を一つ、親の田の前に置いた。すると、今まで恐怖に混乱していた彼らは、一気に表情を緩めた。

「足りないならもうと用意しよう。」

「い、いえーそんな・・・ツー・ビツギー、うひの息子を使つてくだせえ！」

金にものを言わせる人間を装い、わざとそんな事を言つて見せた。
結果がコレである。

この結果が間違つている事を、くれはは分かつている。
しかし同時に、あの両親ならあり得ると納得もしているのだ。

亜鬼十はその金を受け取つた親を、一瞬にして視界から消した。
つまりない人間ほど、見るにたえないものはないだろう。

くれはの手を握り、帰路につく。

帰り道を歩く中で、くれはは何も聞かなかつたし、言わなかつた。

「くれは君。君は、親元に帰りたいかい？」

「え・・・？」

「買った本人のいう事じゃないけどね、子供は親元にいるべきだとも思つんだよ。それで、君を買ったお金は返却しなくても結構だ。君が帰りたいと思つなら、この道を戻るがいい。」

「・・・俺にとつて・・・。」

「？」

「あの二人は他人ですから。家族はもう、とうの昔に死にました。俺は、独りです。」

「・・・。」

「あなたのせばこじて良になら、俺はついていきます。」

「いいのかい？この道を行けば、君はきっと命の危険に曝される。一度や二度じゃない。楽なんでものはない。それでも、ついて来るか？」

「はい。あなたがそれを許すのなら。」

亞鬼十はその答えに満足気な顔をしていた。

くればも、自分の答えに間違えはなく、自分の意思を伝えた。
後悔などしない。

そして、今。

あの方のそばにいたられることを、誇りに思っている。

後悔などあり得ない。

一生、あの方についていく。

それが、くればを捨て、シンクに生まれ変わった少年の決意である。

25 赤き虎、探索

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 25 * 赤き虎、探索

*

幸村は考えていた。

亜鬼十の出した宿題の答えを、一晩かけて考えても分からず、今に至ってしまったこの状況。

あと数刻すれば、期限となってしまう。
どうしたものか・・・。

昨日だけでなく、その前にも、亜鬼十は自分の攻撃を意図も簡単に避け、反撃に移し変えてしまう。

あれでは亜鬼十に傷一つ負わせる事などできない。

「いやー某は別に亜鬼十殿を傷つけたいわけではないッ！……」

誰もいない空間で、一人弁解する幸村。

佐助は、今日も鬼御子の世話で近くに控えていない。
彼も彼で、あの三人に苦労しているようだ。

特に、クロガネだ。

亜鬼十以外には全く懐かない。

そもそも鬼御子の三人が人に懐かないのだ。
その中で特に懐かないのが彼の少年である。
決して不器用でもないし、正直世話上手な佐助が手を焼くなど余程の事なのである。

「と、いかん！某、佐助の心配をしている場合ではないぞ。」

「どうやつにつけたのか考へなくては……。

しかし、答えは浮かばず。

「どうしました、真田殿？」

「天松院殿！」

執務を終わらせた敏春が、内輪をパタパタさせてやつてきた。
その様はすっかり慣れた感じである。

最初の頃はあんなにも緊張して、幸村にも農まつてこたといつひ。

「アイツの鍛錬はどうですか？」

「ほこー…とても素晴らしいと思こますなーしかし……。」

「？」

昨日の宿題について話すべきだらうか？

幸村は悩んだ。

が、急に黙り込んだ幸村を心配した敏春は、その横に座つて相談してみると言わんばかりに尋ねてきた。

それに押し負けるように、幸村は重い口を開く。

「掠める事も出来なかつた理由、ね。」

「はい・・・。」

「うーん・・・。正直な話、俺はあいつと違つて頭を使うのは好かん。だが、奴の鍛錬は確かに力になる。その答えが分かつた時、大きな成長を見せられるだろつ。」

「そうでござるつか？今まで槍を振るい、鍛錬を積んだ某には、亜鬼十殿のする鍛錬があまりにも遡り過ぎてしまい・・・。」

「なるほどなー・・・。真田殿。」

「何でござれ・・・ツ！？」

突然拳を叩き込もうとした敏春に驚きつつ、幸村は紙一重でその拳を掴んだ。

「な、何を！？」

「いひいう事なんじやねえか？」

「・・・え・・・？」

「人つてのは、何かを見る時反射的に動作をする事がある。さつきみたいに、殴られそうになつて俺の拳を掴んだ。戦の時だつて、真田殿は刀を受け止めるか、避けるかするだろ？その時、避けようと考へてから動くか？勝手に動く事はないか？」

敏春の問いに、幸村は今までの戦いを思い起こす。

確かに、自分は反射的に避けていることがある。
意識して避けるなんてことはあまりない。

不意打ちであるなら、尚更あり得ない。

「反射で、『ござるか……。』

「まあ、俺の意見だ。参考程度にしてみればいい。」

「ありがとうございます、天松院殿！」

「良じつてー気にしなさんな！」

鍛錬頑張れよ、と敏春はその場を去つて行つた。

反射。

一つの答えである事は分かる。

しかし、本当にそれだけだらうか？

試合の時、自分は亜鬼十の攻撃を反射的に避けていた。だが、避けきれなかつた。

亜鬼十の攻撃の速さに、その理由はあると思つてゐる。

だから攻撃を素早く繰り出す」といひつにかなると思つた。

「……他に……何か……。」

ふと、目の前を通つた佐助と鬼御子三人に視線がうつる。
昨日の続きのようで、鬼ごとをしている。

が、さすが佐助。

三人の連携をいとも簡単に避けている。
やはりまだまだ半人前なのだろう。
しかし、中々の動きである。
下手すれば当たりそうなものだ。

「……そつか……。」

幸村は一つの答えを導き出した。

佐助と鬼御子の間にある力の差。
それは埋めようの無いもので、亜鬼十が前に言っていた事でもあつた。

* * *

兵達の鍛錬が終了し、亜鬼十は幸村を待つていた。

まだ答えを出していないのだろうか、と考えながら自分の愛刀『鬼

牙』を振るつていた。

『鬼牙』は普通の刀の半分の長さしかない、短刀とも言い難い長さの刀である。

いつでも隠し持つているソレは、一揆の時からの相棒である。

敏春が仲間になつた証にくれた大切な刀。
まさに、自分の宝物でもあつた。

「……来た。」

聞こえてきた足音に、亞鬼十は動きを止め『鬼牙』を再び服の中へ隠す。

同時に、幸村が道場に入ってきた。

その表情は、答えを導き出し自信を持ったものだった。

「答え、出たみたいだね？」

「はい！昨日の問への答えは、まさに経験でござる……」

「……。」

「亞鬼十殿は、某よりも戦の経験がありなのでしょう。その経験を糧とし、某の攻撃を反射的に避けていた。これがこの幸村の答えじ给您る。」

「……経験則による回避……。うん、良い答えだね。」

「……では……。」

「うん、正解」

すると、幸村は立ち上がり、「うおおやかたさまああああああ…。」と雄たけびを上げる。

亜鬼十はニコニコしながら耳を塞いでいた。

「ゆつキーの言ひ方とおり、俺が回避できたのは経験による反射だよ。まあ、ゆつきーの攻撃が真っ直ぐすぎるのもあるけど、一番は経験だね。経験する事でいろんなものを習得するのは、何も戦いだけではないからね。といふことで、今日の鍛錬を始めましょう。最初は城を三週だよ。昨日言つたとおりだからね。」

「うおおおおーこの幸村ッ！全力で走りとおして見せまするーー！」

「頑張つてー」

バサラ技並みに燃える幸村に、亜鬼十は感心していた。

無理するといいや、ぬ馬鹿などいひを抜けば、今の新兵達に見透かせ
てい所なのだ。

「のぐら」このやうな氣を見せてほしこのだが。

今度玄さんと相談してみよつゝと思ひ鬼十だつた。

26 鬼御子、そして両親

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 26 * 鬼御子、そして両親

*

幸村の鍛錬は順調に進んだ。

本人のやる気と才能による賜物である。

「ふさんと決めた」の一ヶ月で、大きく変わるだろ? なあ。」

それは予想ではなく、確信だ。

佐助が鬼御子三人と作ったといつお団子を食べながら、残りの期間どう鍛える

か、メニューの調整をしていた。

そういうえば、鬼御子も佐助と結構仲良くなっている。

最初の頃は、仲が悪かつたわけではないが良いとも言えなかつた。

まあ三人の性格やら何やら考えれば、いか仕方のないことではあるのだが。

と、そこに。

慌てたように走つてくる足音が聞こえた。
一瞬幸村かと思ったが、よく聞くと違う。

「亜鬼十さんッ！…」

「どうしたのー？そんなに慌てて？？」

「農民が、農民が・・・、門に・・・ッ！…」

「？」

少しは落ち着け、と言つたものの。

亜鬼十自身、少し嫌な予感がしてきた。

何だ、気持ち悪い。

亜鬼十は兵と共に門へと向かった。

なるほど。

納得だ。

どうしていつも不快な感じがしたのか。

門の前にいたのは、一度会つただけの一組の夫婦だった。

「息子を、返せ……。」

「私の息子を盗らないでえ……。」

「それでも國のお偉いさんだかあ……。」

溜息がかかる。

「あの誤解つむよつな」といつの止めてくれませんか?」

「……。」

「お、鬼め！ウチの子供何処にやつただあ！！」

「そんなに呼ばなくとも聞こえてる。といつが、今更何しに來たんです？」

「子供取り返しに來ただあ！」

「まう。それで？返せ、と？？」

「大人しくけえせ！」

「・・・返すも何も・・・、連れてって良いと言つたのはあなた方だろ？」

「金で言わせて句を言ひただあ！――」

「つまり。俺が金出さなかつたら渡さなかつたと？」

「やうだあ――」

「・・・寝言は寝て言こやがれよ。」

「――」

『鬼の形相』。

まさに、この言葉が当てはまつた。

冷たく見下すような瞳には、怒りの炎が灯っていた。

それに農民達は怖氣つき、後ろに下がった。

「俺は何も強制してない。金は渡したが、最終的に子供を差し出したのはお前

達だ。それに、本人達は俺のもとにいることを、自分の意志で望んだ。無理に

帰らせる気は、俺はない。」

「う、嘘だあ！子供がそんな事分かるはずねえだ！」

「脅しただか？オイラ達みたいの脅しただかあ！！」

「誰が脅したよ？テメエらが勝手に怖がってただけじゃねえか。」

反論が止む。

当然だ。

本当に脅した事なんてないのだから。

お帰りを、と促す亜鬼十に、夫婦達は恐れながらも睨みつけた。

帰る気はないらしい。

正直面倒だな。

これで会わせれば今以上に面倒な事になりそうだ。

(まあ、十分面倒ではあるが・・・。)

「亜鬼十殿！ どうなされたのだ？」

「あ。」

騒さが気になつたのだろう。

幸村と敏春がやって来て、これはどうしたことだと尋ねてくる。
どうもいひやない。

凄く面倒な状況としか言えない。

「ああ。面倒そなうだがな・・・。」

「・・・。それしかいか・・・。」

「・・・じやあよお、子供に命わせでわれば良こんじやね?..」

「だから違つ(碧)。」

「お前、それ犯罪だぜ?」

「じてなこ(碧)。」

「亜鬼十殿、そのような事を・・・!?」

「何も分からんオラ達ん子供盗つてつただあーー!..」

「は?」

「子供を、子供返してくださいせえー!..」

「・・・。」

「で?句だよ、これはま・・・。」

「・・・。」

「もしや、前にお話を聞いた鬼御子の・・・。」

仕方ないか。

気が進まない中、亞鬼十は小さな笛を吹き鳴らす。
すると、数秒遅れて三人が現れた。

鬼御子三人衆。

シンク。

クロガネ。

マシロ。

「く、くれば・・・つ！」

「黒羽あ！」

夫婦達は自分達の子の名を呼んだ。
しかし、一切反応を返さない子供の様子、目の前の親達は全く気づかない。

もう、彼らに自分達の入り込む隙間がないといつ事を。

「亜鬼十様、鬼御子一に参上いたしました。」

「うん。早速だけど、シンク。そしてクロガネ。二人のご両親を名乗る者が来ています。」

「・・・。」

「君達に会わせるとしつこくてね。」

「恐れ入りますが、このシンクに親などございません。」

「！？」

「な、何を言うだかあ・・・？」

「俺も同じく。」

「とこいつ」と、帰つてください。」

「お前が・・・、お前が何かしただあー！」

「鬼め！この化け物があー！」

「元に戻せえーーー！」

「IJの悪魔があーーー！」

「いい加減にしろーー貴様らアツーーー！」

「ーー？」

叫んだのは、以外にもシンクだった。

いつも冷静にことを運ぶ彼が、珍しく怒りを露にしていたのだ。
それに、亜鬼十も少し驚いていた。

「今更親だと?ーーどこの面トドケて言えるのだ!」

「親に向かつて何を・・・ツ！？」

怒る親の頬をクナイが飛んだ。
ツーと血が流れ、顔色を一気に青くさせた。

「いい加減にしろと言つたはずだ。」

「子供に向を・・・・・。」

「あんたらが言えた義理かよ？」

「！？」

「忘れもしねえ。」の身に受けた屈辱を、俺は一時も忘れた事は無い
いッ！」

やはつこつなつたか。

内心溜息をつく亜鬼十だが、正直どうでもよく思っていた。
あの夫婦共々が子供にした事は、決して許されるような事ではない。

「……子供に殺されたとしても、血業血禪とこつたところだわい。

まあ見てる側は、いい気はしない。

それに、このまま殺させるのは亜鬼十にしても不本意だ。

「はーいはー！理解できたかな？命が惜しいなら帰りなさい。今すぐ、一度と

彼らの前に現れないよう！」

「……こんな感じ……子供が親殺せるわけがねえだ……」

「……ええ、そうですね。」

「……」

「シンク！」

「あなた達など、殺す価値もない。なぜなら、生きる価値さえも無いのだから

。」

「キビシーむ言葉だねえ、シンク。グッサリくる一言だ。」

「シンクに賛成だ。俺も、あんたら相手にしてる暇あつたら、猿男相手にして

た方が良いな。」

流石に効いたのだろう。

さつきまで勢いのあつた夫婦達の目には、絶望がうつった。

そして、フラフラとその場から去っていったのだった。

27 赤き虎、そして鬼御子

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 27 * 赤き虎、そして鬼御子

幸村は分からなかつた。

彼らがどのような過去を持つているのか。
何故、実の親にあそこまで言えるのか、理解できなかつた。

「俺様から姿消したと思ったら、そんな事になつてたの？」

「ああ。某、ああなた」ことが理解できぬ。こへりぬんでこよつとも、実の親である「つへ。」

「でもやー、旦那。そんだけ恨まれるって事は、それだけの事をしたってことじやないの?」

「つむ・・・。だが、シンクたちはまだ子供。親元にいる事が、幸せではないだろ?」

「幸せなんかじゃなによ。」

「ー? シ、シンクー!」

いつの間にか後ろの方に正座しているシンク。
そして更に後ろで、クロガネとマシロがそれぞれの位置でくつろいでいる。

二人の皿も、幸村の方に向いている。

「亜鬼十様は、一度として無理強いなどした事ございません。我々に何度も戻りたいかと尋ねてござります。」

「その答えが、ここに残る事ござるのか。」

「はー。」

「・・・。」

「亜鬼十さんのおつだな。」

「?」

「アンタ優しかったぜ。その上甘こじよ。」

子供に言われてしまった。

だが、幸村の考えは変わらない。
これが正しい形だとは思えないのだ。

「シンクも俺もマシロも、親と呼べる親なんかいねえ。」

「マシロに聞いては、親の顔も知らないのです。」

「亜鬼十殿から少しだけ聞いている。しかし、それでも親でござる

「う？」

「そうですね。確かに、生まれてきた以上、それは変えられようの
ない事実です。」

「だが、それだけだ。事実だらうが何だらうが、俺は絶対工認めは
しねー。死んでもなッ！」

「何故そこまで拒むのだ？ 一体何が・・・？？」

「うるせえー。アンタなんかに関係ねえよーー！」

「おー、クロガネ！」

「（あわわっー。）」

クロガネは吐き捨てるように言つて部屋を出て行つた。
その後をマシロは慌ててついて行つた。

「・・・失礼いたしました。」

「いや、某も聞くべきではなかつた。」

「・・・分かつてゐるのです。」

「？」

「自分達がどう足掻いた所で、親は親。子供に親が選べない以上、致し方がないこと。ですが、我々は抗っているのです。あのどうしようもない過去に・・・我々にとつて、親とはそんな過去の産物なのです。」

「・・・。」

それでも。

それでも、理解しきれない。

幸村はまだ表情を険しくさせるだけだった。

田課となつた涼み。

自分を落ち着かせ、一人考えていた。

自分はどうであつたか。

そうして分かるのは、鬼御子と自分が相容れぬほど違つてゐる事のみだつた。

きっと、これ以上考えよつとも理解できない事なのかもしれない。そう思い始めていた幸村の横に、湯浴みを済ませた亜鬼十が座り込んだ。

「彼らのことかい？」

「亜鬼十、殿・・・。亜鬼十殿は、どうお考えでござるか？」

「親を拒む子供について、かな？」

「うむ。どうしても、理解できぬ。」

「・・・普通の事かどうかって、多数決の結果なんだよ。」

「・・・」

「一般に考えられてる事も、常識も、知識の正誤も、所詮多数決で決めたものだ。親元にいる事が正しい、それもただの多数決。人の数ほど、考えというのは存在するものだ。」

幸村は何も言わず、黙つて聞いていた。

亜鬼十の言つ多数決の説が、正しいのがどうか。

正直正しい気がしている。

人それぞれに考えがあるのだ。

同じであるわけがない。

この戦乱の世も、皆が和平を望む中で、自分達各自の信念を持つて
いる。

だからこそ、戦が起ころ。

自らの信念こそが正しいとでもいふように、自分達は戦う。
負ければ、その信念とともに死に逝く。

それが戦乱の世の理なのだ。

「とくにクロガネが受けた傷は、とても大きい。三人の中でも一番傷ついている。シンクほど大人でない故に、マシロほど幼くない故にね。」

「……。」

「クロガネは、誰よりも両親を信じていたんだよ。」

だからこそ、その傷は大きかった。

シンクのように親を敵視する事もせず、ましてやマシロのように親を知らないわけではない。

「それを、クロガネの両親は最悪な形で、その信頼を踏み躡つた。」「一体、何を……？」

「くわしくは教えられない。彼の誇りを汚したくないからね。」

「……。」

「ゆつときー、これ以上彼らの過去を詮索しちゃダメだよ?」

「分かった。そつするでござる。」

「ありがと。」

亜鬼十は優しく微笑み、その場を去つて行つた。

彼女もまた、何かを抱えている。
だからこそ、分かるのだろう。
自分とは違つて、彼女にはあの三人の気持ちが、痛いほどに・・・。
詮索するな。

それは、自分の事も含まれていたように、幸村は思えたのだった。

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 28 * 鬼姫、憎悪

*

今まで生きてきて、誰かを憎んだ事はない。

両親に対しては、どうでもいいと無関心だったから。

あとは、普通に友達作って楽しんでいたし、それなりに幸せだった。

でも、一度。

ただ一人だけ、今でも凄く憎い人間がいる。

松永 久秀。

今でも鮮明に覚えている。

奴が燃やし、奪つていった村。

消え逝く命の灯火を。

忘れる事のできない罪悪感と、あの時感じた無力感。

決して忘れはしない、この憎悪という黒き炎。

闇は、今でも俺の心を支配している。

俺は今でも、過去に縛られている。

* * *

嫌な夢を見た。

それも、最近見なくなっていた夢。

あの時以来見なくなっていた、元の世界の夢。

「ソルを見るところ」とは、ソクでもないことが起きる前触れだ。

それも、冗談にならないほどの事が、起きよつとしている予兆。

呼吸を整え、亜鬼十は部屋の障子を開けた。

まだ月が昇っている。

位置からすると、今は深夜だ。

誰も起きてはいないだろう。

「・・・水・・・・。」

無性に喉が渴く夜だ。

嫌な夢を見たせいかもしね。

一人廊下を歩きながら考える。

この先、何が起るかのだろうか。

あの時のような、自分の無力を思い知らされるような事、起るうとしているのか。

亜鬼十は思わず唇を噛んだ。

今でも忘れられぬ罪悪感は、時間と共に消える事などなかった。

あの時、どうすべきだったのだろう。

奴の言つとおりにしていれば、良かったのだろうか。

しかし、分かっている。

言つとおりにしたところで、あの男が何もしないわけないのだ。

きっと、俺の知らぬ間に村を襲つていただろう。

結局、救えないのか。

俺が無力である事に変わりないのだ。

助けたかった。

終わつてしまつた今でも思つ。

親も嫌つたこの髪と瞳を、全く怖がらなかつた彼ら。いつも、笑いあつてくれた、家族のよつな存在。

それなのに・・・俺は・・・っ！

「悔やむ事ではないわ。」

「ーー?」

聞き覚えの無い女の声に、一瞬驚き後ろに下がつた。

そこには、黒いフード姿の女。

金髪の綺麗な長髪。

青い瞳。

どう見ても南蛮の人間である。

「こんな夜更けに、不法侵入ですかー？」

いつもの調子で笑って見せると、南蛮の女も綺麗に微笑み返した。その笑顔は、まるで少女のようでもある。

だが、亜鬼十の内なる感覚は警報を鳴らしている。

気をつけろ、と。

「What person is it? (誰だい?)」

「It is not as much as the interviewer, too. (名乗るほどの者ではありません。)」

「Do I have an occupation? In or
the master?」

(俺に何か用かな? それとも、敏春兄にかな?)

「Myself don't have an occupation
on to the noble woman. It of it
was asked from some, man. Sayi
ng it deprives this country of
the noble treasury.

(私は別に何もない。でもね、ある人に頼まれたから。貴女を、
連れて来いって。)」

「noble treasury. . .なるほど、今回の口クで
もないことつていうのはこの事か. . .」

「. . .」

「松永久秀、だな?」

「. . .」

「今更日本語が分からぬってわけじゃないでしょ?」

「だんまり、ねえ。」

「. . .」

亜鬼十は軽い口調で提案した。

「It goes, being selfish if letting me know a place. It is the meaning that it is possible to save the labor that you take it. Doesn't it think that it is a good idea? (場所を教えてくれたら勝手に行くよ。それなら君の手間も省ける。良いアイデアだろ?)」

「I, too, agree. However, it doesn't think that it is labor. (そうね。でも、手間なんかじゃないわ。)」

「?」

「だって貴女、私より弱いもの。」

「ふせんじやないけど、驕りはその身を滅ぼすよ?」

「私からしたら、驕つてるのはあなたの方よ。孤独な鬼姫さん。」

「おっと、 そうなのかい？」

「ええ、 そうよ。」

「そつか」

ここで人が怒るのは普通の事だ。
だが、亜鬼十は全くもつて冷静。
平常心を保つたまま、笑っていた。

その変化のなさに、相手は笑うのを止め無表情になった。
続いて大きな溜息をついた。

「・・・、あなたって扱いにくいわ。」

「君は人間関係において不器用な人だね？」

「あなたみたい壊れた人間に言われたくないわ。」

「そりやどーも。」

「・・・松永は、あなたを気に入っているわ。何故かしら、とずっと思つてたの。」

「俺はあの男に氣に入られてる事に、ものすく不快感を感じるよ。

」

「同感。同情しますわ。」

「ありがとう。」

「いえいえ。・・・それより、彼の居場所だったかしり?..」

「うん 教えてくれるかな?」

「その必要が見出せないわ。」

「?」

「言葉のままで。・・・黒土・・・さん・・・。」

息を呑んだその瞬間。

視界が暗転した。

29 鬼姫、不明

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 29 * 鬼姫、不明

城が騒ぎ出したのは、皆が起床してから数刻たつた頃だった。一人の武将が、忽然と姿を消してしまったのだ。

「くそ！ 一体どこに行きやがったんだ？」

「申し訳ございません。忍隊、鬼御子、全員で捜索いたしましたが、見つかりませんでした。」

鬼御子を率いた安曇の報告に、敏春は眉間に皺をよせた。

今まで自分に黙つて何処かへ行くなど、したことがない。
必ず一言はあるものだが、今回は何もない。

かといって、何かしらの事件に巻き込まれたというのもない。

忍の報告では、昨晩から明朝にかけて静かなものだったらしい。

「何らかの理由あつて、自ら出て行かれたのでしょうか？」

「分からん！だが、やはり納得いかん。奴が俺との契約を自ら破る
とは思えねえ。最近奥州との事もあつて、結構大人しくしてたしな。

」

「あの、天松院殿。」

「…真田殿…、すまない。鍛錬の途中であつたのに。」

「いえ、それより、某何やら嫌な予感が致します。」

「嫌な、予感？」

「先ほど、勝手ながら亜鬼十殿の部屋に失礼させていただきました。
これを・・・」

「・・・『鬼牙』・・・俺があいつにやつた刀だ。」

「亜鬼十殿は鍛錬中もこれを隠し持つておるようなお方に『ございま
す。城の外へ出て行くとなれば、この刀も身につけていくはず。』」

「不自然、だな。」

「もしや、何者かに連れ攫われたのでは?」

「一買いかぶるつもりはねえがな、アイツが誰かに攫われるよう
たまかよ?」

「ですが・・・万が一のことも・・・っ!」

「今の所は、外部に流れぬように。亜鬼十には他国の方に出ている
事にする。余計な混乱は避けなくてはならない。真田殿も、このこ
とは他言無用としていただきたい。」

「分かり申した。しかし、こちらでも亜鬼十殿の搜索を手伝わせて
いただけないだろつか?亜鬼十殿は、友人であると同時に我が師で
ござる。お願いいたす。」

「・・・頼みます。」

そうして、鬼姫失踪の事件は、上層部、そして甲斐の一部の人間のみの知る事となつた。

何も知らぬ兵達は、突然のこと驚いてはいたが、鍛錬を怠るには至らず自分の精進に励んでいた。もし本当の事が分かれば、敏春の言ひとおり混乱を招く事態になるだろう。

(亜鬼十殿、一体何処へ・・・?)

「おー幸村ー！」

「ー・・・ま、前田殿！？」

縁側に座っていた幸村に声をかけたのは、前田の風来坊 前田慶次であつた。

何故か城壁に這い上がっている状態で、慶次は手を振つてきた。

「何故そのような所に？」

「いやーー。ちょっとよる程度つていうかねーー。亞鬼十に会って来た
んだけじこるかい？」

「亞鬼十殿と知り合いでござるか？」

「ん？ああ、奥州でな！それで、亞鬼十は？」

「あ、亞鬼十殿は・・・。」

言葉に詰まつた。

亞鬼十殿の消息が掴めないと云つ事は、他言無用と云つ事になつて
いる。

だが、慶次に対して信頼できぬわけではない。

いろんな人脈を持つ慶次になら、もしかしたら亞鬼十を見つけられ
るかもしない。

逆に、他国に知れてしまつ可能性も出てしまつ。
やはり、ここには黙つておくべきだらう。

「亞鬼十殿は今出かけられておりまする。」

「何処にだい？」

「某もそこまでは、天松院殿に使いを頼まれたらしく。」

「へー、亞鬼十も大変だねー。」

「慶次さん、正門から入った方がよくありませんか?」

見慣れない女が、慶次と同じような姿勢で顔を出した。

顔を真っ赤にする彼女に、慶次は笑いながら頭を撫でた

。

「婚儀はまだなんだけどさ、亜鬼十にも紹介しようと思つてな！」

「わ、ついで、」やつたか。」

「冴、と申します。」

「某、真田源次郎幸村と申す！」

「・・・あの、幸村様・・・。」

「？」

「嘘、ついてますね？」

「！？」

かなりストレートに言われてしまった。

すみません、と慌てて謝る冴。

しかし、慶次の方も幸村が嘘をついていることを分かつていたようだ。

その目が、眞実を知りたがっている。

「……他言無用と、約束ある故……」

「……それなら仕方ないか……。よしー探すかーー。」

「ーー前田殿ー探すとは……?」

「汎、頼めるかい?」

「はーー私も、その亜鬼十さんに会ってみたいでーす。」

「しかし、どうやって……?」

「その様子だと、アレかい?亜鬼十が行方不明、つてことか?」

「ーーーーー、うむ……。この事はーこの新兵達は知らぬ。他國にも漏れではならぬ事ゆえ。」

「妥当ですね。」

「ああ。」

「では、呼んでみますね。」

「頼むよ。」

「?呼ぶとは?/?」

よく分からぬ幸村をよそに、慶次と冴はそのまま城壁を越えて中に入ってきた。

そして、慶次は縁側の方に行き、冴は真ん中に立つた。
何をするのかと見てみると、冴は口に指を添え、思いつきり息を吐く。

高い音が鳴り響く。

音は木霊し、遠くまで響き渡った。

と、その時。

遠くの空から何かの群れが飛んできた。

近くからも小さな小鳥達が冴に近づいてくる。

その様子を目を丸くして驚く幸村に、慶次は笑いながら説明する。

「冴は動物と共生する白狼一族の末裔なんだ。やつるのは『獣笛』つていうらしい。」

「しかし、鳥を集めて一体何を……？」

「白狼一族は、動物の言葉が分かるらしくてな。きっと何か分かるかもしけねえぜ？」

「おお！ それは頼もしいで、じゃあー！」

「慶次さん！ 幸村様！ 亜鬼十さんの行方が分かりました。」

「真か！？」

「で、何処なんだい？」

「ここから離れた場所にある、古い寺へ入って行つた、と。」

「何故そのような？」

「そこまでは、ただ、夜更けに亜鬼十さんは一人でそこへ歩いて行つたらしいです。」

「……。」

嫌な予感がする。

部屋に残された刀といい、その寺といい、何故そんな夜更けに行くのだろうか？

次々にわく疑問に、幸村の表情は険しくなっていく。

それを見ていた慶次は、何を思ったのか幸村にこんな事を聞いた。

「恋でもじでるのかい？」

「…? な、何を…今そんな話では…・・・ッ！」

「いや、何か幸村さ、亜鬼十のこと心配してんだろう？」

「して当然ではないか！亜鬼十殿は某の友にござる…」

「本当に友達だからなのかい？」

「は？」

「亜鬼十のこと、好きなんだろ？」

「…す、好き、などと…・・・ッ！破廉恥で！」やれるか…」

「相変わらず純情熱血馬鹿だな。」

「…？」

と、そこに立っていたのは『奥州の鞘』園原万里だった。

何故ここにいるのか尋ねかけたが、奥のほうから敏春とある一人組が歩いてきた。

一人は『竜の右目』片倉小十郎。

そして、『独眼竜』伊達政宗。

幸村の一番の宿敵であった。

「よお、真田幸村！」

「政宗殿！何故ここに？」

「Honeyの夢見が悪かつたからな。」

「Honeyじゃねえよ。」

「万里殿……。」

「亜鬼十は俺の宿敵、ライバルだ。他の野郎にやらせはしねえ。それだけだ。」

「それでは、亜鬼十殿は……っ！」

「生きてはいる。怪我もしてねえ。だが、危険な状況だ。場所までが掴めないだが……。」

「それでしたら、汎殿が見つけましたぞ。」

「ホントか！？ てか、誰だ？」

「汎と申します。」

「前田殿の奥方にござります。」

「マジか！？ まさこ、コイツはやめとけ。せめて一浮城あるだけだ。」

「ちょっ、しないからーなんで」とこうつんだよー。」

「Homeの壁へとおつだぜ。」

「独眼竜！？」

「それで、場所は何処なんですか？」

「私が案内します。」

「天松院殿。」

「分かっている。俺はここを離れられねえ。代わりに、頼みます。」

「お任せくださいー天松院殿!!」

「うして、亜鬼十の救出に向かう幸村たち。

しかし、この先に待ち受けけるものは、何処までも暗い闇であった。

30 鬼姫、そして過去

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 30 * 鬼姫、そして過去

*

兄さんには、ずっとずっと幸せでいてほしい。

それが、幼い頃からの、妹の、亜姫の願いだった。

「さすが亜鬼十ね。オール5なんて凄いわ！」

「大丈夫よ、病気はすぐに治るから。」

「亜鬼十。あなただけよ、私の子供は。」

母は、いつでも亜鬼十しか見なかつた。

「本当に、俺の子なのか？」

ちょっとした不安。

父はただ、確認したに過ぎなかつた。
疑つていなかつた、とは言えないが、すぐに亜姫も自分の子である
と認識して

、普通に接していた。

けれど、母は・・・。

母は亜姫を避け始めた。

「あなたの顔なんて見たくもない！」

「私の子？アンタなんか知らないわ！…」

母からは、一度も名前で呼ばれなかつた。

母の口から出るのは、いつでも亜鬼十。
兄の名前だけ。

しかし、亜姫は一度として兄に嫉妬した事はない。

なぜなら、亜姫にとつて兄 亜鬼十は、自分の世界そのものだつた。
世界は兄を中心に回つていた。

だからこそ、亜姫には両親が愛情をくれないことを、どうでも良い
事に思つて
いた。

そんなある日、兄の病気が悪化した。

そして翌朝、眠るように死んでしまった。
兄の死に顔は、とても幸せそうだった。

亞姫はそれに安堵した。

悲しくないわけではない。

それどころか、亞姫は家族の誰よりも悲しんでいた。
それでもあえて、彼女は涙を流さなかつた。
こんなにも幸せそうな顔をしているのだから、せめて笑って送り出
したい。

だが、そんな思いを知るはずもない両親は、ぎこちない笑顔にもか
かわらず、

彼女の気持ちを一切汲まなかつた。

「お兄ちゃんが死んで嬉しいのー? お母さんの宝物がなくなつてそ
んなに嬉し
いのー?」

「やめないかー!」

「違・・・う・・・。」

「アンタは悪魔よー化け物よーーー！」

「おい、お前・・・！」

「アンタなんか・・・、生まれてこなければよかつたのよ・・・ッ！ー！」

ベタな台詞だった。

けれど、その言葉は亞姫を傷つけるのに十分な言葉だった。
少し期待していたのかもしねえ。

兄が死んだら、両親は自分を見てくれるのではないかと。
最低だ。

最悪だ。

醜い・・・。

亞姫は自分で罵っていた。

母から受ける暴言と暴力の日々の中で、それらを全て否定し、そひに自分で蔑

んでいった。

だが、それはとても苦しい事だった。

学校には行つても、殆どサボつていた。

友達との関わりも、いや人との関わり事態が少なくなつていったのだ。

「どうすれば・・・。」

どうすれば、良い？

私はこの先、どうすれば良い・・・？

彼女は考えて考えて・・・、考えて、見つける。

自分を捨てる。

名前、過去、全てを捨てるといつ道。

高校入学前から、彼女は『黒士 亜鬼十』として過ごし始める。

兄の口調、仕草、趣味、成績も、全てを自分のものにした。兄は、ここに生きている。

亜鬼十は生きている。

それは、徐々に自分を失わせていった。

高校生活の青春は、男としては普通に過ぎていった。

成績優秀、スポーツ万能。

そして、顔も性格も良く、周りからは人気者だった。

母も、暴言や暴力の日々を一転させた。

とても優しい母が、そこにいた。

一度として見せなかつた、優しい顔。

けれど。

母から『亞鬼十』と呼ばれる事が、とても不快に思えてきた。

高校卒業後。

家を出た。

母は悲しんだが、どうでも良かった。

気づいたのだ。

今自分がしている事は、くだらない家族じつでしかないのだと。

弱い自分が許せなかつた。

家を出て、海外に住み始めた。

言葉も意外とすんなり覚えられた。

だが、それではダメだ。

人は極限状態となつたとき、大きな成長を見せるものだ。
これでは強くなれない。

弱いままだ。

だからこそ、心身共に厳しい環境を望んだ。

一年後。

軍人になつていた。

しかも、気づけばトップクラスの幹部にまで上り詰めていた。

唯一の女幹部として有名であつたし、実力も申し分ないと、上司からも気に入

られていた。

そこに、自分の求めた環境がなくなってしまった。

そして、再び思った。

自分は、もう大丈夫なのではないだろうか、と。

昔捨てた自分を拾い上げた。

もう一度、亜姫に戻つてみよう。
自分に、戻つてみよう。

「俺は、私は母と向ひつつ必要がある。」

亜姫は確信した。

母と向ひつつ事が、自分を変える一番の方法なのだと。

「ああああああああああああああああ——ツ——」

帰国後。

久しぶりの我が家で迎えたのは、耳を劈くような母の叫喚だった。
亜鬼十ではない亜姫を見た瞬間、母は狂いだした。

玄関からリビングへと逃げるよつににして行ってしまった母を、亜姫
は追いかけ

る。

だが、その先で見たものは、未だに叫喚する母。

その手に持つ、果物ナイフ。

ナイフは凶器となつて煌く。

グサツ！

避けられた。

本当なら、避けきれるほど。

そのまま、ナイフを叩き落す事もできた。

けれど、それをしなかつた。

亜姫は、失望したのだ。

「亜鬼十は何処！？亜鬼十、助けて…………ツ…………」

母は、壊れていた。

ガラクタだ。

こんなガラクタに、自分を成長させられるものか。

同時に、亜姫はこの先に何もないことを悟った。

ならば、ここで終焉を迎えるのも良いかも知れない。

ガラクタに殺されるなんて真っ平だが、この先、生きていくのもつまらない。

何も感じられないほどに、姫は母親に滅多刺しにされた。

」のまま、死ぬはすだった。

* * *

可哀想・・・。

覚醒する意識の中で、声が聞こえた。

それは、廊下に立っていたフード姿の女の声であった。

「・・・おはよひ、であつてゐるかな?」

「・・・。」

「それとも、お風だつたりするへ。」

「さうね。もうお風よ。」

「やつかー寝すぎた。」

軽口ほこの状態でも健在である。

この状態。

岩壁に枷で両手両足を拘束されて居る状態。

絶体絶命である。

「・・・可哀想、だと思ひ。」

彼女は再び言ひつ。

「ん？」

「あなた、可哀想。」

「・・・そうかい・・・?俺に悲劇の主人公はに合わないよ。」

「そつかしら?」

「そうだよ。」

「・・・そうね。亜鬼十は悲劇の主人公じゃない。幸せそうな死に顔をした死

人に悲劇の主人公なんて似合わない。でも、亜姫はピッタリ。そのままきちんと

と型にはまる。」

「亜姫は昔死んだ妹だよ。亜鬼十は俺。そして、生きてる。」

「それが、可哀想だといつのよ。」

スタッタと近づき、その手が亜鬼十の頬に触れる。氷のように冷たい手をしている。

そのせいか、背筋に氷を入れられてような感覚がした。

「あなたは、決して亜鬼十にはなれない。なぜなら、あなたはあなたでしかな

いのだから。」

「俺は俺だよ。亜鬼十である以上、亜鬼十という人間でしかないよ。」

「いいえ。亜鬼十は死んでる。あなたは、亜姫。誰にも愛されなかつた、可哀

想な人。」

「俺は「亜姫よ。」・・・。」

「どんなに否定しても、あなたは亜姫という人間。誰も見てくれなかつた孤独

な妹。自分の運命から逃げた臆病者。」

だから、弱い・・・。

「だから、誰も護れない。」

「・・・ツー」

「過去も、今も、そしてこの先の未来も、ずっと・・・。」

おかしい。

どうして否定できない?

彼女の言葉が正しく思えてくる。
自分が、弱く感じる。

いや、本当に弱いのかもしれない。

強いとは思わない。
驕るつもりはない。
自分は、弱い・・・。

「だから、あなたから離れていく。あなたの前から消えていく。」

誰もあなたを必要としない。

そうか、これか・・・。

自分の本能が警告した危険とは、こうじうじとか。
彼女の言葉は、絶対に聞いてはいけない。

しかし、それが分かった時には全て手遅れだった。

31 鬼姫、墮落

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 31* 鬼姫、墮落

*

松永久秀は、目の前の至高の宝に口元を緩めていた。

織田の魔女の手を借り、ようやく手に入れた彼女。

女だと知った時は驚いたが、その美しさを見た時納得した。

用意した黒を基調とした着物がよく似合っている。

思つたとおり、あの綺麗な絹のような髪が映えている。

「これで、そなたは私のモノだ。誰にも渡さぬ、亜姫よ。」

虚ろな目をしている亜姫は何も答えない。

松永も、コレには少し残念に思っている。
自分に向けるあの視線が、今では味わえないものである。

百戦錬磨の武士をも震わせる、あの鋭い瞳。

あの夜、その瞳にとりつかれた松永は、亜姫の容姿以上に欲していた。

だが、背に腹は変えられない。

こつじて手にするには、これしかないのだから。

「コレでいいのかしら？」

「ああ、十分だ。礼を申すぞ、織田の魔女。」

「いらないわ、寒氣がする。それよりも、上がつむかへわ。」

「光に集まる虫共であらへ。」

「・・・。」

魔女は無言で背を向けた。

彼女にとつて、この先何があろうと関係なかつた。

自分はやるべき事をやつたのみ。

上で騒ぐ連中が松永を殺した所で、何も関係はしない。

「といふか・・・、光に集まる虫は貴方もじやなくて?」

その言葉は本人に届かない。

魔女はただ、暗闇に姿を消していった。

* * *

幸村たちが例の寺についたのは、城をたつてしばらぐした後であつた。

もう誰も来なくなってしまったような、今にも倒れそうな寺の前。
そこで、幸村たちは異様な空気を感じた。

「H e y! 真田! じゅわー、歓迎されてるみたいだぜ。」

「アーティストの才能を發揮する。」

全員が身構えると同時に、草むらから数十の敵が出てきた。黒い布で身を隠す敵からは、なんの闘志も感じない。

この感じは、過去に経験がある。

金で雇われただけの傭兵。

戦いにおいて、何の意味も持たない者たち。

「松永久秀・・・ッ！」

「Shit！何処までもいけすかねえ野郎だぜ。」

「俺は奴が苦手だ。反吐が出る。」

「（）は、私が残ります。」

「汎！？」

「なら俺も残るぜ。可愛い奥さん残して行けねえ。」

「慶次さん。」

「前田殿！汎殿！かたじけない！」

「早く行ってください。亜鬼十さんを必ず助けてきてくださいー。」

「Of course . まかせな！」

幸村の一点突破により、寺の中へと突入した。

その後を追おうとする敵だが、その道を一人が阻んだ。

「悪いねえ！」

「ここから先は行かせません。」

「前田慶次！罷り通る！――

「白狼の名において、ヒモノは決して逃がさぬ――」

* * *

寺の中は、外見同様に荒んでいた。
誰かがいるような気配もなく、埃臭いところだった。

「どうなつてやがる？前田の女は此処だつて行つてたけどよ？」

「……。何もねえし、ただ汚いだけだな。」

「……ではないのか？」

「政宗様、これを。」

何かを見つけた小十郎。

全員がそこに目を向けると、扉があつた。
警戒しつつも、扉を開ける。

「・・・階段か・・・。」

先は暗く、何も見えない。

このまま進むのは危険である。

と、万里が蠅燭を見つけた。

「N.i.c.eだ、H.o.n.e.y!」

「H.o.n.e.yじゃねえ。」

「では、参りや。」

幸村を先頭に、政宗、万里、小十郎の順で階段を下りていった。

「誰もおらん。」

「罪歌が、奥の方にいるつてよ。松永と亜鬼十だ。」

「亜鬼十殿・・・。」

幸村たちは警戒を解かず進んだ。

他に誰もいないといえど、何処に罠をはつているかも分からぬ。

今までの経験から、このような場所に何も仕込んでいないはずがないのだ。

しかし。

その予想は大きく外れてしまった。

何処にも罠などなく、簡単に先へ進んでしまったのだ。

そして、二人のいるという部屋にたどり着いた。
左右に別れ、中の気配を伺う。

バンッ！

勢いよく蹴破った扉は、大きな音をたてて倒れた。

「よくぞ、参られた。独眼竜に竜の右目、奥州の鞘。そして甲斐の赤き虎。さすが、私の見込んだだけの宝よ。」

そこには、松永と亜鬼十の姿。

松永は大人しく座り込んでいる亜鬼十の前に立っていた。

「亜鬼十殿！」

「・・・貴殿らは知らないか。この宝の秘密を。」

「いつも再会したくねえ人間も珍しい。罪歌もアンタを嫌つてゐる。」

「くくく。」

「亜鬼十殿を返してもいいで」「やるー。」

「返す？それはおかしなことを言ひへ。」

「何ー？」

「ここの宝は、私のモノだ。あの時から、彼女が私を殺したがっているかぎり。」

「あの時……？まさか、奥州で農民殺しをしやがったのはテメエか！」

「はて、どの村の事だつたかな？」

「最悪だな、あの男。てか、亞鬼十！テメエ、そんなとこに大人しく座つてんじやねえ……」

「……」

万里の声に全く反応しない亞鬼十。

それに怒りを覚える幸村たちは、松永を睨んだ。

松永は不適に笑っている。

「亞鬼十殿に、一体何をした！」

「何もしてはおらん。ただ、魔女が手を出してしまつただけのこと。」

「

「魔女・・・？」

「あの者のおかげで、宝は手に入つた。瞳の輝きが失われてしまつて、実に残念だがね。」

「松永ア！」

「おつと。私は卿らの相手をしている暇はない。まだ、この宝を愛でてはおらんのでな。」

松永はニヤリと笑い、指を鳴らした。すると、上から何人もの黒い影が落ちてきた。

姿かたちは足軽だが、そもそも人間ではない。真つ黒な人の影が、不気味に動いている。

「魔女が残していった人形が、卿らの相手だ。」

「何だ、こいつらー？」

「人じやねえ。罪歌が言つてる。」

「物の怪か！」

正体不明の影を目の前に、四人は武器を手になぎ倒していった。

しかし、その不気味な影は、簡単に真つ一いつになるが、同時にすべて治ってしまうのだ。

それはどんな大技であろうと聞かない。

木つ端微塵になつたところで、すぐに再生してしまう。

「Shift！きりがねえ！」

「これが人間なら、一気に済ませられるのによオ！」

「何か方法は！」

「術者を倒すしかねえ！」

「でも、その術者もいねえんだぜ！まさか、その術者も人間じゃねえわけねえよな？」

「知るか！・・・ぐあつ！」

「小十郎！！」

「片倉殿！……………」

徐々に体力だけが削られていく中、影達は全く動じる事はない。容赦なく四人を襲つてくる。

その様子を、亜鬼十はただ眺めるようにしていいるだけだった。虚ろとなつた赤い瞳は、何も感じていない。

作り物のような、本物の人形のよう、冷たい無機物となつてゐる。

「くっせーー亜鬼十のやつ、正気に戻れってのーー！」

「万里ー！」

「何だよ？！」

「お前の刀で、何とかなるんじゃねえか？」

「・・・なーる。かもな。だが、この障害をどうにかしねえとよー。」

「ならば、某が道を作りましょー！」

「松永は俺達でひきつけるー！」

「OK! んじゃ、行きますか!!」

幸村は槍を構えなおし影を蹴散らしていった。

その道を、影が再生する前に走り抜く奥州三人に、松永が刀を抜き立ちふさがる。

が、双竜と呼ばれる一人の武将に足止めされ、一人『奥州の鞘』が走り抜ける。

「田を覚ましやがれ! 厳鬼十オー――――ツ――!..」

万里は罪歌を亜鬼十に突き刺した。

背中に貫通するほどに、深深く、真っ赤な血を滴らせた。

32 鬼姫、暴走

『戦国BASARA』 白き鬼姫物語

* 32 * 鬼姫、暴走

*

「亜姫・・・ツ！？」

松永はその光景に息を呑んだ。
彼からしてみれば、大切な宝に傷をつけられたのだ。

隙のできた松永を、政宗と小十郎は見逃さず、全力で攻撃をぶつけ

た。

攻撃を受けたからだは、そのまま後ろの壁へとぶつか意識を失った。同時に、影達も消え去つていき、身動きの出来ずについた幸村も自由になつた。

「亞鬼十殿！」

「万里、どうだ？」

「・・・つー？」

「おい、万里ー？」

「罪歌が、拒絶されてる・・・ツー」

その時、亞鬼十の指が動いた。

それに気づいた四人はそれぞれ、亞鬼十と声をかける。だが、返答はない。

ただ、黙つて頭を上げるだけだった。

「亜鬼十殿……？」

「……。」

「?!」

その瞬間、万里の体が勢いよく後ろに吹き飛ばされた。
その拍子に刀も引き抜かれた。

傷口からは止めどなく血が溢れ、着物を濡らしていく。

「亜鬼十殿！」

「ダメだ！そいつから離れッ！――！」

万里の声が聞こえる。

反転し、亜鬼十の姿が遠ざかっていく中で。

幸村、そして双竜の一人は、目に見えぬ力によつて吹き飛ばされてしまつたのだ。

「何だ、今の！？」

「分かりませぬ・・・！」

「亞鬼十殿、何を・・・？」

何が起きたのか分からぬまま、立ち上がり自分達に視線を向けた亞鬼十を見た。
相変わらず感情のない目をしている。

だが、幸村はその目を知っている。

稀に見せるその瞳。

失望しきつた、悲しい瞳。

「亞鬼十、か。」

「？」

「別に構わないんだ。俺は別に良い。構わない。そう思つてた。」

「何の話だ？」

「俺は、きっと羨ましかつたんだろうね。誰かに名前を呼んでもらえる事が、誰かに見てももらえる事が、とってもとっても羨ましくて。だから、俺はなろうとした。愚かな考えだと分かつていながらそうした。」

「亜鬼十、殿。」

「結局、俺は一人なんだね。元の世界でも、ここでも・・・。それならいっそう、最初から何もなければよかったですのに。そうしたら、俺は何も求めなかつたのに。」

だんだん気温が下がっていくのが分かった。
吐き出される空気が白くなる。

この部屋全体が凍りついていく。

「何も、いらなかつたのに。」

「（亜鬼十のバサラか・・・！？）やめろ…これ以上気温が下がつたら、お前死ぬぞ！？」

「・・・君のことは、結構気に入ってるんだ。俺とは違つて、最初から人間を嫌つてはいるから。何も求めていなかつたから。すべく、楽だと思つ。」

「・・・樂、ねえ・・・。そうでもねえわ。」

「？」

「これだけは言えるぜ！テメエはただ逃げてるだけだ！！人から何もされなかつた。何ももらえなかつた。だから何だつてんだ！それが怖いなら勝手に優しくするな！期待するな！人のせいにして、逃げ回つて、そんな卑怯者をライバルなんて認めねえ！！」

「・・・。」

「亜鬼十よお？最初にやりあつたとき、俺の過去『見て』樂だつてか？ふざけんじやねえ！どの世界いこうともなあ、生けてりやいろいろあるんだ！樂な人生なんてどこにもねえ！！それでも、俺達は生きてんだ！！！」

「やうやうして、無理して生きてこられて、疲れない?」

「…」

「で終われば、もつ苦しまなくて良いんだよ。」

「やうんなー！」

万里は闇を纏わせた罪歌を振るひ。

黒い影は、雷のような轟音と共に亜鬼十へと奔る。

クリーンヒットした攻撃は、派手な爆発音と爆風を巻き起しつた。
が。

晴れていく土煙の向こうにはボロボロになつた着物のみであつた。

どうだ、と万里は辺りを見回す。

「バンちゃんは…。」

「…？」

「容赦ないなあ

」

「MAGNUM STEP！」

「おつと」

亜鬼十は軽々と攻撃を避け、離れた場所に着地した。ワインレッドの軽装は、まさに戦闘中の軍人である。

「軍人ってのは、嘘じやねえってか？」

「現役だからね。戦争だつて何度も行つたよ。行く度にいろんな人を殺したんだ。敵だけでなく、敵国的一般人も、片つ端からね。」

「！？そ、そのような事、亜鬼十殿に出来るわけがありませぬ！！あんなにお優しい貴殿が、非道の限りをつくしたなど！」

「俺はそういう人間だよ。上官の命令は絶対。必ず遂行するのが、軍人なのだから。変な話だよね？戦つてもない人間を殺さなくちゃいけないんだから。くだらない事に労力使って、効率が悪いと思いませんか？」

「亞鬼十殿、それは・・・本心にいるのか・・・？」

「嘘はつこひないよ。」

「ハアー何にせよ、テメエは俺らを殺すつてんだな?」

「わいこりう」と。

「なら、遠慮しねえぜ。此処で倒れるわけにはいかねえ。」

「やめてぐだされ、政宗殿! 亞鬼十殿も、このようないふとを本望で
あるなど、ありえませぬ!」

「君は理想主義者なんだね。でも、それはゆつきーがいろんなもの
持つてるからだよ。」

「一。」

「神様つてのがいるなら、きっと神様は不公平なんだうね。こいつ
して、持つてる人間と持つてない人間をつべつたんだから。」

「うせえ。マジでうせえー。わいこりう屁理屈ばっか並べて逃げてるな
んか、胸糞悪イゼー!」

「女の子がそんな言葉使つちやダメですよ。マジコさんこまつ怒ら
れちゃいますよー?」

「テメエは俺が止める。」

万里の瞳は赤く輝く。
体の支配を半分罪歌に任せた。

「間違つた方向を正してやるのも、友達の役だろ？」

「そういう変な正義感、俺は嫌いなんで・・・、徹底的に捻り潰します。」

「やつてみやがれッ！卑怯者がよおーーー！」

「偽善者は黙つてくださいー！」

傷口から流れ出る血が、生き物のように動き出した。

スッと上げた亜鬼十の腕に纏わりついて上り、剣の形となつて固まつた。

その瞬間、万里の目の前に現れ斬りかかつた。

反射的に刀で受け止めるが、そのまま後ろに吹き飛ばされてしまつ。

「ひおひー。」

「ー。」

吹き飛ぶ中で体勢を立直し地に足をつけた。
そのまま踏み止まり、顔を上げた万里だが、再び亞鬼十の斬激が迫
つていた。

紙一重で避けると、万里は反撃に入る。
しかし、それは簡単に避けきられてしまつ。

「やつぱり凄いのはその刀ですね？『奥州の鞘』とは、よく言つた
ものだ。」

「ー。？」

刀を握る右手首をガツシリと握られ、そのまま亞鬼十の左足が腹部
にきました。

「これが俺との差ってやつですね?」

「・・・はー」

万里の左ストレートが、亜鬼十の右頬にはいった。

「油断してんじゃねえよー!」

ようめく亜鬼十は、万里の腕を放し後ろに下がる。
だが、そのチャンスを逃すことなく、万里の第一撃を腹部に決まつ
た。

「俺も、かいぐつてきた死線は伊達じやねえ！」

「……みたいだね……。」

「！？」

腹部に入つたはずの拳は、亜鬼十の足に受け止められていた。

「経験の差つてやつ」

「うつわ、ムカつく……ッ。」

その瞬間互いに動いた。

拳を踏み台にした亜鬼十が、もう片方の足で万里の顔面を狙つた。

万里は寸前で身を引き、掠めた。

だが、思いつきり蹴つた勢いで背を向けるかたちになつた亜鬼十に、隙ありとばかりに刀を突き刺そつとする。

キンッ！

亜鬼十の剣が罪歌を受け止めた。

「後ろに田であるのかよ！」

「まつさかーー！」

激しいぶつかり合いと共に散る火花は、二人の攻撃の凄まじさを表していた。

二人の攻撃の隙のなさに、政宗たちはただ見る事しか出来ない。幸村も、槍を握り締めるものの、人とは思えない身のこなしに見入ってしまっていた。

亜鬼十とはこの一月ほど鍛錬をともにしていた。

組み手であろうと、一度として勝てたことがない。

そんな彼女が、今万里とやり合ひ、本気を見せている。

もしかしたら、まだ本気でもないのかもしれない。

「万里ーー！」

「！？」

思考に耽つた幸村だが、政宗の声に我に返つた。

「園原殿！！」

「万里ーッ！」

「ガツ・・・！」

地にたたきつけられ、口から血を吐く万里。

「不良の喧嘩では、強いんだろうね？」

「な、にが、言ひてえ・・・・！」

「殺しと喧嘩は全くの別物って言いたいんだよ。」

万里は手から離してしまった罪歌に手を伸ばした。

だがその瞬間、その手に激痛が走った。

万里は燃えるような痛みに叫喚する。

手の甲は、亜鬼十の剣に貫かれ地面に突き刺さっていた。

「亜鬼十、テメエ・・・ツー...」

「やめてください、亜鬼十殿ツー...」

「何がどうなつてんだーー？」

「前田殿ー、沢殿ー...」

「慶ちゃんも来てたんだ？おひかー。」

亞鬼十は剣を引き抜き、万里の胸倉を掴んだ。

多大なダメージに動けない万里は、そのまま抵抗も出来ず投げられてしまった。

その先で、政宗が受け止め万里の名を呼ぶ。

「うるせえ……と言つ万里だが、その声はかなり弱々しい。

「亞鬼十、何やつてんだよ?」こんな・・・!みんなお前を助けに來たんだ!」

「助け?」

「やつだ。皆、お前が心配で・・・。」

「・・・違うよ。誰も、『私』を見てくれない・・・。」

「・・・?」

「慶ちゃんは、とても上手いよ。人の本質を見極めるのが、とても上手い。そんなあなたなら、何となく分かるんじゃないですか?」

「・・・。」

「口一と笑う亜鬼十。

その笑顔には何か黒い邪氣を感じる。

とても冷たく、とても怖い……。

対して慶次は、背筋が凍る思いをしながら、一切亜鬼十から目を離さなかつた。

「俺は……、俺はお前の過去とか、気持ちとか、はつきり分から
ない。でもさ、あなたはこんな事望んでやつてないんだろ?」

「何言つてゐのかな?俺はこの世界にあるものの全てを消したいと思
つてる。」

「嘘だ!アンタはそんな事思つちゃいない!」

「……。」

「アンタは、勘違いしてる!アンタを見てる奴は、たくさんいるじ
やねえか!アンタが鍛えた新兵も、鬼御子も、忍の姉ちゃんも、敏
春も、ここにいる奴らも、みんなお前を見てる!」

• • • o

「亜鬼十殿は、どうして自分が一人であると思うのだ？前田殿の言うとおり、亜鬼十殿を見ておる者はたくさんおりますぞ！」

「・・・違う・・・。」

「違ひませぬ！某たちが今見ているのは、貴殿でござるー。」

「違う、違うんだ……っ！」

一
亞鬼十殿！

「それは全部、兄さんのものだから！！」

۱

兄さんは生きてる。

生きてる。

俺だから、亞鬼十は俺だ。

俺が、亞鬼十。

死んだのは、私。

死んだ。

死んだ。

昔、ずっと前に、死んだ。

兄さんが生き残った。

母さん、喜んだ。

兄さん生きてたから。

私が死んだから。

私が戻つたら、母さんは叫んだ。

母さん、殺す。

私、殺された。

何度も、殺す。

何度も何度も何度も何度も・・・、何度も刺した。

殺した。

血がなくなるまで、刺した。

痛みがなくなつても刺した。

死んでも殺した。

何度も殺した。

繰り返す。

『亜鬼十』といふ仮面を被る彼女は、繰り返し言い聞かせる。

頭の中で、繰り返し続ける。

それが真実であるとでも言つよつて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0964q/>

戦国BASARA ~白き鬼姫物語~

2011年4月9日11時46分発行